

るまで長い平和な一つの生活と、眠りのやうな穏やかな死とを作り出してゐる。

此處では、一年の廻轉が正確に、何の波瀾もなく行はれてゐる。曆の示すところによると、三月には春が来る。汚ない小川が彼方此方の丘から走り出す。地面は溶けて温かい水蒸氣が煙のやうに漂ふ。百姓は短かい毛皮の外套を脱ぎ棄て、シャツ一枚になつて戸外に出る。そして片手で眼を覆ひながら、長い間太陽に見惚れ、満足さうに肩を窄める。それから彼は逆さまになつてゐる荷車の一方の轆を引つ張つたり、も一方の轆を引つ張つたりして荷車を曳き出し、また覆の下になつてゐる鋤を樂しさうに見たり、足で蹴つたりしていつもの仕事の仕度に取りかゝる。

春の吹雪が突然にやつて来て、田畑を覆うたり、木の枝を折つたりするやうなことはない。かと冬は、犯し難い冷やかな美人のやうに、今言つた春暖の季節まで、屹度其の性質を保つてゐる。かと言つて怒つて時ならぬ暖氣を送ることもなければ、聞いたこともないやうな酷寒を遣はして苦しめることもない。いつも自然が命ずる普通の順序で去來する。

十一月になつて雪が降り出して寒くなる。その寒さは洗禮祭頃は非常に強くなつて、百姓が一寸でも百姓屋から出やうものなら、屹度頸鬚に霜を附けて歸つて来る。が、二月になると鋭い鼻は、最う空氣の中に柔らかな氣流を感じて、春の近づいたことを知る。

けれども、この國の夏は、殊に美はしい夏である。こゝでは、殆んど晴天ばかり續く三ヶ月間は、檸檬や桂樹などではなく、たゞ、苦蓬や、松や、木莓などの匂に満ちた爽やかな、乾いた空氣を求めなければならぬ。

ればならぬ。こゝでは焼くやうな太陽の光ではなく、軽く暖める晴々しい日を求めなければならぬ。晴やかな日が来ると、三四週間ぐらゐは續く。こゝでは晩方になると鶉が鳴く。夜は息苦しい。星は空に愛想よく、そして親しく瞬いてゐる。

雨が降つても——實に難有い夏の雨である。元氣よくどしゃくを降り灑ぎ、愉快さうに跳ね返る。丁度突然喜びに會つた人の大粒な熱い涙のやうである。が、降り止むと直ぐに——太陽は再び晴やかな愛の微笑で野や小丘を見ながらそしてそれを乾かす。全地上は再び幸福の微笑を浮べながら太陽に答へる。百姓は喜んで雨を迎へる——『雨は濕ほし、お日様は乾かす！』と百姓は言ひながら、暖かい驟雨の下に、樂しさうに顔や肩や脊中などを曝してゐる。

夕立も怖ろしくはない。たゞ此の地を惠むだけである。そして必ず一定の時期から始まつて、土地の人の有名な傳説を保たうとでもするかのやうに、決してイリヤの日を忘れない。雷鳴の度數も、強さも毎年同じくらゐで、丁度國庫から全國に出す電氣の一年分の量が定つてゐるかのやうである。

この國では、怖ろしい嵐や、破壊などを聞くことがない。

誰も神に祝福されたこの地方にさう云ふことがあつたと云ふことを一度でも讀んだものはない。若し百姓のマリーナ・クリコワと云ふ二十八歳になる寡婦が一度に四人の赤兒を生みさへしなければ、この國のことに就いて決して何にも印刷されなかつたらうし、又何事も聞いた者もなかつたに違ひない。がこの出來事に就いて此の土地の者は何うしても黙つてゐることが出来なかつたのである。

神がこの地方をエヂプトの流行病や、普通の病氣などで罰するやうなこともなかつた。此處に住んでゐた者は誰も怖ろしい空中の現はれや、火の玉や、突然に暗くなるやうなことを見もしなければ、又記憶してもゐない。こゝには害蟲も来ない。蝗もこゝへは飛んで来ない。吼る獅子もゐなければ、呻る虎もゐない。熊や狼さへゐない。林がないからである。野や村を、たゞ牝牛が欠伸をしながら、羊が叫びながら、牝鶏が鳴きながら逍遙つてゐるだけである。

詩人、若くは空想家はこの平和な國の自然に満足したか何うか分らない。斯う云ふ人達は、誰も知つてゐる通り、月を見たり、鶯の啼音を聞いたりすることが好きである。斯う云ふ人達は、薄黄色い雲の中に飾られ、木の枝を透かし、銀のやうな火の束を自分を崇拜する者達の眼に浴びせかける月の魅力を愛してゐる。が、この地方の人は誰も月が何んなものであるかを知らなかつた。で、皆な月をお月様と言つてゐた。この月は親切に、眼を見開いて村を見てゐるやうであつた。野原は磨いた銅の金盥によく似てゐた。詩人が感激の眼でこの月を見ても何の役にも立たない。月は矢張り冷淡に詩人を見るだけで、それは

丁度圓顔の田舎美人が都會の情熱的な情夫の意味深い視線を見返すやうなものである。この地方では鶯の聲も聞くことが出来ない。こゝには木蔭の多い休み場がなく薔薇が植ゑられてゐない爲めらしい。その代り、鶉は非常に多い！ 夏に、穀物を收穫する時分になると、子供達は鶉を手捕にさへする。

悪風は、此の地方の住民の氣風に浸んでゐなかつたのだ——鶉はこの地方では、食物と思はれてゐない小鳥であつた。鶉は此處では、その歌で人の耳を樂しませるだけである。だから殆んど何の家でも、軒の下には、網で造つた鳥籠の中に鶉を入れて懸けて置くのであつた。

詩人と空想家とは、この地方の一般に質素で、無邪氣な光景にさへ満足することが出来ないに違ひない。彼等はこゝにスウヰツルやオランダ趣味の夕暮を見ることは出来ない。さう云ふ夕暮になると、自然全體は——林でも、水でも、百姓小屋の壁でも、砂山でも——皆な濃紫色の夕映に燃えてゐるやうである。さう云ふ夕暮になると、この濃紫色の畫布の上に、曲りくねつた砂地の路を通つてゐる騎馬武者の群が劃然と影づけられる。この騎馬武者達は婦人達を連れて荒れ果た廢墟に散歩に行くのである。つまり堅固な城砦に急ぐのである。其處では祖父から聞かされた二つの薔薇の戦に就いての挿話が彼等を待つてゐるのである。それから夕餐に行く山羊、若い娘が琵琶を弾きながら歌ふ俗謡——斯う云ふものは皆な、ウオタア・スコットの筆が豊かに私達の想像の中に入れる光景である。

この地方を形造つてゐる三つ四つの村にある凡ては、何んと云ふ静かなことで、又何んと云ふ恍然としたことだらう！ これ等の村々はお互に遠く離れてゐないので、丁度偉大な手で偶然に投げ出され、種々な方面に撒き散らされて其のまゝになつてゐるものゝやうである。

一軒の百姓屋などは、何時か窪地の崖が崩れた爲めに、家の半ばは宙に浮んでゐて、三本の棒で支へ

られてゐる。その中には三四人の家族が静かに、幸福に暮してゐる。牝鶏でさへその家の中へ入るのが怖ろしいくらいであるのに、その中には頑丈な百姓のオニシム・ススローフと云ふ男が妻と一緒に住んでゐる。その男は自分の住家の中で身體をぐつと伸ばすことも出来ない。

何んな人でもオニシムの小屋に入ることは出来ない。初めて訪ねて行つた者などは「林の方にその小屋の裏を向け、自分の方に表を向けること」を頼むくらゐである。

この小屋の上り段は窪地の上に懸つてゐたので、それに片足をかけるには、一方の手で草を掴み、片手で小屋の軒を掴んで、それから眞つ直ぐに上り段を上らなければならぬ。

も一軒の百姓屋は燕の巢のやうに小丘に粘着いてゐた。此處には偶然に三軒の小屋が並んでゐた。が、

その中の二軒は窪地の底に立つてゐた。

村の中はいつも静かで、恍然としてゐる。人聲のしない百姓屋は開つ放されてゐる。一人も人影は見えない。たゞ蠅だけが黒雲のやうに飛んでゐる。そして蒸れた空気の中でブン／＼呻つてゐる。

小屋の中に入つて大聲で叫んでも何にもならない。答へるものは、たゞ死んだやうな沈黙だけである。

尤も或る小屋の中にだけは、病人の呻り聲か、或は一生涯煖爐の上で送つてゐる老婆の微かな咳か、聞えることがある。或は又衝立の陰から裸足で、頭髮の長いシャツだけを着た三歳ばかりの子供が匍ひ出し、黙つて凝つと入つて來た者を見て再た怖々と隠れることもある。

この深い静寂と平和とは野原にも横はつてゐる。たゞ處々の黒い烟に、暑氣に焼かれてゐる百姓が、

鋤を曳いたり、汗を流したりしながら、蟻のやうに蠢々してゐるだけである。

静寂と亂し難い平靜とは、この地方人の氣風をも支配してゐる。こゝには掠奪も殺人も怖ろしい偶然な出來事もなかつた。強い情慾も大膽な計畫もこゝの住民達を掻き亂すことはなかつた。

何う言ふ情慾と計畫とが彼等を掻き亂すことが出來ようか？こゝの人は皆な自分自身を知つてゐた。この地方の住民の生活は他の人達の生活とは全く没交渉であつた。近所の村々でも、一郡の市街でも、こゝから二十五露里、若くは三十露里くらゐ離れてゐた。

百姓達は一定の時期に、穀物を近くのウォルガ河の船着場に運び出した。その船着場は百姓達のコルヒードであり、ヘルクレスの圓柱であつた。それから又、年に一度、或る百姓達は市場に出かけて行つた。彼等にはこれ以外に誰にも接する機會がなかつたのである。

彼等の興味は彼等自身に集められてゐた。そして他の人の興味には接觸しなかつた。

彼等は自分達のとこから八十露里ばかり距てた所に（縣）、即ち縣の市街があることを知つてゐた。が、彼等の中で其處へ行く者は滅多になかつた。彼等は又、もつと遠くにはサラトフ、或はニージニイがあることを知つてゐた。モスクワやピーテルなどがあり、ピーテルから先にはフランス人や獨逸人などが住んでゐて、その先は、彼等も昔の人が思つてゐたやうに、暗黒世界であり、怪物や、二頭の人間や、巨人などが住んでゐる怪しい國であると聞いてゐた。それから先は眞つ暗で、愈々世界の盡きた所には一匹の魚が居つて、それが地面を脊負つてゐるのだと思つてゐた。

それから、こゝを殆んど誰一人として通る者がなかつたので、従つて此の土地の者は何處からも世界に行はれてゐる新しい出来事を知ることが出来なかつた。尤も彼等は木製の食器を持った旅商人が二十露里くらゐ距てた處に住んでゐることを知つてゐたけれども、其れ以外は知らなかつた。彼等は自分の生活状態を何物とも融合することさへ出来なかつた。自分等は楽しく生活してゐるか何うか、自分達は富んでゐるか、貧しいか、また他の人が有つてゐるものを望むことが出来るか何うかと、自分と他人とを比較して考へることも出来なかつた。

で、幸福な人達は、それ以外の生活をすべきものではないし、又出来ないと思ひながら、他の人達も皆な自分達と同じ生活をしてゐるものと考へ、それ以外の生活をするを罪だと信じてゐた。たとへ誰かゞ、他の或る人達は、他の方法で耕したり、蒔いたり、刈入れたり、商賣したりしてゐると言つて聞かせても、彼等はその言葉を信じないに違ひない。彼等は何うしても、外の情慾や昂奮を感じることが出来ないであつた。

他の人達にあるやうに、彼等にも心配や弱點や年貢の滞納や懶惰や睡眠などがあつた。けれども、こ

れらは皆な彼等にとつて面倒なものでもなければ、彼等の血を波立たせるものでもなかつた。

最近五年間に、數百人の百姓の中に、無理に死んだ者は勿論、自然に死んだ者さへ一人もなかつた。またたとへ誰かゞ老衰の爲めか、或は老病の爲めかて永久の眠りに就いた者があつても、その後は長く斯う云ふ異常な出来事に驚くやうなことはなかつた。

殊に彼等は、斯んな事があつても、例へば鍛冶屋のタラースが自分の小屋に火を放つて、其の中で焼け死なうとした爲め、彼に水をかけて助けなければならぬ事があつても、別段驚きもしなかつた。

犯罪の中でもたつた一つ、即ち豌豆や人參や燕などを盗んで野菜畑を荒すことが非常に流行つたこと、或る時、突然二匹の豚の兒と一羽の牝鶏とが行衛不明になつたこと、が——この地方全體を驚ろかした出来事であつた。が、これも皆なは前の日に木製の食器を持つて市場に行つた旅商人の所爲にしてつた。兎に角、有ゆる偶然な出来事は滅多になかつた。

けれども或る時、村端れの堀割の中の橋の傍に一人の行倒れ人を見附け出したことがあつた。それは街へ行く人達の仲間から紛れた者らしかつた。

一番最初にその行倒れ人を見附けた子供達は、吃驚して村に駆け戻り、怖ろしい蛇か怪物か堀割の中に横はつてゐたと告げ、それが自分達を追ひかけて来て、も少してクジカを喰はうとしたと附け足した。

百姓達は甲斐々々しく三叉や斧などを持つて、どや／＼と堀割に押しかけて行つた。

『お前達、何處へ行くだ？』と、老人達が訊いた。『何とぼけてるだ？ 何をするつもりだ？ 詰らねえことするなよ。誰もお前達を追ひかけてゐやしねえ。』

けれども百姓は駈けて行つた。堀割から三四町程のところまで行くと、種々な聲で怪物を呼んで見た。が、答がなかつた。百姓達は立ち止つたが、やがて再た進み出した。

堀割の中には一人の百姓が小高い處に頭を凭せかけて倒れてゐた。彼の傍には袋と棒とが横たはつてゐた。その棒には二足の草鞋が突きかけてあつた。

百姓達は傍に近寄らうともしなければ、又觸らうともしなかつた。『おい、おい！兄弟！』と、百姓達は交る交る叫んだ。中には後頭部を搔く者もあれば、背中を搔く者もあつた。『何うしてお前はそんな處にゐるのだ？おい、おい！何うして其處にゐるんだ？』

行倒人は身體を動かして頭を揚げようとしたが、揚げられなかつた。見たところ、この男は病氣をしてゐるか、それともひどく疲れるかしてゐるらしかつた。

一人の百姓は三又で行倒人を揺らうとした。『よせ、よせよ！』と、多勢の者は叫んだ。『分つてらア。見ろ、ちつとも動きやしねえ。あれに違ひない……おい、おい、觸るなよ！』

『歸らう。』と、或る者は言つた。『全くだ、歸るべえ。何んであんな者に構ふだ？困つてる者だよ！』皆なは老人達に、堀割の中に土地の者でない者が倒れてゐて、少しも動かない。何うしたのか分らないと言つて村に歸つた。

『土地の者でなければ、構はんがいゝだ！』と、老人達は土堡に坐つたまゝ、兩膝を膝について言つた。『打捨つて置くがいゝ！何にもばたゝ／＼することねえだ！』

オプローモフが突然夢の中で運ばれて行つた處は、斯う云ふ處である。彼方此方に撒き散されたやうな三つ四つの村のうちで、一つはソスノーフカと云ひ、一つはワツイ

ローフカと云つて、その間は一露里ばかり距たつてゐた。

ソスノーフカとワツイローフカとはオプローモフ家代々の遺産なので、一般にオプローモフカと呼ばれてゐた。

ソスノーフカには主人の家や事務所などがあつた。ソスノーフカから五露里ばかり距てた所にウエルフリヨウオと云ふ小村があつた。矢張り以前はオプローモフ家の領地であつたが、餘程昔から他人の手に渡り、その村の處々に散在してゐる幾軒かの百姓屋も他人の手に渡つてゐた。

この村は此處に一度も來たことのない金持の地主の所有になつてゐて、一人の獨逸人が其處を支配してゐたのである。

これがこの地方全體の地理である。

イリヤ・イリイチは或る朝、自分の小さい蒲團の中で眼を醒した。彼はたつた七歳で、たゞもう愉快な楽しい心持を感じてゐた。

彼は愛らしく、美しく、そしてまん丸く肥てゐた。頬も丸々してゐて、他の惡戯兒が故意と服らしても、とても彼のやうにはならない程であつた。

乳母が彼の眼醒を待つてゐた。彼女は彼に靴下を穿かせようとしたが、彼は穿かうとせず、ふざけたり、兩足をばた／＼させたりした。乳母が彼を捉へると、二人はハ、ハ、と笑つた。

遂々乳母は彼を立たせた。彼女は彼の顔を洗ひ、頭髮を梳つて、母親のそこへ連れて行つた。

オプロモフは疾くに死んだ母親を見たので、夢の中でも喜ばしさと、母親に對する熱い愛情とで身
慄をした。眠つた彼の睫毛の下からは二粒の温かい涙が徐かに溢れ出て、凝つと止まつた。

母親は彼に情熱的な接吻を浴せかけ、やがて食べるやうな、心配さうな眼附で、彼の眼が曇つてゐない
かと彼を見廻はしたり、何處か痛くはないかと訊いたり、又乳母には彼が安らかに眠つたかとか、夜中
に眼を醒ましはしなかつたかとか、眠つたまま、藻掻きはしなかつたかとか、發熱しやしなかつたかなど、

聞き訊し、それから彼の手を取つて聖像の前へ連れて行つた。

其處で母親は跪まづき、彼を片手で抱いて彼に祈禱の文句を讀み聞かせた。

子供は茫然としてそれを繰り返して、たゞ窓の方ばかり見てゐた。其處からは涼しい空氣と、連翹の匂
とが流れ込んで來るのであつた。

『お母さん、今日散歩に行きませうね?』と彼は、祈禱中に突然訊いた。

『坊や、行きませうね。』と、母親は狼狽て言つた。が、聖像からは眼を放さずに急いで祈禱文を讀んで
了つた。

子供は氣情さうにそれを繰り返したが、母親は祈禱に自分の全心を打ち込んでゐた。

それから二人は父親のそこへ行き、次にお茶を飲みに行つた。

茶卓の傍には、オプロモフ家で餘生を送つてゐる年老いた叔母がゐた。年齢は八十で、絶えず自分の
女中を怒鳴つてゐた。女中は年齢の所爲で頭を慄はせながら叔母の椅子の脊後に立つてゐた。其處には

なほ、父親の遠い親戚に當る三人の年老いた女と、少し氣の變な母親の兄弟と、七人の小作人を持つた
地主で、オプロモフ家にお客に來てゐたチエクメーネフと、それから何處かのお爺さんやお婆さん達
とがゐた。

これらの人達も、オプロモフ家の召使達もイリヤ・イリイチを掴まて愛嬌と讚辭とを浴せかけた。
で、彼は頼まない接吻の跡を拭く暇もなかつた。

その後、皆なは彼に丸パンや乾パンや杏などを食はせ始めた。

それから母親はまた彼を撫でたり、接吻したりして、庭や屋敷内や草原などに散歩に遣つた。遣る時、
乳母に彼一人にしてはならないことや、馬だの犬だの山羊だの傍へ近づけてはならぬことや、家の遠
くへ遣らないことや、殊に怪しい噂のある、村の中で一番怖ろしい處とされてゐる窪地へ遣らないこと
などを厳しく言ひ含めた。

窪地には、或る時、人に近よらないので狂犬だと言はれた犬が現はれたことがあつた。百姓達が三叉
や斧などを持つて犬を殺しに行くと、犬は何處か山の中に姿を消して了つた。その窪地は芥捨場で其處
には盜賊や狼や、其他この地方ばかりか、世界中にゐない種々な怪物などが現はれると思はれてゐた。

イリヤは母親の注意を待つてゐなかつた。彼は最う疾くに屋敷に出てゐた。

彼は初めて出たやうに嬉しい驚愕を感じながら、親の家を見たり、その周圍を駆け廻つたりした。家
の傍には歪んだ門があつた。その門の眞中には木製の小屋根が載つてゐた。小屋根の上には緑色の苔が

生えてゐた。それから揺々する上り段もあれば、種々な建附もあり、また荒れた庭もあつた。彼は家全體を傾けてゐる釣露臺の上に駈け上つて、川の流を見たがつてゐた。が、この古い露臺は漸く釣下つてゐるくらゐなので、(召使達)だけはその上を歩くことが出来たが、主人達は禁じられてゐたのであつた。

彼は母親の注意には氣も止めずに、最う危ない階段の方へ行かうとしてゐた。ところへ上り段の上へ乳母が現はれて、辛つとのことで彼を捉へた。

彼は乳母を振り放して枯草の積場に行き、急な梯子を昇つて其の上に登らうとした。乳母が積場へ行き着いた時には、最う彼は鳩小舎まで登つて鳩の巢を壊し、家畜小舎に入り、それから何うだらう——窪地にも行かうと考へてゐる所であつた。

『あら、まア、何んてえ子供だらう、まるで獨樂のやうだ！もし、坊ちやま、溫柔しくなさらなけりやいけませんよ！』と、乳母は言つた。

毎日毎夜乳母は心配したり、駈け廻つたりしてゐた。或時は叱つたり、或時は非常に喜んだり、彼が落ちはしないか、鼻を撲ちはしないかなどとびく／＼したり、彼の子供らしい無邪氣な愛嬌に感じたり、彼の將來の遠いのに茫乎とした悲しみを覺えたりしてゐた。乳母の心はこれだけで鼓動してゐた。この老婆の血はこの波立で温ためられてゐた。彼女の眠つたやうな生命は、この波立で辛つと保たれてゐた。彼女の生命はこの波立がなければ、疾くの昔に消えて了つてゐたかも知れない。

けれどもイリヤ・イリイチはいつも亂暴ではなかつた。時によると、彼は靜かに乳母の傍に坐り、凝つとして周囲を見てゐることがあつた。彼の子供らしい智慧は、彼の前に行はれてゐる有ゆる現象を觀察してゐるのであつた。その現象は彼の心の奥深く落ち込み、やがて彼と一緒に生長し、成熟するものであつた。

莊嚴な朝であつた。戶外は涼しかつた。太陽はまだ高くはなかつた。家からも、木からも、鳩小舎からも、露臺からも——凡てから長い影が遠く走つてゐた。庭にも、屋敷内にも、沈思と睡眠とを誘ふやうな涼しい蔭が出来てゐた。たゞ遠くにある裸麥の畑だけは、丁度火のやうに燃えてゐた。川も眼を射るやうに太陽の光を受けて光り輝いてゐた。

『乳母や、そこは暗くつて、彼方は明るいのは何故だい、彼方も明るくなるだらうか？』と、子供は訊いた。『お坊ちやま、あれはね、お日様がお月様をお迎へに行つても、お月様がゐないものだから、あんなに顔を撃めるのですよ。けれど遠くからでも會ふと、もうあんなに輝やかしくなるのです。』

子供は考へ込みながら、矢張り周囲を見てゐた。彼はアンティープが水波に行くと、地上にも彼と並んでも一人アンティープが歩いてゐるのを見た。彼にはそのアンティープが眞物より十倍も大きく、その樽が家ほど大きいやうに思はれた。馬の影は草原全體を覆ひ隠し、たつた二足で草原を通つて、俄かに山の彼方に行つて了つたが、アンティープはまだ屋敷を出てゐなかつた。

子供も矢張り二足歩いて、なほも一足すると——山の彼方に行つて了つた。

彼は山に行つて、馬が何處へ行つたか見極めたかつた。で、彼は門の方へ行つたが、窓の中から母親の聲が聞えた。

『乳母や！御覽んよ、子供が日向へ駆け出たじゃないか！日蔭に連れて来なさい。頭を日にあてると――頭痛がして、吐きたくなり、食事が出来なくなつて了ふ。そんな守のしかたをしてゐると、子供は窪地へ行くよ。』

『おや！甘たれつ兒が！』と、乳母は彼を上り段の方へ抱へて来ながら靜かに呻つた。

『おや！甘たれつ兒が！』と、一寸した小さい物でも子供の智識慾の強い注意から迂り去ることはなかつた。家庭生活の光景など彼の心に深く刻み附けられてゐた。彼の柔らかない智力は多くの生々しい實例を

吸収して、知らず識らずのうちに、その周囲の生活から自分の生活要目を作つた。

オブローモフ家の朝は、非常に賑やかであつた。料理部屋でカツレツや青物などを切るナイフの音は、

村中にさへ聞える程であつた。

女中部屋からは糸繰の音が聞えてゐた。それから婆さんの靜かな細い聲も聞えてゐた。それは婆さんが泣いてゐるのか、それとも悲しい歌を言葉なく唄つてゐるのか聞き分けられなかつた。

アンテイーブが樽を持つて屋敷内へ歸つて来ると、四方八方から婆さん達と馭者達とが手桶や馬槽や

水差などを持つて樽の傍に集まつた。

が、彼方では、一人の婆さんが穀倉から粉を入れた茶碗と一山の卵とを持つて料理部屋の方へ行つた。此方では、料理人が窓の中から突然水を振り撒いて、アラーフカにかけた。アラーフカは、朝ぢう眼を放さずに窓の方を見ながら尾を振つたり、口紙ずりをしたりしてゐたのである。

オブローモフ老人も矢張り忙がしかつた。彼は朝ぢう窓の傍に腰掛けてゐて、皆なが屋敷の中で爲てゐることを怠りなく監視してゐた。

『おい、イグナーシカ！馬鹿野郎、何を持つて行くんだ？』と、彼は屋敷内を歩いてゐる一人の男に訊いた。

『下男部屋にナイフを磨ぎに行くのですが。』と、その男は主人の方を見向きもせず答へた。

『よし、持つて行け、持つて行け。だが、よく見て磨げよ！』

それから婆さん呼び留めた。

『おい、婆さん！婆さん！何處へ行くんだ？』

『旦那さま、穴藏へ行きやすだよ。』と、婆さんは立留つて言つた。そして片手を眼の上に翳しながら窓の方を見た。『お晝餐の牛乳を取りにでがす。』

『よし、行け、行け！』と、主人は答へた。『だが、氣を付けて牛乳を零すなよ――おい、おい、ザハ！ルカ、悪戯者奴、再た何處へ駆け出すんだ？』と、主人は叫んだ。『俺が言ひ附けた時に駆け出せばい

い！俺は最うこれで三度お前が駈け出すのを見たぞ。客間へ歸つて居れ！』

ザハールカは再た居睡をしに客間へ行つた。

野原から牝牛が歸つて來ても、老人は心配して先づ牛に水を飲ませる。番犬が牝鶏を追ひ廻してゐるのを窓の中から見てもしようものなら、直ぐに厳格な方法を作つて屋敷内の紊亂を取り締る。

彼の妻君もなか／＼忙がしい。裁縫師のアウエールカに三時間ぐらゐ夫の上衣からイリユーシヤの上衣を作ることに就いて説明をする。自分で寸法書を書いて、アウエールカが布を胡麻化さないやうに見てゐる。それから女中部屋に行つて女中一人々々に一日分のレース編を定めて遣る。次には、ナスターシヤ・イワノウナな、ステパニダ・アガボウナか、或は自分の小間使の中の誰かを呼んで、自分と一緒に實際上の目的の爲めに庭を歩き、林檎が熟してゐないかとか、昨日熟してゐたのが落ちてはゐないかなどと見廻はり、彼方を結び附けたり、此方を切つたりする。

けれども一番重なる仕事は料理部屋と晝餐とのことであつた。晝餐に就いては家族全體が相談をするので、老耄れた叔母までこの相談に呼ばれ、皆な自分の食物を申し出るのであつた。或る者は肉入のスープを申し出、或者は素麵、又は栗の實を、或者は刺身を、或者は赤いソースを、又或者は白いソースを申し出るのであつた。

何んた申し出も皆な一度は相談され、十分研究された上で、女主人の最後の宣告で納められるとも、又退けられるとも定るのである。

料理部屋にはタスターシヤ・ベトロウナやステパニダ・イワノウナなどが絶えず遣られて、これを足すとか、あれを換へるとか言つたり、料理用の砂糖や蜜や酒などを持つて行つたり、料理人が皆な入れやしないかとか、何か抜きはしないかなど注意したりした。

食事の仕事がオプロモフ家では一番大切な生活上の仕事であつた。定期のお祭の爲めには澤山な山羊が飼はれ、澤山の鳥も養はれてゐた！この鳥の爲にも、細密な考へや、仕事や、心配などが必要であつた。聖名祭やお祭に用ひられる七面鳥や雛鶏などは、栗の實で養はれてゐた。雁などには運動を禁じ、お祭の数日前からは袋に入れて掛けて置いた。それは脂を増す爲めであつた。煮たり、鹽漬にしたり、焼いたりした物も澤山貯へられてゐた。オプロモフ家では、蜜や麴酒なども煮られ、丸パンも焼かれた。

斯うして晝前まで醒醒して、皆な忙がしい蜂のやうな元氣のいゝ生活をするのであつた。

日曜日や祭日でも矢張りこの働き好きな蟻共は休まなかつた。さう云ふ時にも料理部屋のナイフの音は、益々忙しく、そして益々強く鳴り響くのであつた。婆さんは平常の二倍もある粉や卵などを持つて穀倉から料理部屋の間を度々往復した。鶏小舎にも一層多くの呻聲が聞え、屠殺が行はれた。大きな丸パンも焼かれた。それを家族の者達は、その翌日も次の日も食べて、その残りを女中達にやる程であつた。斯うして丸パンは金曜日まであるが、遂々一つの堅い塊になり、少しも中實がなくなると、特別の恵みと云ふ體で、アンティープに授けられるのである。アンティープは十字を切りながら、この珍らし

化石したやうな物を熱心にガリ／＼と噛み割り、美食家として丸パン其物を味ふより、寧ろこれは主人の丸パンであると云ふ意識を味はひながら食べるのである。それは丁度好酒家が古い器具の頭骸骨から主人の酒を味はふのと同じことである。

イリヤ・イリイチは何も見通さない子供の智慧でこれを観察してゐた。彼は有益に、忙しい朝が過ぎると、正午と晝餐とが来ることを呑み込んだ。

暑苦しい夏であつた。空には一片の雲もない。太陽は頭の直上に凝つと止まつて、草を焼いてゐた。空氣も流れを止めて凝つと淀んでゐた。木も水も微動さへしない。木と野原の上には、犯し難い静寂が横はつてゐた。萬象は悉く死んだやうであつた。遠くの野原には人の聲が甲高く鳴り響いてゐた。十二三間離れた所には、甲蟲が羽音を發てながら飛んでゐるのが聞えてゐた。繁つた草の中には誰かの躰が聞えてゐた。誰か其處に寝て、甘い夢を結んでゐるやうであつた。

家の中にも死んだやうな静寂が籠つてゐた。一般に晝寢をする時分になつた。

子供は周圍を見廻すと、父親も母親も年老た叔母も召使達も皆な隅々で眠つてゐた。隅にありつかなかつた者は、積草場に行つたり、庭に行つたり、或者は玄關に涼み場を捜し、又或者は蠅の爲めに手巾で顔を覆うて、暑氣を感じながら、晝餐を煮た所で眠つた。庭作も庭の灌木の下にある自分の鋤の傍に長くなり、馭者も馬小舎で眠つてゐた。

イリヤ・イリイチは下男部屋を覗いた。其處でも皆な寢臺や、腰架や床や玄關などに寝てゐた。そし

て子供達を打棄てゝゐた。子供達は屋敷の中を匂ひ廻つたり、砂の中に入つたりしてゐた。犬も疾くから小舎の中へ入つて、幸ひ誰をも吠えなかつた。

だから家中歩いて誰にも會はずに通り過ぎることが出来た。周圍の物なら何んでも盗むことも出来れば、屋敷から戸外に出ることも出来た。若しこの地方に盜賊が横行するやうなことがあれば、誰もその盜みを妨げる者が無いに違ひない。

これは凡てを呑んだやうな、そして何物にも破られない、丁度死のやうな一種の眠りであつた。萬物は死んだやうになつて、たゞ四方の隅々から種々な調子の躰が聞えるだけであつた。

時々誰か急に眠つたまゝ頭を擡げ、吃驚したやうに無意味に兩側を見廻はし、寢返りを打つたり、或は眼を瞑つたまゝ夢現で唾を吐いたり、唇をビチャ／＼鳴らしたり、何か鼻聲で言つて再た寢たりした。

また或る者は前準備もせず突然に自分の寢臺の上に起き上り、貴重な時間を費すのを恐れてもするやうに麴酒の入つてゐる盃を取り、その中に浮んでゐる蠅を盃の片隅に吹きやつた。その時まで動かなくかつた蠅はひどく動き始めた。起きた人は自分の氣分を良くしようと思つて喉を濕ほしたが、再た彈丸が中つた人のやうに蒲團の上に倒れて了つた。

が、イリヤ・イリイチは矢張り觀察してゐた。

彼は乳母と一緒に晝を済してから再た戸外に出た。けれども乳母は子供を打棄つて置いてはならぬいと女主人から厳しく戒められてゐたにも拘らず、睡魔の誘惑に抵抗することが出来なかつた。彼女も

矢張りオプロモフ家を領してゐたこの睡眠病に感染して了つた。

最初彼女は判然とした氣持で子供を見、自分の傍から遠く放さないやうに、駆け廻るのを厳しく叱つてゐたが、やがて傳染病が近づいて来る徴候を感じると、門の外に出てはならないとか、山羊に觸つてはならないとか、又は鳩小舎はとせやに上つてはならないなど、言ひ始めた。

彼女も何處かの日蔭に、上り段か、穴藏あなぐらの入口か、たゞ單に草の上か何處かに腰掛けてゐた。そして靴下を編みながら子供を見てゐるやうに見せかけてゐた。けれども程なく彼女は頭を振りながら子供に注意を與へるやうになつた。

(あれ、あの子を御覽ん。上ろうとしてゐる。あの獨樂は露臺の上に登らうとしてゐる。)と、彼女は殆んど夢現に考へてゐた。(それからまた……窪地へまで)……

すると婆さんの頭は膝の上に屈み、靴下は手から落ちた。婆さんは子供を忘れて了ひ、少し口を開けて軽い鼾をかき始めた。

が、イリヤ・イリイチはもどかしさうにこの瞬間を待つてゐた。この時から彼は獨立した生活をすることが出来るのである。

彼は世界中にたつた一人居るやうであつた。彼は爪立つまぢをして乳母の傍を逃げ出し、誰が何處に眠つてゐるかと言つて見廻し、立ち留つて誰かゝ眼を開けたり、唾をしたり、眠つたまゝ何事か呻つたりするのを凝つと視詰めてゐたが、やがて心臓を躍らせながら露臺に駆け上り、鳩小舎に登り、庭の奥に入つ

て甲蟲の羽音を聞き、それが遠く空を飛んで行くのを見送つた。また彼は何か草の中で鳴いてゐるのに聞き惚れたり、この静寂の破壊者を捜し出して捉へたりした。蠶さつたを捉へてその羽を撈つたり、それが何うするかと見てゐたり、それに藁わらを通して、こんな物を附けて何んな飛び方をするかと見てゐたりした。また彼は蜘蛛が自分の捉へた蠅の血を吸つてゐるのや、憐れな犠牲者がばた／＼しながら蜘蛛の下でぶん／＼翅を鳴らしてゐるのなどを面白さうに息を殺して見てゐたが、遂々犠牲者と迫害者とを殺して了つた。

次に彼は堀割の中へ行き、何かの根を掘り出し、皮を剥いて、それを母親から貰ふ林檎やジャムなどより甘さうに食つた。

彼は門の外に駆け出した。彼は樺林に行かうと思つたのである。彼は其處まで廻り路をしなくても、眞まつ直すぐに堀割や籬や穴などを越えて、五分間くらゐで行けるくらゐに近いものと思つてゐた。けれども彼は其處そこに悪魔や盜賊や怖ろしい猛獸などがゐると云ふことを聞いてびく／＼してゐた。

彼は窪地に駆け出したくなつた。窪地は庭から半町餘りの處にあつた。イリヤ・イリイチは最う其の端まで駆けつけ、眼をしば蔽きながら、噴火口の中を見るやうに窪地を見てゐた。……が、俄かに彼の前にこの窪地に就いての噂や傳説などが現はれた。彼は恐怖に捉はれ、生きた心地を失つて駆け戻り、怖ろしさの餘り乳母に抱きついて婆さんを起した。

婆さんは突然眠から醒め、頭の手巾を直し、灰色の頭髮束かみを指て手巾の下に押し込み、少しも眠らな

かつたやうな風をしながら、怪しさうにイリユーシヤを眺め、それから主人の窓の方を見、彼女の膝の上に横はつてゐる編針を懐へる手で一本々々動かした始めた。

暑さも幾らか弱くなつてゐた。自然の萬象は皆な生々しくしてゐた。太陽は最う林の方へ傾むいてゐた。

家の中の静寂は段々と破れて來た。或る何處かの隅の扉がキーンと鳴つた。屋敷の中には誰かの足音が聞えた。草積場では誰かが噴嚏をしてゐた。

程なく料理部屋から一人の男が狼狽で、身體を重さうに屈げて大きな湯沸を持つて來ると、皆はお茶を飲みを集まつた。或人の顔は皺くちやになり、眼は涙に漂つてゐた。或る男は頸と頸のところ赤い斑點を作つてゐた。或る者は睡さうな妙な聲を出して話をしてゐた。斯う云ふ連中は皆な辛つと我に歸つたやうに溜息を吐いたり、太息をしたり、欠伸をしたり、頭を搔いたり、身慄をしたりしてゐた。

午餐と眠りとは、僅かの渴を生んだのであつた。渴は喉を焼いた。で、皆な十二杯もお茶を飲んだが、それでもまだ渴は癒らなかつた。太息や呻聲なども聞えた。覆盆子水や梨水や麴酒などを皆な飲み始めたが、或者などはたゞ喉の渴を止めるために何かの薬さへ飲んだ。

皆な一種の神罰でも遁れようとするやうに、渴から遁れようとした。皆なアラビヤの沙漠を旅行して何處にも泉を見附け出さなかつた商隊のやうに萎え疲れてゐた。

イリヤ・イリイチは其處の母親の傍に居つた。彼は自分の周圍の人達の不思議な顔を眺め、彼等の眠さうな、萎えたやうな談話に聞き惚れてゐた。彼には彼等を見るのも面白いし、彼等が言ふ種々な空談

を聞くのも珍らしく思はれたのである。

お茶が済むと、皆なそれ／＼の仕事に取りかゝつた。或者は川に行つて、岸の上を徐かに逍遙つたり、水の中にある小石を足で突いたりしてゐた。或者は窓に腰掛けて傍の出來事をつつ／＼見通すまいとしてゐた。屋敷の中を猫が駆け通つても、白嘴鳥が飛んで行つても、その觀察者は、眼と自分の鼻先とでそれらを見送りながら頭を右に向けたたり、左に向けたりしてゐた。犬はよく斯う云ふ風に一日一ぱい窓の上に坐り、頭を太陽に曝しながら通り過ぎる者を皆な注意深く見廻すことを好んでゐるものだ。

母親はイリユーシヤの頭を抱いて自分の膝の上に載せ、徐かにその頭髮を梳りながら、柔らかない頭髮に見惚れたり、ナスターシヤ・イワノウナやステバニード・テイホノウナなどにもそれを讃めさせてゐた。そして彼等とイリユーシヤの將來のことを語り合ひ、彼を自分が作つた一種の華やかな抒事詩の主人公に當て欲めてゐた。女中達はイリユーシヤが黄金の山を作るだらうと言つて讃めてゐた。

が、遂々黄昏になつて來た。料理部屋には再た火の燃える音が聞え、再たナイフのカチ／＼と云ふ音が響き出した。晚餐の仕度を始めたのである。

召使達は門の傍に集まつた。其處からはバラライカや笑聲などが聞えて來た。人々は人捕遊戯をしてゐるのであつた。

が、太陽は最う林の蔭に没して、幾條かのあたゝかい光線を投げてゐた。その光線は火の條のやうに林全體を突き貫き、松の木末に燦々とした黄金の波を注いでゐた。やがて光は、一條々と消えて、最

後の一條は、長い間残つてゐて、細い針のやうに、枝の繁みを貫いてゐたが、それもとう／＼消えてしまつた。

萬象はその形を失つた。萬象は最初灰色の塊に、次に黒い塊に溶け合つた。小鳥の歌も段々と弱くなつた。程なくその小鳥も全く鳴き止んで、たゞ一羽だけ、皆なに反對でもするやうに、全世界の静寂の中に間を置きながら瞬間的に轉つてゐた。が、これさへ段々度數を減らし、最後に響のない弱い聲で叫び、自分の周囲の木の葉を動かして身慄ひをし……そして眠つて了つた。

何も彼も沈黙した。たゞ蝨だけが時々、段々強く鳴いてゐた。地上からは白い水蒸氣が立ち騰つて、草原や川などの上に擴がつた。川も矢張り静かになつた。暫くすると、川の中で、何か俄かに最後の音を立てたが、川は直ぐに動かなくなつた。

濕氣が匂つて來た。益々暗くなつた。多くの立木は怪物か何かのやうな形に塊まつて了つた。林の中は怖ろしくなつた。其處では誰かゝ急に軋るやうな音を發てた。怪物の中の一つが自分の場所から他の場所に移り、乾いた枝が其の足で踏み折られてもしたやうであつた。

空には最初の星が生きた眼のやうに煌々と輝いてゐた。家の窓には燈火が瞬き出した。一様に嚴かな静寂の時が來た。この時は創造の智慧が最も強く働き、詩的の考へが最も盛んに沸騰する時である。この時は心の中に最も生々と情熱が起り、悲哀が最も強くその苦痛を訴へる時である。この時は殘酷な心の中に悪い考への種子が最も反逆的に強く熟する時である。この時はオプロモフカで

は皆な平和に深く眠つてゐる時である。

『お母さん、散歩に行きませうよ。』と、イリユーシヤは言つた。

『お前は何を言つてるのよ！今頃散歩に行かうなんて。』と、母親は答へた。『濕つぽいから足が感胃を引きます。それに怖いのですよ。林の中には今頃鬼が歩いてゐて、小さい子供を見ると連れて行つて了ひます。』

『何處へ連れて行くの？鬼つて何んなもの？何處にゐるの？』と、小さい子は訊いた。

母親は自由に自分の空想を語つた。

小さい子は母親の言ふことを、眠くなるまで、眼を開けたり、閉ぢたりしながら聞いてゐた。乳母が來て彼を母親の膝から抱き上げ、眠つてゐる者の頭を自分の肩に凭せかけながら蒲團の上に連れて行つた。

『さア、これで今日も過ぎた。難有いことだ！』と、オプロモフ家の者達は皆な床に入り、溜息を吐いたり、十字を切つたりしながら言つた。『先づ無事に濟んだ。明日も何うか斯うありたい！神様の御蔭だ、神様の御蔭だ！』

次にオプロモフは他の場合の夢を見た。彼は無限に長い冬の夜、怖々と乳母に抱き附いてゐた。乳母は彼に或る不思議な國の話を囁いてゐた。其處には夜もなければ寒さもない。其處にはいつも不思議な事が行はれてゐる。其處には蜜と乳との川が流れてゐる。其處では一年ぢう誰も何にも爲ない。そし

て毎日イリヤ・イリイーチのやうな立派な若者と、口でも言へなければ、筆でも書けないやうな大勢の美人とがいつも散歩をしてゐるのである。

其處には偉い魔法女が住んでゐて、時々我々の國へシチエーカ（譯者註、河に棲む魚の名）の姿になつて現はれ、一人の静かな恥を知らない戀人、別な言葉で言へば、皆なから辱かしまれてゐる或る一人の懶惰者を選んで、それに種々なことから澤山の寶物を與へる。その男は働かずに食へるし、衣服を着ようと思へば、衣服もある。それからミリトリサ・キルビチエーウナのやうな絶世の美人と結婚をする。

小さい子は耳を欬て、眼を睜つて熱心にその物語に聞き惚れてゐた。

乳母、若くは傳説は斯う云ふ具合に巧みに實際にあることを話の中で避けたので、想像と智慧とは虚譚に感化されて彼が年老るまで彼の奴隷になつてゐた。乳母は正直に馬鹿のエメルの話をした。これは我々の祖先に對する、又我々に對する皮肉で狡猾な諷刺であるらしかつた。

イリヤ・イリイーチは大人になつてから、蜜や乳の川のないことや、さう云ふ魔法女がゐないことなどを知つて、乳母の物語を嘲笑つたが、然しこの嘲笑は眞實のものでなくして竊かな歎息を伴ふものであつた。彼は物語と生活とを混同し、何故物語が生活でなく、生活が物語でないのだらうと無意識の中に悲むのであつた。

彼は知らず識らずミリトリサ・キルビチエーウナのことを空想した。彼はいつもたゞ散歩することだ

けを知つてゐる處、心配も悲哀もない處に心を惹かれてゐた。彼には煖爐の上に横たはり、一度も着たことのない新らしい衣服を着て歩き、優しい魔法女の備へて呉れる食物を食べたいと云ふ心がいつまでも残つてゐた。

● オブローモフ老人もお祖父さんも子供の時分には、乳母や叔父の口から銅版にして代々傳へられたやうな物語を聞いたのであつた。

けれどもイリヤ・イリイーチの乳母は彼の想像に全く別な光景を描いた。

乳母は彼に我國のアヒールやウリスなどの手柄話をしたり、イリヤ・ムーロメツやドープルイニヤ・ニキテイチやアリヨシヤ・ポボウヰチなどの武勇譚をしたり、勇士ボルカンや旅人コレチーシチなどの話をしたり、彼等が露西亞を旅行して、不逞なバスマンの軍勢を亡ぼしたことや、誰か一息で縁酒を満した盃を飲み干して呻らないだらうかと云ふ議論をしたことなどを物語つたりした。それから乳母は悪い盜賊のことや、眠つてゐる王妃達のことや、化石した街と人間とのことなどを話し、遂に我國の幽霊談や、死人のことや、怪物のことや、化物のことなどに話し及んだのであつた。

乳母はホーマーのやうな單純率直な心で、生々として浮刻の繪のやうに、詳しく露西亞のイリアドを子供の記憶と想像との中に入れてしたのである。そのイリアドは人間がまだ自然と人生との危険と祕密とに慣れず、化物や鬼などの前にも慄ひ戦き、アリヨシヤ・ポボウヰチのところに行つて、自分の周圍の不幸を防ぐことを願つてゐた混沌時代に我國のホーマー崇拜家によつて作られたもので、當時は空の

中にも、水の中にも、林の中にも、野原にも奇妙な事ばかり行はれてゐたのであつた。

當時の人は怖ろしい不安な生活をしてゐたのである。人は家の隅から出ることさへ危険で、猛獸に引き裂かれたり、盜賊に切られたり、瘴惡なダツタン人に持物を奪はれたり、行衛不明になつて何の手掛りもなくなつたりするのであつた。

また俄かに天に不思議な前徴が現はれたり、火柱や火玉が現はれたりした。新らしい墓地の上には火が燃えたり、林の中を誰か提灯のやうなものを持つて彷徨たり、さうかと思ふと、カラ／＼と怖ろしく笑つたり、暗闇の中に眼を光らせたりした。

人間と一緒に幾らかの不思議な物も造られたのである。人は長い間、幸福に暮してゐる——何事もない。ところが、突然妙なことを言ひ始めたり、自分の聲で無い聲で叫んだり、夜な夜な眠つたまゝ彷徨つたりする。種々なことで他人を打つたり、敵いたりする。が、斯んなことがある前には、牝鶏が牡鶏のやうに時を告げたり、屋根の上で烏が啼いたりした。

氣弱い人は怖々と人生を見廻はしながら、失望して、自分の周囲の自然と、自分の天性との秘密を探る鍵を想像の中に求める。

が、夢や、永久に靜かな萎え切つた生活や、運動と凡ゆる實際の恐怖と冒險と危険との缺けてゐることなどは、人間に自然界に有り得べからざる他の世界を造らせ、その世界の中に華々しい空想の爲めの快樂と安逸とを捜させ、また現象の動機や原因などの普通の連絡を現象そのもの以外に探させるものらしい。

しい。

私達の憐れな祖先は、手探りの生活をしてゐたのである。彼等は自分の意志を開放しもしなければ、抑制もせず、それでゐて不幸災難があると無邪氣に驚いたり、怖がつたりして、自然の無言で不明瞭な形象文字に原因を訊ねるのであつた。

彼等の出會すその死は、其の前に死人を運び出す時、家から頭を先にして出したが、門から足を先にして出さなかつた爲めに生ずるものであつた。火事は犬が三晩窓の下に来て吠えた爲めに起るものであつた。で、彼等は死人を門から出す時には足を先にして出すやうにした。食事も小さい卓子で済まし、寝るにも草の上におかに寝た。犬が吠えてもすると、屋敷の中から敲き出し、光る木片などは矢張り腐つた床の隙間に投げ込んだ。

當節の露西亞人でも、自分の周囲にある隠謀のない嚴密な、實際の中に、誘惑的な古譚物を信ずることが好きである。今後長い間の信仰から離れることが出来ないことだらう。

イリユーシヤは乳母から「黄金の羊毛——ジャル・ブティーツア」の話や、魔法城の城砦と秘密部屋との話などを聞くと、自分を手柄した勇士に想像して活氣づいたり、——身體ぢうをぞく／＼させた

り、勇士の不成功を歎いたりするのであつた。乳母の物語は無限に流れ出た。彼女は熱心に夢中になつて、所によると感激して生々と物語るのであつた。それは彼女自身がその物語を信じてゐたからである。老婆の眼は火花に燃え、頭は感動の爲めに

慄へ、聲もいつもの調子より高くなるのであつた。

不思議な恐怖に捉はれたイリユーシヤは、眼に涙を湛へながら乳母にしがみついた。

死人が夜中に墓の中から出て來ることや、無理に怪物の犠牲になる者のことや、木の足を附けた熊が、自分の切り放された天性の足を捜して大村小村を歩き廻ることなどの話になると、イリユーシヤの頭髮は怖ろしさに頭の上で慄へた。子供の想像は冷めたり、沸騰したりした。彼は苦しいやうな甘いやうな病的な心持を感じ、その神経は樂器の絲のやうに緊張した。

乳母が淋しい聲で（菩提樹で作つた足よ、軋れ、軋れ。俺は小村を歩いてゐる。大村を歩いてゐる。婆ア共は皆な眠つてゐる。たゞ一人の婆アは眠らずに俺の毛皮の上に坐つて、俺の肉を煮、俺の毛を紡いでゐる）などと熊の言葉を言つたり、熊が遂々百姓屋の中へ入つて、自分の足を奪つた者を捉へようとすることを話したりする時には、イリユーシヤは、身慄をしながらキャツと言つて乳母の手に抱きついた。彼の眼からは、驚きの涙が流れてゐた。同時に彼は、熊の爪に捉はれてゐるのではなくして、寢煖爐の上で乳母の傍にゐると云ふ嬉しさからはムムと笑つた。

イリユーシヤの想像は不思議な幻影に充たされた、恐怖と悲哀とは彼の心の中に長く、いや、永久に根を下したやうであつた。で彼は悲しさうに周圍を見廻はしながら、いつも生活の中に不幸災難ばかりを見出し、いつも悪と心配と悲哀とのない國、ミリトリサ・キルビティエーウナの住んでゐる國、何にもしなくつても甘い物を食はせ、綺麗な物を着せて貰へるその不思議な國のことばかり空想してゐた。

物語はオプローモフカの子供達ばかりでなく、大人にも生活の終まで其の權力を保つてゐた。オプロ

ーモフ家の者も、村中の者も主人やその細君を始め、強い鍛冶屋のタラスまで、皆な暗い夜になると何かに慄々してゐた。何んな木でも、其の時分になると、巨人に變るし、何んな灌木でも、強盜の洞窟に變るのであつた。

ボタンと云ふ窓扉の閉める音や、風が煙突に衝突つて呻る音なども、百姓や女達や子供達を蒼白めさせた。洗禮祭の晩でも十時過になると誰も門の外に一足も踏み出さなかつた。復活祭の晩でも、皆な幽霊の出るのを怖がつて、厩にさへ行けなかつた。

オプローモフカの者は何でも信じてゐた。化物や死人なども信じてゐた。誰か彼等に枯草の塊が野原を彷徨つてゐたと話せば、彼等は考へもせず信ずる。又誰か、それは綿羊ではなくつて、何か他の者だとか、或は何處其處のマルファとかステパニダとか云ふ女は、魔法女だなど、噂すれば、彼等は綿羊やマルファなどを怖がるやうになるのであつた。そして彼等は、何うして綿羊が綿羊でなくなり、マルファが魔法女になつたのだらうと不審を抱くやうなことがないばかりか、誰かそれを疑ひてもしやうものなら、其の者を責めるくらゐであつた。それほどに、オプローモフカの人達が不思議を信ずる信仰は強かつたのである。

イリヤ・イリイチは後で、世界が單純に作られてゐることや、死人が墓から出て來やしないことや、巨人が現はるれば、それを直ぐに牢屋の中に押込んで了ひ、強盜ならば監獄に入れることなどを知つた。

けれども、たとへ彼の信仰そのものが幻影になつても、恐怖と言ひ知れぬ哀愁との或る沈澱物は残つてゐた。

イリヤ・イリイチは怪物から来る災難がないことを知つてゐたが、矢張りそれを忘れることが出来ず、一步踏み出す毎に何か怖ろしいものを豫期してびく／＼してゐた。今でもなほ暗い室に居つたり、或は死人を見たりすると、子供の時分に彼の心に入り込んだ氣味悪い哀愁の爲めに身慄をするのであつた。そして毎朝自分の恐怖を笑つて見るが、晩になると再た着自めるのであつた。

イリア・イリイチはなほ俄かに自分の十三四歳頃の子供の時分を夢見た。彼はオプロモフカから五露里ばかり距てたウエルフリヨウオと云ふ村へ行つて、其處の支配人で獨逸人なるシトリツのところで勉強してゐた。シトリツは田舎貴族の子弟の爲めに餘り大きくない寄宿舎を經營してゐたのである。

彼には自分の息子があつた。アンドレイと云つてオプロモフと殆んど同じくらゐの年齢であつたので、オプロモフの両親はアンドレイの父親に、自分の息子をも頼んだのである。オプロモフは殆んど一度も學問をしたことがなかつたし、それに性來虛弱の方であつた爲め、子供の時分にはいつも紙めるやうにして育てられたので、祖母さんの傍でなく、他人の家で悪戯兒達の間に暮してゐることや、誰も自分に愛想を言つて呉れる者もなければ、誰も自分の好きな丸パンを焼いて呉れる者もないことなどを思つて、いつも竊かに泣いてゐた。

この二人の子供の外に、この寄宿舎には他の子供はゐなかつた。

父親と母親とは詮方なしに甘えツ兒のイリユーシャに學問させるやうにしたものゝ、それは涙と、歎きと、後悔との種になつた。で、彼等は遂々イリユーシャを呼び戻した。

シトリツは凡ての獨逸人のやうに、厳格な活動家であつた。だから若しオプロモフカがウエルフリヨウオから五露里も離れて居れば、イリユーシャはシトリツのところで多分何かを立派に修學し得たに違ひない。が、何うして學問なんかしてゐられやう？ 魅力の強いオプロモフ家の空氣と、生活状態と、習慣とはウエルフリヨウオまでも擴がつてゐた。この村も以前はオプロモフ家の領地であつたのだから、シト、トリツ家の外、何家でも皆な、同じ原始的な懶惰と、單純な風習と、靜寂と、沈滞とを呼吸してゐたのである。

イリユーシャの智力と心とは、彼が始めて書物を見る以前に、最早この地の有ゆる生活の光景や、状態や、風習などを充たしてゐた。が、子供の脳髓にある智慧の種子が斯うも早く發達し始めようと誰が知つてゐたらう？ 子供の心に最初の觀念と印象とが生れたことを何うして見抜くことが出来よう？

子供がまだ辛つと口を利くやうになつた頃であつたらう、いや、まだ全然口の利けない時分、歩くことさへ出来なかつた時分、たゞ大人がどんよりした眼附だと云ふ、凝つと見詰めてゐる無言の子供らしい眼附で凡ての物を見てゐた時分であつたらう、彼は最う自分の周圍の現象の意義や、連絡などを見てゐたし、察してゐた。が、このことは自分にも他人にも氣がつかかなかつたゞけであつた。

イリユーシヤは最う疾くに、自分の傍で大人達が言つたり、爲たりしてゐたことを注意もすれば、理解もしてゐたらしい。彼のお父さんが綿剪絨製のズボンを着き、肉桂製の羅紗木綿のジャケットを着て一日一ぱい、手を脊に組んだまゝ、片隅から片隅へと歩いたり、煙草の匂を嗅いだり、鼻水を流したりしてゐることも、お母さんが珈琲からお茶を飲みに行き、お茶を飲んでから晝餐を食べに行くことも、父親が刈つたり、收穫れたりした麥束が何のくらゐ出来たかを見ようとせせず、刈り残した所を調べようともしないが、彼に手巾を渡すのが少し遅れでもしようものなら、一家の不秩序を怒鳴つて、家中上を下への大騒動が始まることも知つてゐたらしい。

彼の若い智力は、誰でも自分の周囲の大人が生活してゐるやうに生活すべきもので、それ以外の生活は出来ないと云ふことを疾くに決めてゐたらしい。彼として、これ以外に何う決めることが出来よう？が、オプロモフカの大人は何んな生活をしてゐたのだらう？

彼等は、何の然めに生命を享けてゐるのだらう？と、自問したことがあるだらうか？何うだか分らない。又その自問に何と答へたらう？多分、何とも答へなかつたらう。そんなことは彼等にとつて非常に單純明瞭なものやうに思はれてゐたからである。

彼等は所謂苦勞の多い生活に就いて、胸に苦しい心配を持つてゐる人々に就いて、又何故か地上を一方の隅から他方の隅に彷徨うてゐる人々に就いて、或は自分の生命を限りない永久の勞苦に投げ出してゐる人々に就いて何事をも聞いたことがなかつた。

オプロモフカの人々は心の不安を輕蔑して、何處かに、そして何かに憧がれてゐる永劫の希求を生活の範囲に入れなかつた。彼等は情慾の衝動を火のやうに怖れてゐた。他處の人々の身體が、内部的、精神的な噴火作用の爲めに直ぐ燃え出すやうに、オプロモフカの人々の心も何の障害もなく平和に柔らかな肉體の中に溺れることが出来たのであつた。

生活はオプロモフカの人々を、他の處の人々のやうに、時ならぬ皺や、精神上的の打撃や、病氣などで縁どるやうなことをしなかつた。

正直な人々は、その生活を、時々種々な不快な偶然で、例へば病氣とか、損害とか、爭論とか、殊に勞苦とかで破壊される安靜や安逸などの理想に過ぎないと思つてゐた。

彼等は勞苦を、我々の祖先に與へられた罰だと思つてゐたので、それに親しむことが出来なかつた。だからこの勞苦を通れることが出来る場合、又は遁れなければならぬことが分つた場合には、機會があり次第、必ずそれを遁れた。

彼等は決して茫やりした理論上や精神上の問題で自分を苦しめるやうなことをしなかつた。だから彼等はいつとも健康で快活であつた。だから彼等の生命は長かつた。男は四十歳くらゐになつても青年で通つた。老人達は死の苦痛と戦はなかつた。そして身體が利かなくなるまで生き存らへて、靜かに冷たくなり、何時の間にか最後の息を吐き出して、消えるやうに死ぬのであつた。だから彼等は、昔の人間の方が丈夫だつたと言つてゐた。

實際、昔の人は丈夫であつた。以前には子供に、生活の意義を説明したり、生活を一種賢明で嚴肅なものととしてそれへの準備をさせたりすることを急がなかつたからである。又子供を書物で苦しめなかつた。書物は頭の中に無限の問題を生み、問題は智力と感情とを呑み盡して生活を切り詰めて了ふものである。兩親は生活の方式を準備して、それを子供に與へたものだが、その兩親も既に準備された方式を祖父から受け、祖父は曾祖父から受け、斯うしてその方式をウエスタの火のやうに完全に、傷つけないやうに保存すると云ふ約束で傳へたのであつた。代々の祖父の時代に行はれたことは、イリヤ・イリーチの父の時代にも行はれ、今もなほオプロモフカで行はれてゐることだらう？

では、彼等は何を考へ、何に感激し、何を知り、何んな目的を得なければならぬのだらう？ 目的などは何にもない。生活は靜かな川のやうに彼等の傍を流れてゐるのだ。彼等の爲ることは、ただこの川の岸に坐つて、音もなく順々に彼等の前に現はれて來る避け難い現象を觀察すればそれで可いのだ。

で、眠つてゐるイリヤ・イリーチの想像にも、先づ三つの主なる生活作用が、丁度生きた繪のやうに順々に展開し始めた。その作用は彼の家族の中にも、親戚にも、知人にも離れることの出來ないもので、それは誕生と結婚と葬式とであつた。

次には生活の楽しい部分と、悲しい部分、例へば、洗禮日、聖名祭、家庭のお祝、斷肉祭、肉食始、騒々しい午餐會、家族一同の旅行、お客招待、お祝、公然の涙と微笑との場合などの儀式が次から次へ

と現はれた。

それは皆な、正確に、勿體らしく、壯嚴に過ぎ去つた。

彼の頭には種々な儀式の時に知人達のする顔附や身振などから、彼等のせか／＼した忙しきやうな様子まで一つ残らず浮んだ。五月蠅い媒介式でも、莊嚴な結婚式でも、聖名祭でも彼等に遣らせやうものなら、彼等は規定通り、少しも略さずに遣つて除けるのである。誰を何處に坐らせるとか、何を何う云ふ風に與へるとか、誰と誰とが同乗して儀式に行くとか、縁起を守るとか——斯う云ふことをさせると、オプロモフカの者は誰でも決して少しの間違もしてかさないのである。

何處かに子供が生れないと云ふやうなことがあれば、其の地のお母さん連中が、薔薇色の重たい愛の神を持ち廻る。彼等がそんなことをするのは、肥つて白い丈夫な子供が生れるやうにと云ふ禁厭である。

彼等は春が過ぎようと云ふ頃でも、若し春の始めに雲雀を焼かなければ、春を知らうとしない。彼等は何うして春を知らないで居られよう、何うして雲雀を焼かないで居られよう？

其處に彼等の凡ての生活と學問とがあり、其處に彼等の凡ての悲哀と喜悅とがあるのである。だから彼等は他の凡ゆる心配と悲哀とを自分から追ひ拂ひ、他の喜悅を知らないのである。彼等の生活は單にこの根本的な、避け難い事件によつてのみ動いてゐる。その事件は彼等の智力と感情とに無限の食物を與へるものであつた。

彼等は心臓を感激に波立たせながら、儀式と宴會と禮儀とを待つてゐた。次に洗禮を受けさせ、結婚をさせ、人を葬つて、その人と、その人の運命とを忘れ、例の冷淡に沈み、その冷淡から彼等の新らしい場合——聖名祭や結婚などが生じて来るのであつた。

子供が生れるや否や、両親の最初の心配になるものは、出来るだけ確實に、少しも省略せずに、凡て要求される儀式を子供に行ふこと、つまり洗禮の後で宴會をし、それから子供の五月蝨い世話を始める事であつた。

母親と乳母との問題は、健康な子供を作り、寒胃を引かせないやうに、眼を悪くしないやうに、それから種々な不幸に遇はせないやうに子供を守ることであつた。二人は子供がいつも機嫌が良くつて、澤山に食べるやうにと、熱心に世話をするのであつた。

子供が立つやうになると、つまり子供に乳母が要らなくなると、母親の心には、矢張り健康で、血色のいゝ細君を捜さうと云ふ希望が竊かに起る。

再た儀式と宴會との時代が来て、最後に結婚が来る。混沌とした生活全體の中心は此處に在るのである。その次には最う反覆が始まる。子供の誕生、儀式、宴會といふ具合に、葬式によつて贈物が變へられるまでそれが続く。が、それも長くはない。或る人達は他の人達に自分の場處を譲り、子供達は青年になり、同時に花婿になり、結婚をし、そして自分のやうなものを作る——斯うして生活は此の順序によつて、斷れ目のない同じ糸のやうに延びて、墓の傍で跡なく切れてゐる。

尤も何うかすると彼等は他の心配に捉はれることがあるが。オプローモフカの人達は大概犬儒派流にその心配に出會してもびくともしない。で、心配は彼等の頭の上をぐるぐると廻り、小鳥のやうに彼等の傍を飛び過ぎて了ふ。その小鳥は滑らかな壁を目がけて飛んで来た爲め、其處に休み場を見附けるとが出来ないので、固い石の傍でたゞ徒らに羽蔽をしたゞけて、飛び去るのである。

例へば、或る時、吊露臺の一部分が俄かに家の一方から離れて、その壊れ物が雛鶏小舎を埋めたことがあつた。アンティプの妻のアクシーニヤは酒滓を持つてその下に腰掛けてゐたが、丁度それが落る時、幸ひ水に浸ける繊維を取りに行つたので、露臺の下に敷かれることを免かれたのである。

家中には大騒動が起つた。大人も子供も皆な駈けつけて来て、雛鶏小舎の代りに奥さんがイリヤ・イリイチを連れて其處を歩いてゐる時であつたらうか何うだらうかと思つて恐怖を感じた。

皆な溜息を吐き、何うしてそんなことが前以て分らなかつたのだらうと言つてお互に詰責合を始めた。或者はさう思つてゐたと言ひ、或者は修繕させようと思つてゐたと言ひ、又或者は修繕しようと思つてゐたと言つた。

皆な露臺が落ちたのに驚いたが、前の日にはその露臺がよくも斯んなに長い間保つてゐるものだとやつて驚いたのである！

皆なは何う云ふ風に修繕したものかと心配したり、評議したりし始めた。それから雛鶏小舎を惜みながらイリヤ・イリイチを露臺に連れて来ることを厳しく禁じて、徐々と各自の場所に解散した。

その後、三週間経つとアンドリユーシヤとペトルーシヤとワーシカとは、壊れた板や欄干などを納屋へ運んで、路の上に散らかして置かないようにと言ひ附かつた。が、壊れた板や欄干などは春になるまで其處に横たはつてゐた。

オプローモフ老人は窓からそれを見る毎に修繕のことを考へ、大工を呼んで新らしい露臺を作つたがいゝか、それとも壊れ残りを取り崩すがいゝかと相談し、それから大工を家に歸しながら斯う言ふのであつた。

『まア、歸つて呉れ、考へて見るから。』

斯うしてワーシカ、若くはモーテイカが、今朝露臺の壊れ残りに上つて見たら、その角々が壁から離れて、また倒れさうだと報告するまでそのままになつてゐた。

其の時、大工は最後の相談を持ちかけられた。その相談の結果、完全に残つてゐる露臺の一部分を古い木片で暫く支へて置くことに決つた。そして其の月の終までにそれは出来上つた。

『やア！露臺は再た新らしくなつたわい！』と、老人は細君に言つた。『見なよ。フェドーカは巧く丸太を立てたぢやないか。宛然家の入口にある圓柱のやうだ！まづこれで可い。再た暫く保つ！』

誰か老人に、序に門を直し、上り段を修繕しては何うか、でなければ上り段の隙間を猫ばかりか、豚さへ通つて床の下に行けるやうになつてゐると言つた者があつた。

『さうだ、さうだ、直さにやならん。』と、イリヤ・イワノウキチは心配さうに答へて、直ぐに上り段を

見に行つた。

『實際、この通り揺ら／＼して居るんぢやからなア。』と、彼は片足で上り段を搖籠のやうに揺りながら言つた。

『でもこの上り段は作つた時分から揺れてゐやしたよ。』と、誰かが言つた。

『揺れてゐた？そんなことがあるものか。』と、オプローモフ老人は答へた。『修繕もせず十六年の間壊れなかつたんぢやないか。ルカが作つた當座は立派なものだつた！……彼は大工だつたよ、ほんとの大工だつた……死んだがね——天國へ遣りたいものだ！今時の者は冗戯けてばかり居るが、斯んな物を作れやしない。』

そして彼の注意は他の事へ向いた。が、上り段は揺れてゐると云ふのに、今迄壊れなかつたのだ。實際、このルカと云ふ男は偉い大工であつたらしい。

が、主人達が、この後災難や危険などがありはしないかとひどく心配したり、やかましく言つたり、又は怒つたりするのも無理もないことである。

何うしたならばさう云ふ災難や危険を避けることが出来るだらう？直ぐに方法を講じなければならぬ。で、皆なは堀割に橋を架けては何うかとか、庭の一部分を圍つたら何うかとか、そんなことばかり言つてゐた。それは家畜か木を害はないやうにする爲めて、その時分、籬の一部分など地面に倒れてゐたのである。

イリヤ・イワノウヰチは斯んなことまで心配した。或時、彼は庭を歩いてゐる時に、手づから息を切らして籬を起し、庭番に直ぐ二本の杵を立てさせた。籬はこのお蔭で、夏中立つてゐたが、冬になつて雪の爲めに再た倒された。

終には斯んな心配もした。彼はアンテイーブが馬や樽など、一緒に橋から堀割の中に落ちると直ぐに、橋の上に新たに三枚の板を敷き、アンテイーブの傷がまだ癒らないうちに、最う橋は新らしく出来た。牝牛や山羊なども矢張り、籬が再た倒れると、庭の中へ段々入り慣れて、スグリの木を喰ひ、十番目の菩提樹を踏み折り始めた。尤も、林檎には害を加へなかつたが、併し何うしても籬を起した上堀割を作らなければならなかつた。

二頭の牝牛と一頭の山羊とは、現場で捉まつて散々横腹を敲かれた。其處にはいつも蓋布を掛けられなほ、イリヤ・イリイーチは両親の家の大きな暗い客間の夢を見た。其處にはいつも蓋布を掛けられた櫛製の古い幾つかの安樂椅子もあれば、不細工で、頑丈な大きい長椅子もあつた。それは汚點だらけの色の褪せた空色の天鵞絨張で、その外、一脚の大きな、革張の安樂椅子もあつた。

冬の長い夜が来た。

母親は兩足を縮めて長椅子に腰掛け、子供の靴下を編みながら、欠伸をしたり、時々編針で頭を搔いたりしてゐた。

母親の傍にはナスターシヤとペラゲヤ・イグナチエーウナとが坐つて、仕事に鼻を突き附けながら、

イリユーシヤか父親か、それとも自分達かのお祭着か何かを熱心に縫つてゐた。

父親は兩手を背後で組みながら満足さうに室の中を彼方に行つたり、此處に來たりしてゐたが、やがて安樂椅子に腰掛けた。暫く腰掛けてゐると、自分の足音に注意深く聞き惚れながら再た歩き出した。それから煙草の匂ひを嗅いで、それを見たり、再た嗅いだりした。

室の中には魚油で作つた一本の蠟燭が茫やりと燃えてゐた。斯んなことはたゞ冬の夜か秋の夜にしかないことであつた。夏の間は皆な寝ることばかり考へてゐたし、起きてゐるにしても蠟燭がなくとも、晝間の光明で間に合つたのである。

これは、一つは習慣であつたが、一つは經濟からであつた。オブローモフカの人々は手製以外の購入品に對しては極端に吝嗇であつた。

彼等は立派な七面鳥でも、或は十二羽の雛鶏でも、客が來た時などは喜んで殺す。が、乾葡萄酒が餘つてゐても、それを食物に入れはしない。お客が勝手に自分の盃に酒を注がうとでもしようものなら、蒼くなるくらゐであつた。

だから此處では斯んな無作法なことをする者は殆んどなかつた。斯んなことは皆なから一種の狂人と思はれて相手にされない人でなければ爲なかつた。が、さう云ふお客なら第一屋敷に入れやしなかつた。

いや、それは習慣ではなかつた。こゝのお客は三度も薦められなければ決して御馳走に手を附けなかつた。

つた。お客は最初の薦めが多くの場合、最う食物や酒などを要求して貰ひたくないと云ふ願を意味してゐるもので、お馳走しようとするのではないと云ふことを良く知つてゐたからである。

何んな人の爲めにも二本の蠟燭を點けることはなかつた。蠟燭は街で金を出して買ふので、他の購入品のやうに女主人の鍵で守られてゐた。蠟燭の片さへ丁寧に數を算へて保存されてゐた。

兎に角、この人は金錢を費ふことを好かなかつた。いくら或る品物が必要でも、その爲めに費用が餘りかゝらなくても、何う云ふ場合でも非常に惜んで金を出した。多額の金錢を使ふと、それには呻きや、嘆きや、罵りが附き物であつた。

オブローモフカの人々は何んな不利益でも喜んで忍ぶことを承知した。またそれを金錢を費すよりも不利益だと思はなかつた。

だから客間の長椅子も疾くに汚點だらけになつてゐるし、イリヤ・イワノキチの革の安樂椅子もたゞ革製と云ふ名だけで、實は剝木製でなければ、藁製であつた。革はたつた脊のところに一個所残つてゐるだけで、他の側は最う五年も前から斷々になつて落ちてゐた。だから門は歪み、上り段は揺ら揺らしてゐるのらしい。そして何んな必要な品物の爲にでも、一時に二百圓とか、三百圓とか、或は五百圓とか出すと云ふことは、彼等には殆んど自殺のやうに思はれたのである。

田舎の若い地主の一人がモスクワに来て、一打の襯衣に三百圓拂ひ、靴に二十五圓出し、結婚用のチヨツキの爲めに四十圓も使つたと云ふことを聞いた時など、オブローモフ老人は十字を切り、顔に怖れ

の色を浮べながら早口に言つた。(そんな若者は牢屋にでも打ち込むが可い)

兎に角、彼等は資本を敏速に活かして流用することの必要と、努力を要する産業と、産物の交換とに關する政治經濟的の眞理とは疎かつたのである。彼等は單純な心で、資本の唯一の使用法だけを悟つて、それを實行してゐた。それは資本を手箱に入れて置くことであつた。

家の者も、始終来る人も、客間の安樂椅子に様々な態をして腰掛けたり、躰をかいたりしてゐた。主客共に大概は黙り込んでゐた。皆な毎日會ふのである。知識上の寶物はお互に汲み盡し、語り盡したが、新らしい事を外から聞くことは少なかつた。

森然としてゐた。たゞ家の仕事をしてゐるイリヤ・イワノウキチの重々しい靴音が響くだけであつた。なほ柱時計の振子が箱の中で微かにカチ／＼と鳴つてゐた。それからペラゲヤ・イグナティエウナか、或はナスタシヤ・イワノウナか、時々手か齒かて糸を切る音が、深い静寂を破つてゐた。……斯うして、時によると三十分間ぐらゐ過ぎる事がある。すると誰か聲を發つて欠伸をし、口をもぐもぐさせながら『主よ憐み給へ！』と呟く。

その人に續いて、その隣の人が脊仰をする。それから次の人が丁度號令でもかけられたやうに口を開ける。斯う云ふ具合に空氣の傳染的遊戯は、皆なの肺の中を通つて、その時、或る者には涙さへ流させる。

でなければ、イリヤ・イワノウキチが窓の方へ近寄り、戸外を見て、吃驚したやうに言ふ。

「まだ五時なのに、もう戸外は暗い！」

「さうですねえ。」と、誰か答へる。「今頃はいつも暗いです。愈々夜が長くなつて来た。」

が、春になると彼等は、日が長くなるのに驚き喜ぶ。が、何うして日が長くなるのかと訊いても、彼等はそれを知らない。

そしてまた黙つて了ふ。

皆なぶる／＼と身慄をする。

が、誰か蠟燭の燃えさしを除けようとして急に蠟燭を消すと――

「無調法なお客さんだ！」と、誰か必ず言ふ。

何うかすると、その時話がとんちんかんになることがある。

「そのお客と云ふのは誰です？」と、女主人は言ふ。「ナスターシャ・フアドデーウナぢやなくつて？何うか、さうならいゝが！いや、さう、さう、彼女はお祭頃に來やしないのだつたね。それぢや可い鹽梅だ！さうすれば彼女と二人で抱き合つたり、泣いたりするのだが！朝の祈禱や聖餐式にも一緒に行くし……それから何處へ行かう！私は斯んなに若いんだもの、頑固なことを言はなくても可い！」

「だが、彼女は何時此處から歸つたんだ？」と、イリヤ・イワノウヰチは訊いた。「イリヤの日が濟んでからぢやなかつたかねえ？」

「あなた、何を言ふんです、イリヤ・イワノウヰチ、いつもとんちんかんなことばかり言つて！彼女は聖靈降臨祭の前に歸つたんですよ。」と、細君は言ひ直した。

「でも、彼女はベートル祭には此處に居つたぢやないか。」と、イリヤ・イワノウヰチは反對した。

「あなたは何時もそんなことをおつしやるんですよ！」と、細君は詰責るやうに言つた。「言ひ合つても、

あなたが敗けるだけです。」

「でも、何うしてベートル祭に居らなかつたと言ふんだ？その時にはまだ矢つ張り茸入の丸パンを焼いてゐたぢやないか、彼女の好きな……」

「それはマリヤ・オシモウナですよ。彼の女なら茸入の丸パンが好きなんです……もう忘れたのですか！それにマリヤ・オシモウナならイリヤの日までどこか、プロホルとニカノルとの日までも居つたんです。」

彼等はお祭や、四季や、家庭の仕來りなどから時日の計算をしてゐたのである。だから決して、何月何日などは言はなかつた。これは一つはオプローモフの外、他の者達も月々の名稱や、日の順序を取り違へてゐた爲めらしい。

イリヤ・イワノウヰチは敗けたので黙つて了ふ。一坐の者は皆な再た假睡に耽り出す。イリニューシヤも母親の春中に倚りかゝつて居眠つてゐる。時によると、すつかり眠つて了ふこともある。

「さう、さう。」と、やがてお客の中の誰かど深い溜息を吐きながら言ふ。「あの、マリヤ・オシモウナの亭主のワシーリイ・フオミーチは、全く達者な男だつたのに、死にましたよ！六十歳も越さなかつたのに、あんな男は百歳までも生きられるものだがなあ！」

「神様の御召しになる時には、誰でも皆な死にますよ！」と、ペラーギヤ・イグナティエウナは反對した。『死ぬ者もあるが、フロポフさんのとこなんか、洗禮を受けさせるのが間に合はない程です。アンナ・アンドレーウナさんが再た生んださうぢやありませんか——これで最う六人目ですよ。』

「アンナ・アンドレーウナ一人ぢやないんだ！」と、女主人は言つた。『兄弟達が誰かを妻にして、大勢の子供を生むでせう——また心配が大變です！小さい者は大人になつて、矢張り花婿になるし、其處に娘達を嫁にやるでせう。けれど、花婿も随分考へものです。今時の者は皆な持參金を望みますからねえ。何んでもお金で……』

『何のお話ですね？』と、イリヤ・イワノウキチは話し仲間の方へ近づきながら訊いた。

『その話と云ふのは……』

イリヤ・イワノウキチに話を繰り返して聞かせる。

『それが人間の一生ですよ！』と、イリヤ・イワノウキチは誠めるやうに言ふ。『一人が死に、一人が生れ、そして一人が結婚する。けれども俺達は段々年をとるばかりだ。一度過ぎた年も、一度過ぎた日も最う歸つて来やせん！何うしてだらうねえ？毎日は昨日のやうに、昨日は明日のやうにとは行かない！……考へて見りや情ないことだ……』

『年寄は年をとるし、若い者は大きくなる！』と、誰か隅で眠さうな聲で言つた者がある。

『神様にお祈をして、何にも考へないがい！』と、女主人は嚴肅な語調で言ふ。

『全くだ、全くだ。』と、イリヤ・イワノウキチは速口で替々と答へる。彼は哲學を考へ耽りながら、再た彼方に行つたり、此方へ來たりしてゐる。

再た長い間沈黙が続く。たゞ、針で裏表に突き通される糸の軌るやうな音だけが聞える。時々女主人が沈黙を破る。

『ほんとに戸外は暗いこと。』と、彼女は言ふ。『さあ、もうお祭を待つだけだ。お客が来るだらうし、面白いことだ。晩の過ぎるのが分らないだらう。マラニヤ・ペトロウナが來れば、飾附もして呉れるだらうしね！彼女は何んでも工夫しますからねえ！鉛を銚かしたり、蠟を煮たり、門の外に駈け出したりするでせう。私の女中達まで面白がつて、種々な遊びを考へ出すのです……そりや面白いですよ！』

『ほんとに、世慣れた奥さんですよ！』と、話し仲間の一人が言ふ。『三年前には、彼の女は山から下り降りたりして、ルカ・サウウキチなんか肩に傷をしたくらゐですがねえ……』

皆な急にぶる／＼と身慄して、ルカ・サウウキチを見た。そしては／＼と笑ひこけた。

『お前さん、何うしたんだ、ルカ・サウウキチ？さあ、さあ、話した！』と、イリヤ・イワノウキチも言つて、笑ひこける。

皆なも笑ひ續ける。イリユーシヤも目を醒して笑ふ。

『でも、何を話すんです！』と、ルカ・サウウキチはおど／＼しながら言ふ。『そんなことは、皆なアレクセイ・ナウムイチが作つたことですよ。そんなことは些ともありやしない！』

『へえ!』と、皆な同時に彼の言葉を受ける。『でも、そんなことはないさ……俺達は生きてゐるんだからね……その額さ、額さ、今でも傷が見えてゐる……』

皆なは、ムムと笑ふ。

『何うしてお前さん達は笑ふんです?』と、ルカ・サウウキチは笑の斷れ目に言はうとする。『俺は……そんなことありませんよ……皆なワシカの泥棒奴が……古い小櫓を盗みやがつて……彼の女達は俺の下を迂つてゐたんだ……俺はそれを……』

皆なの笑聲は彼の聲を消して了ふ。彼は自分の落ちた歴史を辯解しようとする。笑聲は一座を動かして、玄關の間や女中部屋まで聞える。家全體を覆うて了ふ。皆なその滑稽の時を思つて、長い間笑ふ。オリンピヤの神々のやうに親しく、「何にも言はずに」笑ふ。漸く黙りかけると、誰か再た合を入れる。そして笑を続ける。

遂に辛つとのことで皆な靜かになる。

『何うだ、こんどもお祭の日に迂るかね、ルカ・サウウキチ?』と、イリヤ・イワノウキチは暫く黙つてゐてから訊いた。

再た皆なドツと笑ひ、その笑ひが十分間も続く。

『アンティブカに齋中に山を造るやうに言附けたら何うだらう?』と、オプローモフは再た言ふ。『ルカ・サウウキチは迂るのが大好きなんだから、先生、辛抱出来まいて……』

一座の笑聲の爲めに、オプローモフは自分の言ふだけを言つて了へない。

『その……小櫓はまだありますか?』と、一人の話相手は笑ひながら辛つと言ふ。再た笑ふ。

皆な長い間笑ふ。終ひに段々靜かになる。或者は涙を拭く。或者は噁をする。或者は恐ろしい暖をたり、唾をしたりする。そして辛つと斯う言ふ。

『あゝ、あゝ! 噁が出さうになつてゐるのに……笑はされた。全く罪だ! 彼の人は脊中を上に向け上衣の裾をばら／＼にして……』

すると、最後の大笑が続く。それから皆な黙つて了ふ。或者は溜息を吐き、或者は大聲に何か言ひながら欠伸をし、そして皆な沈黙する。

前の通りに、時計の振子の音と、オプローモフの靴の音と、糸を噛み切る微かな音とが聞える。

俄かにイリヤ・イワノウキチは鼻の先を摘みながら吃驚したやうな様子をして室の眞中に立ち止る。

『困つたことだ! これ、この通りだ!』と彼は言ふ。『死人が出来るかも知れない。俺の鼻先が痒いから……』

『あら、まあ!』と細君は手を拍つて言ふ。『鼻の先が痒い時は、死人ぢやないんですよ! 死人の時は、鼻柱が痒いんです。イリヤ・イワノウキチ、あなたはほんとに忘れっぽい人ですねえ! そんなことを人中か、お客に行つた時にでも言つて御覽なさい——恥かしいぢやありませんか。』

『ぢや、鼻先が痒い時は何んだ?』と、イリヤ・イワノウキチはきまり悪さうに訊く。

『酒が飲めるんですよ。死人があるなんてことがありますか!』

『すつかり取り違へてゐた!』と、イリヤ・イワノウキチは言ふ。『鼻の側が痒い時と、先の方が痒い時と、眉が痒い時とは何う云ふ……』

『側が痒い時は、』と、ペラギヤ・イワノウキチが話を受け取る。『音信があるし、眉が痒い時は、悲しいことがあるし、額が痒いと、謝罪するやうなことがあつて、右の方なら男だし、左の方なら女だし、耳が痒いと雨に遇ふし、唇が痒いと接吻をするし、口鬚が痒いと、貰ひ物を食べるし、趾が痒いと、新らしい處に寝るし、足の甲が痒いと、旅行するんですよ……』

『さうか、ペラギヤ・イワノウキチはなか／＼偉い!』と、イリヤ・イワノウキチは言ふ。『だが、バタが安い處に寝る時には頭の後部か何處か痒いのだつたねえ……』

價くなる時には頭の後部か何處か痒いのだつたねえ……』
婦人達は笑つたり、べちやく／＼饒舌つたりし始める。男の中の或人達も莞爾とする。再た高笑が始まらうとする。が、丁度その時、室の中に、犬が呻るやうな、また猫が喧嘩しようとする時のやうな音が響く。これは時計が鳴つたのである。

『オ!もう十時だ!』と、イリヤ・イワノウキチは吃驚したやうに嬉しさうな聲を出す。『何うです、何時の間にか時間が経つて了つた。おい、ワシシカ!ワニカ、モーティカ!』
眠さうな三人の顔が現はれる。

『お前達は何うして御馳走の仕度をしないのだ?』と、オプローモフは吃驚したやうに、そして又悲しさうに訊く。『何してお客のことを考へないのだ?何故立つてゐる?速く火酒を持って来い!』
『それ、だから鼻の先が痒かつたのですよ!』と、ペラギヤ・イワノウキチが元氣よく言ふ。『火酒を飲むし盃を見るでせう。』

晚餐が済むと、接吻をしたり、お互に十字を切つたりして皆な各自の寢床へ散る。睡魔が暢氣な頭を支配する。

イリヤ・イリイチが夢で見た斯う云ふ日と夜とは、たつた一回でもなければ二週間でもなくして、數週間、數箇月、數箇年のことであつた。

單調な斯う云ふ生活を破るものは何にもなかつた。オプローモフカの人達自身も斯う云ふ生活に飽きなかつた。またこれ以外の生活状態を想像することも出来なかつた。たとへ想像しても、怖ろしさにその想像から遁げ出すに違ひない。

彼等は他の生活を望みもしまいし、また好きになりもしまい。若し或る事情によつて彼等の生活状態に變化が來れば、その變化が何んなものであつても、彼等はそれを悲しむに違ひない。たとへ明日が今日と異なり、明後日が明日と異なつても、彼等は憂悶の浸潤を感じるに違ひない。

他の人達が望む多様な變化と偶然とは彼等に何の役に立つだらう?他の人達はこの盃を飲むが可い。けれども彼等オプローモフカの人達にとつてそんな盃は一向無關係である。他の人達は自分の好きなや

うに生活するが可い。

たとへ或る利益があつても、偶然は不安なものである。偶然は心配と勞苦と奔走とを求める。一處に坐つてゐないで、商をしたり、書いたり、一言で言へば、あたふたしなければならぬ。たまつたものぢやない!

彼等は何十年間でも居睡をしたり、鼻を鳴らしたり欠伸をしたり、田舎流の滑稽を言つてお目出度い笑を漂はせたりすることを續けてゐた。又は一團に集まつて、誰か夜分に見た夢のことまで物語つてゐた。若し怖ろしい夢でも見ると——皆なその意味を考へて、眞面目に怖がつた。若し豫言的な夢でも見ると——皆なその夢の悲しさや、喜ばしさに應じて、正直に喜んだり、悲しんだりした。夢が或る暗示を實行するように求めると、直ぐに彼等はこれが爲めに實行の方法を講じた。

てなければ、皆な將棋を差したり、トランプをしたりしてゐる、お祭毎にはお客と骨牌をする。また碁を圍んだり、ハートのキングや、クラブのジャックの遊をする。

時によると、ナターリヤ・フアドデーウナか誰かゞ一週間か二週間お客に来る。先づ老婆達は誰は何んな暮し方をしてゐるとか、誰は何をしてゐるなど、土地中の紹介をする。彼等は家庭の状態や、内幕の暮し向まで立入るばかりか、一人々々の祕密の考へや計畫などにまで突き込み、心の中まで察して、不相當な百姓、殊に疑はしい百姓を罵つたり、批評したりし、やがて聖名祭とか洗禮日とか誕生日などの種々な場合を擧げて、誰は何を御馳走したの、誰を呼んで、誰を呼ばなかつたのと吹聴をする。

そんな話に疲れると、新調品や衣服やマントから下袴や手袋まで見せ始める。女主人は手製のリンネルや糸やレース糸などの自慢をする。

が、それも盡きると、こんどは珈琲やお茶やジャムなどの御馳走が始まり、次には皆な最う黙つて了ふ。お互に顔を見合ひながら、彼等は長い間腰掛けてゐる。時々重苦しきうに何事かの爲めに溜息を吐く。何うかすると、誰か泣き出したりすることがある。

『お母さん、お前さん何うしたんだね?』と、一人の老婆が驚ろいて訊く。

『あゝ、でもねえ、悲しいんだもの!』と、女の客は重苦しい溜息を吐きながら答へる。『私は馬鹿なことをして、神様を怒らせて了つたんだよ。碌なことはあるまいよ。』

『ねえ、何にも吃驚したり、怖がつたりすることはないよ!』と、女主人は遮ぎる。

『さう、さう。』と、女主人は續ける。『世の終が来たから、民は民を滅ぼし、國は國を滅ぼし……皆な死ぬ時が来るんだ!』と、終ひにナターリヤ・フアドデーウナが言ひ、遂々二人でさめざめと泣く。

ナターリヤ・フアドデーウナが斯んな結論をするのは何の根據もなかつた。誰が誰を苦しめたと云ふやうなこともなかつた。氷星さへその年は現はれなかつた。けれども老婆達は何うかすると斯う云ふ暗い豫感を持つことがあつたのだ。

斯うして時を送つてゐるうちに、時によると、何か過失が出来て、家中の者が大人も子供も皆なで騒ぎ出すやうなことがあつた。

他の病氣は家でも村でも殆んど聞かなかつた。たゞ誰かゞ暗闇の中で、臺か何かに衝突つたとか、積草の上から落ちたとか、屋根から板が落ちて来て頭に衝突つたと云ふくらゐのことであつた。

が、斯う云ふことも減多になかつた。斯う云ふ過失には家傳の療法が用ひられた。傷口を水苔か草の葉かて拭き、負傷者に聖水を飲ませるか、祈禱をするかして、それで手當はすつかり終るのであつた。が、瓦斯に酔ふことはよくあつた。さう云ふ時には皆な閉ぢ切つて床に就いてゐる。呻き聲や、唸り聲が聞える。或る者は頭の周圍に胡瓜を置いて、それを手拭で縛つてゐる。或者は兩方の耳に蒜を入れてゐる。或者は紅大根の匂を嗅いでゐる。或者は襯衣一枚を着て寒い戸外に飛び出す。或者はたゞ感覺を失なつて床の上に倒れてゐる。

斯んなことは時期を定めて毎月一回若くは二回くらゐづゝあつた。それは彼等が暖かい空氣を無駄に煙突から出してふのを惜んで、まだ煖爐の中に（ロベルト・ダイヤウオル）にあるやうな火が駆け廻つてゐるうちに煖爐を閉めるからであつた。で、寢煖爐も煖爐も手を觸けられない程熱くなり、それが爲めに皆なが發汗するのである。

或る時、彼等の單調な生活狀態が斯う云ふ過失で破られたことがあつた。

皆なが面倒な晝餐の後に一休してからお茶に集まつてゐると、俄かに街から歸つて來たオプローモフ家の百姓が遣つて來て、衣匣から何か出さうとしてゐたが、遂々辛つとのことで一本の手紙を取り出した。それはイワン・イワノウキチ・オプローモフに宛てたものであつた。

皆な呆氣にとられてゐた。女主人は顔色さへ少し變へた。皆な眼を見張り、鼻を手紙の方へ差し伸べた。

『何うしたんだえ！ 誰から頼まれたんだえ？』と、奥さんは遂々我に歸つて言つた。

オプローモフは手紙を手に取り、不思議さうにそれを手の中ぐるぐる廻しながら、何うしたらいかと考へてゐた。

『一體、お前は何處から持つて來たんだ？』と、彼は百姓に訊いた。『誰がお前に渡したんだ？』

『街のある屋敷で俺が商をして居りやすとねえ、且那樣、』と、百姓は答へた。『するとね、郵便局から二度も來やして、オプローモフ家の百姓はゐないか、且那に手紙があるがと、斯う訊きやすだ。』

『それで？……』

『それで、俺は最初隠れてゐやしたで、兵隊は手紙を持つて歸りやしただよ。ところが、ウエルフリヨーウオの補祭様が俺を見附けて局へ知らせやした。それで再た遣つて來やして、怒鳴りつけながら手紙を渡して、その上五錢ぶつたりやした。これを何うするだ、何處へやるだと訊ねると、且那樣へ渡せと言ひやした。』

『でもお前は受け取らなけりやいぢやないか。』と、奥さんは腹立たしさうに言つた。

『俺は受け取らなかつたんでがすよ。俺に手紙が何になりやすべえ——俺には要りませぬえだ。俺に罰をあてなけりや手紙を受け取りませぬえだ、お前えさま、手紙を持つて行つて御覽なさい。兵隊がひ

でえこと言つて怒鳴りやすだ。長官に訴へると言ひやすだ。で、俺に受け取りやすだよ。』

『馬鹿!』と、奥さんは言つた。

『この手紙は誰から来たんだらう?』と、オブローモフは名宛を見ながら不思議さうに言つた。『字は、全く見覚えのある字だ!』

手紙は手から手に渡つた。種々な解釋や推察が始まつた。誰が何を言つて来たのだらう? 終には皆な分らなくなつた。

イリヤ・イワノウキチは眼鏡を捜させた。眼鏡を一時間半くらゐ捜して、それをかけると、彼は最う手紙を開封しようと考へた。

『お止しなさいよ、イリヤ・イリイチ、』と、彼の細君は怖ろしきうに彼を止めた。『何んな手紙だか分りやしませんからねえ。何か怖ろしい災難に會ふかも知れませんか。今時の人は油斷が出来ませんからねえ! 明日か明後日でもいゝぢやありませんか——手紙は逃げて行きやしませんから。』

手紙と眼鏡とは、箱の中に隠されて、鍵を下されて了つた。皆なお茶を飲み始めた。この手紙は斯うして、若し非常な出来事でもなければ、そしてオブローモフの人達の頭を刺戟するやうな事がなければ、其處に何年間でも入つてゐるに違ひない。翌る日のお茶の時にも手紙の話が始まつた。

四日目に遂々辛抱し切れなくなつたので、集まつてゐる人達は怦々と手紙を開封した。オブローモフはその署名を見た。

『(ラディシチェフ)』と、彼は讀んだ。『何んだ! これはフィリップ・マトウエーイチから来たんだ!』

『いや、それは、珍らしい人から来たものだ!』と、四方から言つた。『彼の男はまだ今迄生きてゐたのかな? まだ死ななかつたんだ! まづ目出度いことだ! 何を書いてよこしたんだらう?』

オブローモフは聲を出して讀み始めた。フィリップ・マトウエーイチが書いてよこしたことは、麥酒の調合書を送つて呉れと言ふのであつた。オブローモフでは非常に上手に麥酒を醸つたからである。『送つてやるがいゝ。送つてやるがいゝ!』と、皆な言つた。『手紙を書くがいゝ。』

斯うして二週間ばかり過ぎた。

『手紙を書かなければならん!』と、イリヤ・イワノウキチは言つた。『調合書は何處にあるんだ?』

『何處にありますかねえ』と、細君は答へた。『捜さなければならぬのです。まあ、お待ちなさいよ。何うして急ぐのです? も少しして、お祭を待つて、肉を食べるやうになつてから書いても遅くはありませんよ……』

『全くだ、お祭のことを書いた方がいゝ。』と、イリヤ・イワノウキチは言つた。

お祭になると、再た手紙の話が出た。イリヤ・イワノウキチはこんどこそ書かうとした。彼は書齋に入つて眼鏡をかけ、そして卓子に向つて腰掛けた。

家の中を深い静寂が閉してゐた。皆なは歩いたり、騒いだりすることを禁じられてゐた。『旦那が手紙を書いてゐるんだ!』と、皆なは家に死人があつた時に言ふやうな、憤み深い怦々とした聲で言つた。

彼は手を慄はせながら徐々と、歪んだ字を用心して（拜啓）と書いた。その書き方が、彼に細君が言つたやうに、何か危険なことでもするやうであつた。

『捜しても、捜しても——調合書はありませんよ。』と、彼女は言つた。『寢部屋の戸棚を捜して見なければなりません。ですが、何うして手紙をやるのですか？』

『郵便でやるさ。』と、イリヤ・イワノウキチは答へた。

『あそこまで幾錢かゝるんです？』

オプローモフは古い封筒を出した。

『四十錢だ。』と、彼は言つた。

『四十錢も詰らないことに棄てるんですね！』と、彼女は言つた。『一層、もう少し待つたら、街からあそこへ行く幸便はないでせうか？百姓達に氣をつけてゐるやうに言ひ附けて置いたらいゝでせう。』

『實際さうだ。幸便で送つた方がいゝ。』と、イリヤ・イワノウキチは答へた。そしてペンで卓子をポンと敲き、それをインキ壺に入れて眼鏡をはづした。

『全くさうするがいゝ。』と、彼は決めた。『まだ遅くはない。間に合ふだらう。』

フィリップ・マトウエウキチは調合書を持つてゐたか何うか分らない。

イリヤ・イワノウキチは何うかすると、書物を手にすることがあつた。彼には何んな書物でもよかつた。彼は讀書が人の根本的要求であることを疑はなかつた。が、同時にそれを、贅澤か、若くは壁に額

が懸つてゐてもゐなくてもいゝやうに、又散歩に行つても行かなくてもいゝやうに、讀書もしてもしなくても一向差支のない仕事でゝもあるやうに思つてゐた。だから彼には何んな書物でも同じことであつた。彼は書物を齎さ晴らしの爲めか、退屈凌ぎか、それとも無駄仕事かに用ひられる品物と同じやうに見てゐたのである。

『久しく本を読まなかつた。』と、彼は言ふ。時によると文句を變へて、『さあ、本でも讀まう。』と言ふ。或は兄から譲られた僅かな書物が積んでゐるのを偶然に、チラリと見るやうなことがあると、何んでも

構はず手當次第にその一冊を引き抜く。彼の手に入つた書物がゴリコフであらうが、「最近の解夢者」であらうが、ヘラスコフの「ロジャーダ」であらうが、スマローコフの悲劇であらうが、或はまた三年新聞であらうが——何んでも彼は同じ満足を感じながら讀む。そして時々斯んなことを言ふ。

『何うだ、何を考へるんだ！何んと云ふ盗賊だ！あゝ、お前の言ふことは空論だよ！』

斯う云ふ叫びは著者に浴せられたもので、名前などは彼の眼から見ると、何の尊敬にも値しないものであつた。彼は舊時代の人達が抱いてゐた著作に對する輕蔑をさへ持つてゐた。だから彼は、多くの人達と同じやうに、たゞ著作者を藝人の人類と、つまり道樂者、放蕩者、醉漢、道化者と思つてゐた。

時によると彼は三年新聞を朗讀して皆なに聞かせたり、或は皆なに近況を教へたりすることがある。『斯んなヘーグ通信がある。』と、彼は言ふ。『エ・ヴ王は暫く旅行してゐたが、無事に宮殿に還幸したとある。』そして斯う言ひながら眼鏡越に聞いてゐる皆なの顔を見る。

或は、

『ウキンナ駐割の某々公使は全權委任状を受け取つたさうだ。』

『あゝ、此處には斯んなことが書いてある。』と言つて彼は更に讀む。『チャンリス嬢の作物が露西亞語に譯されたさうだ。』

『それを譯したのは大方、』と、聞き手の中の一人で小地主が言ふ。『我々貴族仲間の金を胡魔化す爲めだらう。』

けれども可哀相なイリユーシャはシトリツのところへ學問に行く。彼は月曜日に眼を醒すと、最う悲しみに襲はれてゐる。彼は上り段からワーシカが金切聲で叫んでゐるのを聞く。

『アンティープカ！馬車の仕度をして呉れ、小旦那を獨逸人のところへお連れ申すんぢや！』
彼の心臓は慄へる。悲みに沈んだ彼は母親のそこへ行く。母親はイリユーシャが何の爲めに來たか知つてゐる。彼女は全一週間イリユーシャと別れなければならぬことを思ひ、一竊かに溜息を吐きながら、悲しみを隠す。

その朝、イリユーシャに御馳走をすることは大變なものである。彼の爲めに丸パンやビスケットを焼く。鹽漬や焼いた物やジャミヤ乾菓子や蒸菓子や食糧品までも彼に附けて遣る。それは獨逸人のところでは滋養になる物を食べさせないだらうと思ふからである。

『彼處へ行くと碌なものは食べられまい。』と、オプローモフ家の人達は言ふ。『お晝餐にはソツプとピフ

テキと馬鈴薯くらゐで、お茶の時にはバターで、晚餐の時には「モルゲン・フリー」くらゐのものだらう——たまらない。』

殊にイリヤ・イリイチは馬車の仕度をさせるワーシカの聲が聞えない月曜日のことを一番多く夢見た。その朝は、母親がお茶の時に莞爾々々しながら彼を迎へて愉快なことを知らせる。

『今日行かないでもいゝよ。木曜日がお祭だから、三日の間に行つたり來たりしても詰らないから。』或は、時によると俄かにイリユーシャに斯う言ふ、

『今度は先祖の週間だから——勉強しなくつてもいゝ。薄パンでも焼きませうねえ。』

でなければ母親は月曜日の朝、凝つとイリユーシャを視詰めてから言ふ、
『何う云ふ譯か、お前の眼は今日は曇つてるねえ。加減が悪くはありませんか？』そして頭を振る。狡い子供は何ともないのだけれども黙つてゐる。

『この週間は家にゐなさい。』と、母親は言ふ。『彼處へ行つても——何にもなりやしない。』

で、家の者は皆な、學問と先祖の土曜日とは決して衝突り合ふべきものでないとか、或は木曜日のお祭は、全一週間の勉強をさせない闕であるなど、言ふやうな信念を持つて了ふ。

小旦那を見る下男や下女などさへ時によると斯んなことを言ふことがある。
『ほ——、甘つ垂さん！何時獨逸人のところへ行くんでがす？』

或る時など、週間の中頃か初め頃に、突然獨逸人のところにアンティープカが馬車でイリヤ・イリイチ

チを迎へに来る。

『マリヤ・サウキーシナ様、或はナタリヤ・ファデーウナ様、或はクゾーフコフ様がお子様達と一緒にいらつしやいましたから、家へお歸り下さい！』

イリエーシヤは三週間くらゐ家の客になつてゐる。が、さうすると最う受難週間まで間もない。さうするとお祭がある。さうすると家族の誰か何故か、フォマの週間までは勉強するものではないと決める。夏までは三週間しかない。行く必要はない。夏になると獨逸人も休むだらうと云ふので、一層のこ

と秋まで延して了ふ。

斯うしてイリヤ・イリイチは半年くらゐ遊んで了ふ。そして此の時分に彼は非常に生長する！非常に肥る！非常によく眠る！土曜日に獨逸人のところから歸つて来た時には、子供が瘦せて蒼白めたと言つて、家にゐる時には誰も彼を監督しない。

『罪だ！』と、父親と母親とは言ふ。『學問を止める譯には行かないが、健康は買ふことが出来ませんか。健康が人の一生で一番大事なものですよ。あの通り、彼が勉強して歸ると、病院からでも歸つたやうですからねえ。あんな肥つた子が、すつかり瘦せて了ふんだから……ほんとにまだ悪戯時で、駈け廻つてゐたいのですもの！』

『さうだ。』と、父親は言ふ。『勉強は合はないのだね。山羊の角を折るやうなものだ！』
そして優しい両親は子供を家に止めて置く口實を始終捜してゐる。口實はお祭でなくても何んでもあ

る。冬は寒いだらうとか、夏は暑くて行けないとか、時によると雨が降つたり、秋に雪や霰が降つたりすることも口實になる。何うかすると、アンテーパーカが何故か疑はしく見えることがある。彼は酔つてゐるのか酔つてゐないのか分らないが、兎に角、何故か怖ろしい眼附で見えてゐる。不幸がないにしても、何處かで彼は口論をしたり、喧嘩をしたりしさうである。

殊にオプローモフ家の人達は、自分達の眼から此の口實に道理をくつ附けようとする。殊にストーリーツの眼に道理と映ずるやうに努力する。ストーリーツは決して甘えることを許さない嚴格家であつた。

プロスタコフやスコテイーニンなどの時代は疾くに過ぎ去つた。『學問は光にして、無學は闇なり』と云ふ諺は、古本商人が持つて来た書物と一緒に村々に擴がった。

老人達は文明の利益を知つた。が、それもたゞ外部の利益だけであつた。彼等は皆なが人々の間に伍するやうになつたこと、つまり官位も十字章も金も學問によらなければ獲られないことを見た。古い書記や、事務に虐げられ、舊い習慣と規則と原則との中で年老いた事務家などが段々役に立たなくなつて来たことをも知つた。

文字の知識だけでは足りない、今迄聞いたこともないやうな他の學問も必要であると云ふ不吉な噂が傳はるやうになつた。有勳議員と普通の役人との間には一つの深淵が開け、その深淵の橋は卒業證書であつた。

舊い役人や、習慣の子や、收賂の寵兒などは段々跡を斷つやうになつた。まだ死なない多くの者は失

望の淵に追はれ、他の者は法廷に引き出された。一番幸福であつた者は、物事の新しい順序に對して片手を振りながら、善良に健全に甘い椅子を占めた者であつた。

オプロモフ家の人達はこれを知つたし、又教育の利益をも悟つたが、併しそれはたゞ露骨な利益の方だけであつた。彼等は學問に對する内的要求と云ふことに就いては莫とした遠い考へを有つてゐるに過ぎなかつた。だから彼等は矢張りイリユーシヤの爲めには莫大の財産を得たいと思つたのであつた。彼等はイリユーシヤの爲めに刺繍をした正服を空想し、彼の國會議員を想像し、母親などは、縣知事になることまで想像してゐた。が、彼等は斯う云ふものを出來るだけ安價に、種々な狡猾な方法で手に入れ、教育の路上に投げ出されてゐる石塊や障礙物を竊かに迂廻し、苦しまずにそれ等を飛び越えたいと思つてゐた。例へば餘り勉強せずに、心と身體とを悲しませずに、子供の時分に得た幸福な肉附を失はずに勉強させたいと思つてゐた。そして豫定された形を保存したまゝ、何うかして、イリユーシヤが「凡ての學問と凡ての技術」とを習得したと云ふ證書を得たいと思つてゐた。

斯う云ふオプロモフの教育方針は、シトリツの方針とひどく衝突するものであつた。兩方は激しく争つた。シトリツは眞直ぐに、露骨に、そして頑固に相手を言ひ敗かしたが、相手の方は先に言つた狡猾手段やその他の手段でシトリツの攻撃を避けてゐた。

勝利は何うしても決しなかつた。獨逸人の執拗がオプロモフ家の人達の頑固と強情とに勝ちさうなものだが、獨逸人の方にも面倒なことがあつたので、勝利は孰れとも決らなかつたのである。その面倒

な事と云ふのは、シトリツの息子がオプロモフを甘やかして、彼に竊つと日課を教へたり、彼の代りに譯をしてやつたりしたと云ふことであつた。

イリヤ・イリイチは自分の家庭の有様や、シトリツの所にゐた時分の生活などを判然と夢見た。彼が自分の家で眼を醒すと、彼の蒲團の傍には最うザハールカが立つてゐた。後の彼の有名な従僕ザハール・トロフイムイチである。ザハールは乳母がしたやうに、彼に靴下を穿かせたり、靴を穿かせたりした。が、最う十四歳になつたイリユーシヤは横になつたまゝザハールに交々兩足を差し出すことしか知らなかつた。が、彼は少しでも穿かせ方が悪いと、足をザハールの鼻先に突きつけるのであつた。若し不満なザハールカがそれを訴へやうものなら、彼はなほ年上の者達から木片のお見舞を貰ふのである。

それからザハールカは頭を搔き、イリヤ・イリイチの機嫌を傷はないやうに、用心しながら彼の手を袖に通してジヤケツを着せる。そして朝起きたら顔を洗つたり、種々なことをしなければならぬと言ふ。

イリヤ・イリイチは何か欲しいと思へば、たゞ一寸瞬をすればいゝ。さうすれば、四五人の下男共が彼の希望を實行する爲めに駆け廻る。彼が何か落しても、何か取らうと思つて取れなかつた時も、何か持つて來ようとしても、何かを取りに駆け出さうとしても、彼は身軽い子供のやうに、自分で駆け出し、自分でそれを爲ようとすることはなかつた。で、父親と母親と、また三人の叔母との五つの聲が

叫ぶ。

『何うするの？何處へ行くの？そら、ワーシカ、そらワーニカ、そらザハールカ何をしてゐる？オイ！
ワーシカ！ワーニカ！ザハールカ！お前達は何を見てゐるんだ？懶惰者奴！速くしろ！……』

斯う云ふ具合に、イリヤ・イリイチは自分のことを自分で爲るやうなことは決してなかつた。
終に彼は、自分でしない方が餘程樂だと云ふことを知つて、怒鳴り方を覺えた。

『おい、ワーシカ！ワーニカ！あれを呉れ、これを呉れ！それも厭だ、これも厭だ！駈けて行つて持つて来い！』

程なく彼は兩親の優しい心遣ひにも飽きた。

彼が階段や屋敷内などを走つてゐると、彼の背後には十くらゐの絶望的な叫び聲が聞える。『あゝ、あゝ！止めて呉れ、止めてお呉れ！落ちて怪我をする……待て、お待ちよ！』

彼が冬などに玄關に出ようとか、或は通風口を開けようなどと思ふと、再た叫び聲が聞える。『アラ、何處へ行くの？何うして開けられるものか？走つちやいけない。出ちやいけない。お開けてない。危ないよ。感冒をひくよ……』

斯うして温室の中にある外國の小花のやうに、イリユーシヤは弱々しく家の中にばかり居つた。そして硝子の下に育つ外國の小花のやうに、徐々と元氣なく生長したのである。力の流れの現はれは内部に向ひ、何の活氣もなく萎れて了ふのであつた。

が、時によると彼は眼を醒すと、非常に元氣と爽快と愉快とを覺ゆることがあつた。彼は自分の中で何か戯れたり、沸騰したりしてゐるやうに感じた。丁度惡魔にでもつかれて、その惡魔が彼を怒らせたり、彼を屋根に上らせたり、馬に乗らせたり、枯草を刈つてゐる草場に駈け出させたり、或は塀の上に馬乗をさせたり、村の犬をけしかけさせたりするのさへ思はれた。さう云ふ時には、彼は村中を駈け廻つたり、それから谷路を走つて野原へ行つたり、樺林に行つたり、二三度跳ねて窪地の底へ駈け込んだり、子供達と一緒に雪投をして自分の力を試さうとしたりするのであつた。

惡魔は斯うして彼を捉へて了ふ。彼は丈夫になる、凝つとしてゐられないので、冬でも帽子を被らず、俄かに上り段から飛び降りて屋敷に出、其處から門の外に行き、兩手に雪を抱へて子供の群の方へ駈けて行く。

爽やかな風が彼の顔を切るやうに吹く。寒さは彼の耳を引き千切り、口から喉へ流れ込む。すると彼の胸は喜びに充ち、——彼は足の向く方に駈け出して、自分も叫んだり、大聲に笑つたりする。

其處には大勢の子供がゐる。彼は雪を投げる——が、當らない。熟練してゐない。が、もつと雪を取らうとする途端に、彼の顔には大きな雪の塊が衝突する。彼は倒れる。慣れてゐないので彼は痛みを感じず。しかし愉快で、彼はハ、ハ、と笑ふ。彼の眼には涙が浮んでゐる……

家の中では大騒ぎである。イリユーシヤがゐないのだ！叫び聲と、騒ぎ聲が聞える。ザハールカは屋敷に駈け出る。彼に續いてワーシカもミイテイカもワーニカも皆な夢中になつて屋敷の中を駈け廻

る。

彼等に續いて二匹の犬が駈ける。犬は皆なが知つてゐる通り、走る人を冷淡に見送すことの出来ない者である。

人達は叫んだり、泣いたりしながら、犬共は吠えながら村ぢうを駈け廻る。遂々子供達のところへ駈けつけて、裁判を始める。或る子供の頭髪を引つ張つたり、或る子供の耳を引

つ張つたり、或る子供の頸筋を掴んだりした揚句、彼等の父親をも引き出して嚇す。それから小旦那を捉へ、持つて行つた毛皮裏の外套で包み、それから父親の毛皮の外套で包み、なほ

二枚の蒲團に包んで、恭しく手に抱いて家に連れて来る。家の者達は彼が死んだことと思ひ、最う會へないと思つて落膽してゐたが、彼が生きてゐるばかりか、傷さへしてゐないのを見て非常に喜ぶ。両親の喜びは筆紙に盡し難い。先づ神様に感謝をし、それから薄荷や、接骨木などを飲ませ、なほ晩になると木苺を飲ませて、三日の間寝かせて置く。が、彼は再た雪投げに行かうと、そればかりを考へてゐる……

十

イリヤ・イリイチの躰がザハールに聞えると、彼は音がしないやうに竊つと寝煖爐から飛び降りて爪立て玄關へ出た。そして主人を錠で閉ぢ籠めて置いて、自分は門の方へ行つた。

『やア、ザハール・トロフイムイチ、よくいらつしやいました！暫くあなたにはお眼にかゝりませんでしたねえ！』門の傍に居つた馭者や従僕や婆さんや子供達が種々た聲で斯う言つた。

『旦那様は何うしました？何處かへ出かけましたかね？』と、屋敷番が訊いた。

『眠つてゐやすだよ。』と、ザハールは沈んだ調子で言つた。

『何うしたんです？』と、馭者が訊いた。『斯んなに早くから……加減が悪いのですね？』

『へ、何が加減が悪いだ！病氣を作つてるだよ！』と、ザハールはそれを信じてゐるやうな聲で言つた。『ひどいぢやねえかね、一人でマデラ酒を半ダースも飲み、麴酒を二升も飲んで寝てるんですよ。』

『何んと云ふことだ！』と、馭者は嫉ましさうに言つた。

『何うしてあの人は今、そんなにのらくらしてゐるんだらうねえ？』と、一人の女が訊いた。

『タチャナ・イワノウナ、さうぢやないよ。』と、ザハールは彼女に自分の片眼を向けて答へた。『今に始まつたことぢやない。全く何にも出来なくなつたんだ——そんなことを言ふのも氣持が悪いや！』

『丁度妾の女主人と同じだね！』と、彼女は溜息を吐きながら言つた。

『だが、タチャナ・イワノウナ、彼の女は今日何處へか行くだらうかねえ？』と、馭者は訊いた。『俺は一寸と其處まで行つて来てでもいゝかしら？』

『何處へも行くものか！』と、タチャナは答へた。『自分の大事な男と一緒に家にゐるのだよ。きりがないからねえ。』

『その男はお前のところへ始終来るねえ。』と、屋敷番が言った。『あの野郎、毎晩だ、皆な出る者は出て了ひ、歸る者は歸つても、彼の奴はいつも一番後になつて、その上まだ愚圖々々してゐて、終には玄關を閉めるんだ……俺は彼奴の爲めに其處の玄關を番するんだよ！』

『ほんとに爲様のない奴だ』と、タチカナは言った。『あんな人は滅多にありやしない。種々なものを彼女にやるんだよ。彼女の女は孔雀の牝のやうにお洒落をして、勿體ぶつた歩き方をするしねえ。自分が何んな下袴スカートを穿き、何んな手袋をはめてゐるか云ふことを誰かに見られてもゐるやうにき。氣恥かしく見てゐられない！頭は二週間も洗はないで置いて、顔には塗りつけるし……たまにや罪だけれど、(あゝ、憐れな女だ！頭に頭巾でも被つて、巡禮して修道院へでも行つたら何うだ……)なんて考へますよ。』

ザハールの外、皆な笑つた。

『タチヤナ・イワノウナ、全くさうだよ！』と、皆な同意した。

『全くですよ！』と、タチヤナは續けた。『何うしてお前さん達はあんな女に勝手なことをさせとくんかね？……』

『お前さんは、何處へ行くんだ？』と、誰か彼女に訊いた。『お前さんの持つてゐる包は何んだね？』

『裁縫屋に衣服を持つて行くのですよ。お洒落さんの御用でね、何うです、廣いでせう！ ドゥニヤーシャと一緒に仕立てもいゝのだけれど、三日経つても出来やしないよ。皆な折り曲げて了つてね！』

ア、もう行かなければならぬ。左様なら。』

『左様なら、左様なら！』と、或る人達は言った。

『左様なら、タチヤナ・イワノウナ、』と、馭者は言った。『晩に待つてゐるよ。』

『さア、何うなるか分らないね。行けたら行くよ。……左様なら！』

『では、左様なら。』と、皆な言った。

『左様なら、……皆さん御機嫌よう！』と、彼女は出て行きしなに答へた。

『左様なら、タチヤナ・イワノウナ！』と、馭者は更に後から叫んだ。

『左様なら！』と、彼女は甲高い聲で遠くから叫んだ。

ザハールは彼女が出て行つて自分の饒舌しゃべる番が来るのを待つてゐるやうであつた。彼は門の傍にある唐鐵からがねの柱に腰掛け、歩いて行く人や馬車に乗つて行く人などを隠險な顔附をして茫然ぼうぜんと眺めながら、兩足を動かした始めた。

『ザハール・トロフイムイチ、今日はお前さんの旦那は何うしてゐますね？』と、屋敷番は訊いた。『平常の通り、でぶくしてゐやすだよ。』と、ザハールは言った。『けれども、あの人のお蔭で俺は、い

つも悲しい目ばかり見てゐやすだ。いつも室のことねえ！何う云ふものか、あの人はひどく引越を嫌つてねえ……』

『俺はそんなこと知らないよ！』と、屋敷番は言った。『俺はあんなことを言ひたくないのだが、家主ぢ

やないからね……家主の命令だ……俺が家主のやうだが、決してさうぢやないんだ……」

「あの人は怒鳴りでもするのかね？」と、誰かの馭者が訊いた。

「幾ら怒鳴つても、そんなことは何でもないさ！」

「何うしてだ？いつも怒鳴つてゐても、あの人はいゝ旦那だよ！」と、一人の従僕は圓い煙草匣を軋らせながら徐々と開けて言つた。ザハール以外の皆なの手は煙草の方へ衝き出された。皆なは匂を嗅いだり、嘔くまめをしたり、唾を吐いたりした。

「たとへ怒鳴つても結構だよ」と、その男は續けた。「よけいに怒鳴る程、よけいにいゝんだ。いくら怒鳴つても、決して打つたりなんかないからねえ。俺は或る旦那に仕へてゐたことがあつたが、あんな人はないよ。直ぐに頭髪をひつ掴むんだ。」

ザハールは、その男がその駁論を終るのを頻りに待つてゐた。そして馭者の方へ向いて續けた、

「お前はそんなことを言ふけれども」と、ザハールは言つた。「それは駄目だよ！」

「やり方がひどいのかね？」と、屋敷番は訊いた。

「さうだ！」と、ザハールは瞬きをしながら意味ありさうに嘆れ聲を出した。「やり方がひどいから堪らないんだ！そればかりぢやねえ、戸外に出ることを知らないし、金を拂ふことを考へねえで、いつも鬱ふさぎこんでばかりゐるだよ。掃除することも知らねえで、散かしたり、食つたりするだ……チエ、いやになつちまう！……今日けふなんか散々虐いぢめて、ひどいことを言ふだ！斯うだよ！この前の週間から一片の乾酪

が残つてゐたよ。犬に投げて遣るのも恥かしいくらい残つてゐないのだから、人間がそれを喰はうなんて思へるものぢやないだ。それを訊くから（ありやしねえ）と言ふと斯うだ（お前を絞殺してやる、煮えてゐる油の中に入れてなけりやならない。眞赤に焼けた鐵で引き裂かなけりやならない。白楊の杵をお前に打ち込んでやらなけりやならない！）だつてさ。そのくせ自分はいつも寝てるんだ……兄弟、お前達、何んと思ふだ？近頃俺は、彼の男の足をお湯で洗つてやつてゐるが、それを知つてる者はあるか。それにあんなに怒鳴るんだからねえ！彼の人おが俺の胸むねを拳で突いたことは、幾度あるか知れわえ……いつでもまたさう云ふ風ふうだ！直ぐに突くんだよ……」

馭者は頭を振つた。が、屋敷番は言つた。

「いや、それは元氣のいゝ旦那だ！癖が面白い！」

「怒鳴るだけ、偉い旦那だよ！」と、例の従僕も矢張り冷淡に言つた。「怒鳴らない者の方が悪いや。凝つと視てゐて、俄かにお前、頭髪をひつ掴んで見る、何のことだか分りやしない！」

「そればかりぢやねえ。」と、ザハールは自分の言葉を遮ぎつた従僕には少しも注意せずに言つた。「片足はまだ棺の中に入りもしないに、いつも匂油ばかり塗つてゐるだ。譯の分らねえ人だよ！」

「面白い旦那だよ！」と、屋敷番は言つた。

「いや、困つたものだ！」と、ザハールは續けた。「何時いつか人でも殺すだよ。蛇度殺すよ！何んでも而倒になると、禿頭と云つて怒鳴るだ……そして最う譯もなにも聞かねえだ。今日けふなんかも新らしい言葉を

考へ出したのだ。(毒のある人間)と言ふだよ! 出ませだ!

『それが何んだ?』と、例の従僕はまた言つた。『怒鳴るやうな者はいゝ方だ。そんな者には神様が健康を興へるがいゝ……が、いつも黙つてゐて、傍にでも行くと、凝つて見てゐて、飛かゝつて来るやうな、俺の居つたとこの旦那のやうぢや困る。怒鳴るくらゐ、何んでもありやしない……』

『それは好き勝手だが』と、ザハールは頼みもしない反對が腹立たしさに言つた。『俺はお前の考へと異ふだ。』

『旦那は(禿げた)何と言つて怒鳴るだ、ザハール・トロフィムイチ、』と、十五歳さかりのコザックが訊いた。『馬鹿野郎とても言ふんかね?』

ザハールは彼の方へ徐々と頭を向けて、彼に曇りとした眼を注いだ。

『何を言ふ!』と、ザハールはやがて憤然として言つた。『若いくせに、ひでえこと言ひやがる! 貴様まだ一人前にもならないくせに! 彼方へ行け!』

コザックの子供は二足ばかり後にさがつて立留まり、莞爾々々しながらザハールを見た。『何うして齒をがちくさせるだ?』と、ザハールは憎々しさに嘎れ聲を出した。『待て。貴様の耳を引張つたら、何をするか知れねえぞ!』

その時、車寄から、従僕用のフロックコートをきちんと着、肩紐をつけ、脚絆を穿いた大きな従僕が駈け出して來た。彼はコザックの子供に近寄り、拳固を一つ見舞つてから、馬鹿野郎と言つて怒鳴つた。

『なんです、マトウエイ・モセイイチ、なんです、あなたは?』と、不意を打たれて愕々してゐるコザックの子供は片頬を壓へ、痙攣的に瞬をしながら言つた。

『何に! 貴様、まだ愚圖々々抜すのか?』と、従僕は答へた。『俺は貴様を捜して家ぢゆう駈け廻つたんだ。ところがこんな處にゐやがる!』

彼は片手で子供の頭髮を掴み、彼の方へ頭を屈めて、三度同じくらゐに徐々と規則的に彼の頬を拳で打つた。

『旦那は五度も鈴を鳴したんだ。』と、彼は訓めるやうに附け足した。『俺はお前の爲めに、この子犬の爲めに怒鳴られた。行け!』

彼は命令するやうに片手で階段の方を指差した。男の兒は暫く不思議さうに衝立つたまま、二度瞬をして従僕を眺めた。そして彼が同じことを繰り返すだけで、他に何にも言はないことを見て取つたので、頭髮を一振して愕々しながら階段の方へ行つた。

これはザハールにとつて非常に痛快なことであつた!

『さうだ、さうだ、マトウエイ・モセイイチもつと、もつと!』と、彼は憎々しく喜びながら言つた。『それぢや足りない! やア、アトウエイ・モセイイチ! 難有う! 大分痛かつたらう……あの(禿げ悪魔)奴! くやしいか?』

召使達はハ、ハ、と笑つた。彼等はコザックを敲いた従僕と、これを憎々しく喜こんだザハールとに

親しく同情した。けれども誰もコザツクには同情しなかつた。

『これだ、これだ、その言ひ方でも遣りかたでも俺の以前の主人はこの通りだつたよ。』と、再た例の従僕は言ひ始めた。そしてザハールの話を遮ぎつて了つた。『お前さんが少し楽しんでやらうと考へてもしやうものなら、奴さん直ぐに立派に察して了ひ、傍へ来て、ぐつと掴んで、今マトウエイ・モセイイチがアンドリュエーシャにしたやうなことをするんだ。たゞ怒鳴られるだけなら何んでもありやしない! (禿

げた悪魔) と言つて怒鳴るのは面白いことだ!』

『その主人はお前でも引つ掴むだらうねえ』と、馱者はザハールを指差しながら彼に答へた。『そら、お前の頭には白髪があるだらう、が、彼は何の爲めにザハール・トロフイムイチを掴むだらう? 頭をまるめて唐胡瓜のやうに心得てゐるからだ……この二つの鬚の爲めにも拳骨だ、それで何んの爲だか分りやしない!……』

皆なはハ、ハ、と笑つた。が、ザハールは馱者の言葉で敵かれた程に驚ろいた。彼はたゞこの馱者と

だけそれまで親しい話を交してゐたのである。

『ぢや俺も旦那に言つてやるべえ。』と、彼は馱者に對して憎々しきやうに嘎れ聲を出し始めた。『理由もなくお前を掴んで、お前の鬚を引きむしるやうにさ。その氷柱のやうな鬚をさ!』

『他の馱者の鬚を引き抜くやうになりや、お前の主人も大したものだ! いや、お前こそ自分の鬚を大事にするが、引き抜かれる時に痛いやうにさ!』

『なに、この詐偽師の馱者のお前くらゐ掴めねえて何うする!』と、ザハールは嘎れ聲を出した。『だが、お前のやうなもの俺の主人が構ふのも妙なものだからねえ!』

『なんだ、あんな主人が!』と、馱者は毒々しく言つた。『何處であんな者を掘り出して來たんだ?』彼自身も、屋敷番も、床屋も、従僕も、悪口の擁護者も、皆なアハ、ハ、と笑つた。

『笑へ、笑へ、俺は主人に言ふだから!』と、ザハールは嘎れ聲を出した。『だがお前は』と、彼は屋敷番の方に向つて言つた。『この泥棒共を言ひ敗かさなければならねえのに、笑ふと云ふことがあるだか。お前は何の爲めにこんな處に出娑婆するんだ? 騒ぎを鎮めるのが役ぢやねえか。それにお前は何んだ? よし、俺は主人に言ふべえ。待て、覺えてゐろ!』

『よし、分つた、分つた、ザハール・トロフイムイチ!』と、屋敷番はザハールを鎮めようとしながら言つた。『彼の男がお前に何をしたんだ?』

『彼奴、俺の主人に對して、無禮なことを言つたよ。』と、ザハールは馱者を指差しながら熱心に反對した。『彼奴は、俺の主人が何んな人か知つてゐるのか?』と、彼は恭しく訊いた。『貴様なんか、』と、彼は馱者の方へ向いて言つた。『夢でもあんな旦那を見ることア出來めえ。良い人で、智慧があつて、立派な人だ! だが、お前の主は、まるで碌に食べ物をあてがはれない馬車馬みてえなものだ! 汚ない馬に乗つて屋敷を出るとこなんざア、まるで乞食のやうで、見るのも恥かしいや。麴酒に大根を入れて食つてたらう。お前の着てゐる外套を見る、穴だらけぢやねえか!……』

馭者が着てゐた外套には一つも穴はなかつた。

「貴様のこれは何んだ、」と、馭者はザハールの言葉を遮ぎつて、ザハールの脇の下から出てゐる襯衣の切れ端をぐいと引つ張つた。

「もういゝよ、いゝよ！」と、屋敷番は二人の間に両手を擴げながら言つた。

「よし、お前は、俺の衣服を引つ張つたな！」と、ザハールは益々襯衣を引き出しながら叫んだ。「待て、俺は主人に見せて来るから！ 兄弟だち、彼奴が何をしたか見たらう、俺の衣服を引き裂いたんだ！……」

「俺だと言ふのだな！」と、馭者は少し怖氣立つて言つた。「そりや、主人が引裂いたんだらう……」

「主人が引き裂いた！」と、ザハールは言つた。「主人は良い人だ。金だ、主人ぢやない、勿體ないことを言ふな！ 俺は主人の傍に居れば、天國に居るやうだ。何の不自由もねえ。生れてから馬鹿野郎と言はれたこともない。良い、安樂な暮しをして居るんだ。食べる時も主人と一緒にだし、行きたい處へは何處へでも行けるだ——この通りだし……そして田舎には俺の家もある、自分の野菜畑もある。獲り入れた穀物もある。百姓共も皆俺の自由になる！ 俺は支配人だ。だがお前は自分の……」

彼は憎々しさの餘り、十分な聲で自分の反對者を言ひ込めて了ふことが出来なかつた。彼は力を入れる爲めに、そして毒々しい言葉を考へ出す爲めに一寸と息を繼いだ。が、餘り怒つてゐたので考へ出せなかつた。

「よし、待て、まだお前は衣服の辨償をしねえな、お前のを引き裂くぞ！」と、遂々彼は言つた。

ザハールはその主人の爲めに活氣づいた。名譽心と自尊心とが動いたのである。心服心が眼を醒して力一ぱいに現はれたのである。ザハールは自分の相手ばかりか、相手の主人と、あるか何うか知らないその主人の親戚と知人とにまで罵倒を浴せた。彼は罵倒する時には、以前馭者と話をした時に聞き覺えた主人達に對する讒言や惡口をその通りに繰り返した。

「だが、お前達も主人も何んと云ふ呪はれた憐れな者だ、猶太人だ、獨逸人より悪い！」と、彼は言つた。「お前達の祖父が何んな人間であつたか知つてゐる。古着屋の番頭ぢやねえか。昨夜なんかお客がお前のとこから出て行つたが、俺は詐偽師か何か家の中に入つたんだらうと思つてゐた。見てゐるのも氣の毒だ！ 母親も矢つ張り古着屋で盗んで來た古着を賣つてゐたよ。」

「いゝよ、いゝよ！」と、屋敷番は中に入つた。

「だがな！」と、ザハールは言つた。「俺のこの且那は、お蔭様でな、大黒柱だよ。友達はな、大將や伯爵や公爵様だ。それに何んな伯爵でも且那に會へると云ふ譯のものぢやねえだ。人によつちや客間に待たせられる……著述家なんか始終來る……」

「おい、兄弟、その著述家といふのは誰のことだい？」と、屋敷番は争を止めようと思つて訊いた。「役人のことかね？」

「さうぢやない。自分の好きなことを考へ出して書く人だよ。」と、ザハールは説明した。

『そんな人達はお前達めまのところで何をするんだ?』と、屋敷番は訊いた。

『何をするつて? 煙管パイプを貰ふ者もあるし、シエリー酒を飲ませて貰ふ者もあるさ……』と、ザハールは言つた。そして皆なが嘲けるやうに笑つてゐるのに氣が附いて言葉を止めた。

『だが、お前達は、幾人あつても皆な惡漢わるものだ!』と、彼は皆なに片眼を注いで速口に言つた。『他の衣服ハコを引裂いたりしやがつて! 俺は主人に言ひ附けて來るだ!』と、彼は附け足して家の方へ急いで行つた。

『止せよ、待て、待てよ!』と、屋敷番は叫んだ。『ザハール・トロフイムイチ! 酒屋へ行かう。何うか來て呉れないか……』

ザハールは途中で立止つて、急に後あとを振り返つた。そして召使達を見ずに、なほ急いで街道ちまじに出て行つた。彼は誰の方へも見向きもせずに、向側むかひにある酒屋の扉口まで行つた。彼は其處そこで振り返つて、陰鬱な眼を皆なに向け、なほ陰鬱に皆なを手招きして自分の後あとについて來るようにと言ひ、自分は扉の中に姿を隠した。

他の者も皆な散々ちぢぢになつた。或者は酒屋へ行き、或者は家へ行つた。そしてたゞ従僕一人残つた。

『でも、主人に言ふと困つたことになる!』と、彼は徐々煙草匣を開けながら、冷淡に考へた。『何處から見ても良い且那だが、あれで怒鳴るんだなア! 怒鳴るくらゐなら、何んだと言ふんだ? だが、或る且那は凝つと見てゐて、急に頭髪を……』

十一

四時過ぎた頃、ザハールは竊こつと音を發たてないやうに玄關げんかんを閉め、爪立つまたちをして自分の室に入つた。其處そこで彼は主人の書齋の扉口に近寄り、先づ扉に耳を押し着け、それから腰を折つて鍵の穴に眼を持つて行つた。

書齋の中には穩やかな躰たが響いてゐた。

『眠つてる』と、彼は囁いた。『起こさなけりやなんねえ。もう程なく四時半になるだ。』
彼はゴホンと咳をして書齋の中へ入つた。

『イリヤ・イリイチさま、もし、イリヤ・イリイチさま!』と、彼はオブローモフの枕頭まくらもとに立つて靜かに言つた。

躰たは續いてゐた。

『矢張眠つてる!』と、ザハールは言つた。『宛然まごころ石職人のやうだ。イリヤ・イリイチさま!』

ザハールは軽くオブローモフの袖を引つ張つた。

『起きなせえましよ。四時半でがす。』

イリヤ・イリイチは呻つてこれに答へただけで、眼を醒さなかつた。

『起きなせえまし、イリヤ・イリイチさま! 何んと云ふ恥かしいことでがすだ!』と、ザハールは聲

を高めながら言った。

答はなかつた。

『イリヤ・イリイチさま!』と、ザハールは主人の袖を引きながら言った。

オプローモフは少し頭を動かし、辛つと片眼を開けてザハールを見た。中風病者がよく斯う云ふ見方を
をするものである。

『そこにゐるのは誰だ?』と、オプローモフは嘎れ聲で訊いた。

『俺でがすよ、起きなせえましょ。』

『彼方へ行つとれ!』と、イリヤ・イリイチは呻つて、また重い眠に沈んだ。

鼾の代りに、鼻音が響き出した。ザハールは彼の裾を引つ張つた。

『お前か、何んだ?』と、オプローモフは急に両方の眼を見開いて怖ろしく訊いた。

『お前さま、起こせて言はつしやつたよ。』

『そりや知つてるよ。お前は自分の義務を果たしたのだから、彼方へ行つて居れ!後は俺の勝手だ……』

『行きましたねえ』と、ザハールは再たオプローモフの袖を引きながら言った。

『いゝよ。五月蠅い!』と、イリヤ・イリイチは短かく言った。そして頭を枕に沈めて鼾をかき始め
た。

『いけましねえだよ、イリヤ・イリイチさま』と、ザハールは言った。『俺は何うしても行きましたねえ
た。』

だ!』

彼は主人を揺つた。

『おい、お世話を焼くな、邪魔をするな』と、オプローモフは両方の眼を開けて厳しく言った。

『でも、仕方がありませんねえだ。後で起こさなかつたと言つて怒らつしやるだもの……』

『おい、おい!お前は何んと云ふ人間だ!』と、オプローモフは言った。『たつた一分間でいゝから眠ら
せて呉れ。一分間ぐらゐる何んだ?俺は自分で分つてゐるよ……』

イリヤ・イリイチは俄かに眠りに誘はれて黙つた。

『また眠つた!』と、ザハールは主人には聞えないと信じて言った。『まるで樺の木片のやうに眠つてゐ
る!何うして世の中に生れて来た?もし、起きなせえましょ!斯う言つてゐやすだよ……』と、ザハ
ールは咆えた。

『何んだ?何んだつて?』と、オプローモフは頭を擽げて怖ろしい聲で言った。

『旦那さま、何うして起きなさらねえだ?』と、ザハールは優しく答へた。

『いや、お前が今言つたことは何んだ——え?お前は何を言つたんだ——え?』

『何をでがす?』

『失敬なことを言つたらう?』

『それは、お前さま、夢でがすよ……きつと夢でがすよ。』

『お前は俺が眠つてゐるのだと思つてゐるのか？俺は眠つてるのぢやない、皆な聞いてゐるんだ……』
けれども彼はまた眠つた。

『これだ』と、ザハールは絶望したやうに言つた。『あゝ、何んと云ふ木偶だ！何うして丸太のやうに轉

がつてるだ？見るのも氣持が悪いや。ほんとに結構なんだ！……チエー！』

『起きなせえまし、起きなせえましよ！』と、彼は急に吃驚したやうな聲で言つた。『イリヤ・イリイ！』

チさま！周囲まわりの人達が何をしてゐるか御覽なさいまし……』

オプローモフは急いで頭を上げて周囲を見廻したが、深く溜息をして再び横たはつた。

『五月蠅うるさくしないで呉れ！』と彼は重々しく言つた。『お前に起こせと言ひ附けたが、もう其の言ひ附を

取り消す——いゝか 俺の思ふ時に、俺一人で目を醒す。』

時によると、ザハールはそのまゝにして置いて、斯う言ひ残して行くことがある。

『勝手にお眠りなせえ！』

が、また時によると、強情を張ることもある。今も強情を張つた。

『起きなせえよ、起きなせえよ！』と、彼は喉一ばいの聲を出して兩手でオプローモフの裾と袖とを掴

んだ。

オプローモフは突然起ち上つてザハールを怒鳴りつけた。

『待て、主人が眠がつてゐる時に、何う云ふ風ふうに起すものか教へてやる！』と、彼は言つた。

ザハールは急いで逃げ出した。が、彼がまだ三足も逃げないうちに、オプローモフはすっかり眠氣か

ら醒めて、欠伸をしながら身體からだを伸した。

『麴酒を……持つて来い……』と、彼は欠伸あくびの合間々に言つた。

その時、ザハールの背後うしろから誰かの甲高い笑ひ聲が響いた。二人は振り返つた。

『シトリツ！シトリツ君か！』と、オプローモフはお客の方へ急いで近づきながら喜ばしきうに叫

んだ。

『アンドレイ・イワヌイチさまでがすか！』と、ザハールは莞爾にこ々々しながら言つた。

シトリツは矢つ張り腹を抱へて笑つてゐた。彼は今の出來事をすっかり見てゐたのであつた。

第二編

シトリツは父親の血統によつて半ば獨逸人であるが、其の母親は露西亞人であつた。彼は正教を信じてゐた。彼が平常使つてゐた言葉は露西亞語であつた。彼は此の言葉を母親と書物と大學の聽講席と竹馬の友なる村の子供達と話好きな彼等の父親達とモスクワの市場とて學び、獨逸語の方を父親と書物とから承け繼いだのである。

シトリツは父親が管理してゐたウエルフリヨウオと云ふ村で生れ、其處で生長し、其處で教育された。八歳の時から彼は父親と一緒に地圖を習つたり、ヘルデルやウイランドなどの註釋書によつて聖書を研究したり、無學な百姓や町人や職人などの計算を總計したりした。が、母親とは聖歴史を讀んだり、クルイロフのお伽噺を學んだり、テレマーク註釋書によつてそれを研究したりした。

又彼は教鞭を遁れて他の子供達と一緒に小鳥の巢を壊しに駆けて行つたりした。だから教場にある時や、或は祈禱の時など彼の衣匣の中から雛鳥の鳴聲が聞えることがよくあつた。

又斯んな事もあつた。晝餐後、父親は庭の木陰に腰掛けて煙草を喫んでゐた。母親はジャケットを編むか、或はカンバスに向つて刺繡をするかしてゐた。と、突然街路の方から騒々しい叫聲が聞えると思ふ

間に、大勢の人がどや／＼と家の中へ流れ込んだ。

『何でせう？』と母親は驚いて訊いた。

『またアンドレイを伴れて来たんだらう。』と、父親は冷淡に言った。
扉がパタンと開くと、百姓や婆さんや子供達の群が庭の中へ亂れ入った。實際、アンドレイを伴れて来たのであつたが、彼の姿を見れば、靴を脱ぎ、衣服を引き裂き、鼻を傷つけてゐる。之が他人の子供のことであつた。

母親はアンドリューシヤが半晝夜も家に姿を見せないと、屹度心配さうに周圍を見廻してゐた。若し父親が少しでも彼の外出を禁じさへすれば、母親は彼を自分の傍へ止めて置いたに相違ない。

母親は彼を洗つてやつたり、衣服や襦袢を着換へさせたりした。で、アンドリューシヤは半日位清楚して行儀よく歩いてゐた。が、晩方か、時には翌朝までには、また衣服を汚したり、引き裂いたりして、何處の子供か分らないやうになつて誰かに伴れられて来るのであつた。百姓が枯草を積んだ荷車に彼を乗せて来ることもあれば、漁師と一緒に舟の網の上に眠つて来ることもあつた。

母親は涙を流したが、父親は平氣で、その上笑つてゐた。

『立派な大學生になるよ。立派な大學生に！』何うかすると父親は斯う言ふことがあつた。

『そんなことがあるのですか、イワン・ボグダマイチ。』と、母親は訴へた。『彼は一日でも生傷をつけずに歸つたことはないんですよ。此間など血の出るほど鼻を打ち切つて来るんですよ。』

『自分の鼻や他人の鼻を一度も切つたことのないやうな子供ぢや仕様がなないぢやないか』と父親は笑ひながら言つた。

母親は散々泣いた揚句、ピアノの前に腰掛けて、鬱さ晴しにヘルツを弾いた。涙は滾々と湧き出て、樂鍵の上にポタ／＼と落ちた。が、其の時アンドリューシヤが来た。彼は誰かに伴れられて来た。彼は元氣よく生々と話し始めて母親を笑はせた。それに、彼は實に惻いな子供であつた。直ぐに彼は母親のやうにテレマークを讀んだり、母親と一緒に二つの手でピアノを弾いたりするやうになつた。

一度など彼は一週間も行方不明になつたことがあつた。母親は眼を泣き脹らしてゐた。が、父親は平氣で、相變らず庭を歩きながら煙草を喫んでゐた。

『若しオプロモフの息子が行方不明になつたのなら、』と、父親はアンドレイを捜しに行つて呉れと
の妻の願に對して言つた。『俺は村全部と土地の警察とに頼んで捜して貰ふが、アンドレイなら歸つて来るよ。實に偉い大學生だ！』

翌る日になるとアンドレイは最う自分の寢床の上に無事に眠つてゐた。寢臺の下には誰かの獵銃と一斤ばかりの火薬と散弾とが横はつてゐた。

『お前、何處へ行つてゐたの？何處から鐵砲を持て来たの？』と母親は問を浴せた。『何故黙つてるの？』

『何故でもない！』と、息子はたつた之れだけ答へた。

父親はコルネリイ・ネポートの獨逸語譯は出来たかと訊いた。

『まだ!』と息子は答へた。

すると父親は片手で彼の襟を掴んで門の外に引き出し、彼の頭に帽子を被せて背後から彼を足で蹴飛ばした。

『歸つて来るなッ。』と、彼は付け加へた。『今度来る時は翻譯を持って来い。それも一章だけぢやいけない、二章だ。そしてお母さんには、言ひ附かつた通りフランスの喜劇の中の一役を請記で答へる。でないと来ちやならない!』

アンドレイは一週間経つて歸つて来た。そして翻譯も持つて来れば、又役目も答へた。

彼が生長すると、父親は撥條附の荷馬車に彼を乗せ、彼に手綱を持たせて、先づ製造場に、次に畑に、次に街の商店と官廳に、次に或る粘土を見せに馬車を驅つた。父親は粘土を指で撮んで臭を嗅ぎ、時によると、舐めて見て、息子にも臭を嗅がせたり、粘土と云ふ物は何んなものであるかと云ふことや、何に使ふかと云ふことなどを説明して聞かせたりした。それを見に行かない時には、炭酸加里や樺油などを作る處や、獸油を煮る處などを見せに連れて行つた。

十四か十五になるシトリツは、荷馬車か或は馬に乗り、鞍に袋をぶら下げてたつた一人て父の依頼を受けて街へ行つたことも度々あつた。けれども何事かを忘れたり、間違へたり、よく見なかつたり、見通したりするやうなことは決してなかつた。

『良い子だ、なか〜偉い!』と、父親は返事を聞いて言つた。そして其の廣い掌で息子の肩を軽く

敲

きながら、依頼の輕重によつて二留とか若くは三留とかを息子に與へた。

母親は此の勞働的實際的な教育を好まなかつた。彼女は自分の息子が父親のやうな獨逸式の町人にされるのを恐れてゐたのであつた。彼女は凡ての獨逸國民を特許された町人の群と見て、獨逸人の野卑と

獨立心と狡猾とを嫌つてゐた。獨逸人は之等の性格を數世紀間に作り得た町人の權利として到る處に發揮してゐるが、それは丁度自分の角を持つてゐる牝牛が、其れを隠すことが出来ないやうなものである。

彼女の眼から見ると、凡ての獨逸國民の中に、紳士と云ふ者は一人もなかつたし、またあるはずがなかつた。彼女は獨逸人の性格の中に、優美と溫順と親切とを少しも認めてゐなかつた。つまり彼女は立派な世間に楽しい生活を爲るものと、或る規則を脱せしめ、社會の習慣を破らせ、なほ法則に従はせないものとを獨逸人の中に認めなかつたのである。

實際、此の無智な人達は齷齪しながら、自分達の頭に取り入れたものを固く握つてゐて、若し規則づくめで行くことなら、壁に額を衝突することさへ厭はぬと云つたやうな人間である。

彼女はさる金持の家で家庭教師をしてゐたので、外國にも行つたことがあつた。彼女は獨逸全國を旅行して、凡ての獨逸人を短かいパイプを咬へ、始終唾を吐いてゐる支配人と、職人と、商人と、棒のやうに眞直な將校と、兵卒と、沈んだ顔附をしてゐて、たゞ勞働や、勞働で金を儲けることや、陳腐な秩序や、

怠惰な生活の法則や、義務の街學者的遂行などにのみ巧みな役人との群に——角張つた身振と、大きな無細工な手と、町人らしい晴々した顔附と、粗末な言葉遣ひとを有つた町人の群に入れてゐた。

「どんなに獨逸人を着飾らせても」と、彼女は考へた。「獨逸人はどんな手薄な白い襦袢を着ても、漆塗の靴を履いても、また黄色い手袋を嵌めてさへ、それはたゞ靴皮のやうな皮膚を隠したゞだけで、眞白いカフスの下からは荒くれた赤味のある手が突き出てゐる。華美な上衣の下からは、麴麴職人でなければ厨僕のやうな身體が覗いてゐる。そして此の荒くれた手が錐を持つたり、時によると管絃樂の弓を持つたりするのだ」

併し母親は自分の息子が、黒い身體の町人なる父親の血統を受けてゐると思ひながらも、矢張其の息子の中に貴族の理想を空想してゐた。つまり、自分の息子は露西亞の貴族の息子で、色も白く、身體の格好も整つてゐて、自分が露西亞の金持の家や、獨逸以外の外國などで見たことのある子供、即ち小さな手と足を持ち、綺麗な顔をし、晴々した活潑な眼を持つた息子であると想像してゐたのである。

ところが其の息子はその父親のやうに水車場で砂礫を運んだり、工場や畑に行つたりした。彼の衣服は魚油や肥料で汚れてゐた、その手も赤く汚く荒れてゐた、食慾なども非常に旺んであつた。

母は五月蠅くアンドリュースの爪を切つてやつたり、頭髮を編んでやつたり、華美な襟や下衣などを縫つてやつたり、街へ行つてジャケットを注文してやつたり、ヘルツの沈んだ音を聴かせたり、小花や詩的生活のことを歌つて聞かせたり、軍人や作家の華々しい使命を囁いたり、他の人が憧れてゐる高尚

な役目を空想させたりした。

しかし此の淡い空想は、算盤の音や、百姓共の油染みた受取書の整理や、職工との應對などの爲に破壊されなければならなかつた。

母親はアンドリュースが街へ乗つて行く荷馬車や、彼が父親から貰つた油染みた外套や、羊革で作つた緑色の手袋など——種々な労働生活の醜い附屬物さへ怨めしく思つてゐた。

不幸にもアンドリュースは十分な教育を受け、父親の小さい塾の教師にされた。そればかりか父親は彼に職人として、全く獨逸流に、月に十留づゝの俸給を與へ、其の俸給の受取書を書かせた。

が良き母よ、心安かれ。お前の息子は露西亞の土地で育つたのだ——牛の角のやうな町人根性と砂礫を運ぶ手とを持つた仕事好きな人々の間で育つたのではない。近くにはオプローモフカがある。其處では絶えずお祭のやうな日が送られてゐる。其處では労働は肩から軛のやうに迂り落ちてゐる。其處では且それは夜明と同時に起きない。製造場に行つて魚油と獸油とで塗られた車輪や撥條などの傍を歩かない。それにウエルリョーウオ村には、一年の大半は空家になつて扉が閉まつてゐる一軒の家がある。其の家の中に度々悪戯兒の「アンドリュース」は入つた。家の中には長い客間や、美術室や、壁に懸つてゐる薄黒い肖像畫や、其の肖像の晴々しい様子や、華奢な手や、疲れたやうな空色の眼や、綺麗に梳つた頭髮や、白くて優しい顔や、ふつくりした胸や、慄へるやうなカフスの中から抜け出て、劍の柄に傲然と載

せられてゐる青い血管の見える優しい手などがある。つまり、其處では、錦襦きんじゆと、天鵝絨てんがろくと、レースと

を着て、歡樂と贅澤との中に無益に流れ去つた多くの人達を見るのである。彼は此の空家の

アンドリュースはさう云ふ肖像を見て華やかな時代と戦争と名譽との歴史を知る。彼は此の空家の

中で昔噺を読む。其の昔噺は彼の父が一喫くしてゐる時に、何百回となく物語つたサクソニヤでの生活の

ことではない、つまり大燕や馬鈴薯や市場や街などの間で行はれた生活のことではない。

一年の中に三度此の城のやうな家は俄かに群衆に満されて活々とした楽しい踊りに沸き返つた。長い美術

夜には毎室燈火あかりが輝いた。公爵は盛りを過ぎた白髪頭の老人で、羊皮の紙を張つ

たやうな顔と、憂鬱うゑふさうな凸出とつとした眼と、禿はげこんだ大きな額とを有つてゐた。彼は三個の勳章を着け、

金製の嗅煙草匣や水晶入の杖などを持ち、天鵝絨製の靴を履いてゐた。公爵夫人は容貌と云ひ、春加減

と云ひ、一體の姿と云ひ、實に立派な婦人で、其の傍に誰もまだ近寄つた者はあるまいし、公爵自身

さへ、五人の子供を有つてゐるにもかゝらず、夫人を抱いたり、接吻したりしたことはあるまいと思

はれた。夫人は、彼女が一年に三度會ふ人達よりも氣高いやうに思はれた。彼女は誰とも話をせず、何處どこへも

出かけずに、狭い綠色の室の中で三人の老女と一緒に坐すわつてゐた。彼女は屋根のある美術室づたひに庭

を通つて會堂へ行くだけであつたが、會堂でも籐の蔭の椅子に腰掛けてゐた。

その代り、家ちうの者は、公爵と夫人とを除く外、皆快活な連中であつた。で、アンドリュースは子

供らしい着きいで眼で突然に三つ四つの種々な階級を見たり、おどろおどろした智慧で、此の種々な人達の型タイプを、

淡泊ちやくぱくした假面舞踏でも見るやうに、無意識に貪り見たりしてゐた。

其處にはビエール公爵とミーシエリ公爵とが居つた。ビエール公爵は直ぐアンドリュースに、騎兵や

Mlle Ernestine と云ふ家庭教師も来てゐた。此の婦人はアンドリュースの母親のそこへ珈琲を飲

みに來ると、アンドリュースに頭髮かみを編かむことを教へた。彼女は何うかするとアンドリュースの頭

が、その癖百姓共ひやくしやうどもを怖こがつてゐた。

まだ二人の公爵令嬢も来てゐた。一人の方は十一歳で、も一人の方は十二歳であつた。何方どっちも春が高

を抱へて膝の上に載せ、痛い程に強く髪を編み、それから白い手でアンドリューシヤの兩頬を壓へて優しく接吻することもあつた。

それから臺の上で喫煙草匣や釦などを琢く獨逸人も來てゐた。また日曜日から日曜日まで酒ばかり飲んでゐる音樂教師も來てゐた。女中の一群も來てゐたし、また犬や小犬の群も來てゐた。

之等の者で家の中は一ぱいになつてゐた。村には騒ぎ聲や吠聲や何か敲く音や叫び聲や樂器の音などが満ちてゐた。

一方にはオプロモーフカがあり、一方には公爵のお城があるので、如何に獨逸流の氣分が漂つてゐても悠長な貴族の生活を此のウエルフリョーウオから斷つことは出来なかつた。従つて此の中に養はれてゐるアンドレイもまた立派な大學生になることは出来なかつた。

アンドリューシヤの父親は農業者でもあり、機械學者でもあり、教師でもあつた。彼は小作人なる自分の父親から農業の實地を學び、サクソニヤの工場で機械學を學んだ。が、更に殆んど四十人近くの教授を網羅してゐる近くの大學で、四十人の賢人から説明して貰つた事を教授すべき使命をも受けた。

其れ以上彼は學問をしなかつた。そして頑固に以前の知識を繰り返しながら、何か事業をしなればならないと決心して父親のそこへ歸つた。父親は彼に百タレールと、新しい旅行袋とを與へ、好きな處へ行けと言つて彼を旅立たせた。

其の時からイワン・ボグダノヴィチは故郷にも父親にも會はなかつた。彼は六年の間、スキツルヤオ

イストリヤなどを旅行したが、露西亞には、二十年も暮して自分の運命を祝福したのである。

彼は大學に學んだので、自分の息子も矢張り大學に入れなければならぬと決めた。が、彼はそれが獨逸の大學でないことと頓着しなかつた。露西亞の大學が自分の息子の一生に大變革を作り、自分が息子の生活に故意と置いた軌道から息子を遠ざけることにも頓着しなかつた。

で、彼は之を非常に單純に遣つて退けた。彼は自分の祖父から軌道を取つて物尺で量つたやうに將來の自分の孫まで其の軌道を續けた。そしてヘルツの變り目と、母親の空想と物語と、公爵の城の中にある美術室と婦人室とが獨逸式の狭い軌道を、彼の祖父も彼の父も彼自身もまだ夢にさへ見たことのないやうな廣い路に作り改へると云ふことを知りつゝ安心してゐた。

殊に彼は此の點に於て術學者ではなかつた。彼は自分の考を固守するやうなことがなかつた。彼は息子の行くべき他の路を自分の頭の中に組み立てることさへ出来なかつた。

彼は此の事に就てあまり心配をしなかつた。彼の息子が大學から歸つて來て、三月も家に居つた時に彼は息子にウエルフリョーウオでは最う何もすることはないし、オプローモフもペテルブルグへ行つてゐるしからお前もペテルブルグへ行けと言つた。

が、何故息子はペテルブルグに行かなければならないか、又何故息子はウエルフリョーウオに留まつてゐて土地の管理を手傳ふことが出来ないかと云ふことに就いて老人は自問したことがなかつた。彼はたゞ彼自身が學業を終つた時、彼の父親が彼を手離したことだけを記憶してゐるに過ぎなかつた。

で、彼も息子を手離した。之が獨逸の習慣であつた。其時分母親は最う生きてゐなかつたので、誰も彼に反對する者がなかつた。

イロン・ボグダノウイチは息子を發たせる日に當座の生活費として息子に紙幣で百留を與へた。

『縣の街まで馬で行つてね。』と、彼は言つた。『其の街にゐるカリニコフから三百五十留受け取つて、馬は其の人のところに預けて置くのだ。若しカリニコフが居なんだら馬を賣ればいゝ、其の街の近くに市場があるから……素人でも四百留には賣れる。モスクワまで四十留と、モスクワからベテルブルグまで七十五留——だから十分に残る筈だ。彼處に行きやお前の勝手だ。お前は俺と一緒に仕事をしたので、俺が幾らかの資本を有つて居ることを知つて居るだらう。けれども俺が死ぬまでは決して其れを當にしてはならぬ。俺は頭の上に石さへ落ちなけりや、まだ二十年くらゐは生きてゐるつもりだ。燈明はかんかん燃えてゐる。燈明の中にはまだ澤山油がある。お前は立派な教育を受けて居る。お前の前には種々な務口が開かれて居る。官途に就かうが、商をしようが、それとも又著作家にならうが、其れは俺の知つたことぢやない。何でもお前が一番趣味を感じるものを選んだがいゝ……』

『はい。私は其んな事を皆な一緒にやつて見ようと思ひます。』と、アンドレイは言つた。

父親は力一ばいにアハ、と笑つて馬でさへ痛い程息子の肩をポンと敲いた。が、アンドレイは平氣でゐた。

『よし。だが、若し思つた通りに行かず、自分の路を急に探し出すことが出来なんだら、レインゴ

リドのところへ行つて相談するがいゝ。レインゴリドはよく教へて呉れる。ア、！』と、彼は指を上にあげ、頭を揺かして附け加へた。『其の男は……其の男は……（彼はレインゴリドを褒めようとしたが、適當な言葉が見附からなかつた。）俺達と一緒にサクソニヤから來たのだ。彼の男の家は四階建てね。番地を教へて置かう……』

『要りません、言はないで置いて下さい。』と、アンドレイは反對した。『私は自分にも四階建の家が出來た時に其の人のところに行きます。が、今のところ其の人の厄介にならずにやつて行きます……』

父親は再た彼の肩を敲いた。

アンドレイは馬に飛び乗つた。鞍には二つの袋が結び附けられてゐた。其中の一つには糊を附けた袖無が入つてゐた。釘づけにした厚い靴や、ウエルフリヨウオの布で作つた幾枚かの襪衣や、買ひ入れた品物や、父親の注意によつて持つて行くことにした品物なども見えてゐた。も一つの方には薄い羅紗で作つた華美なフロックコートや、ふはくした外套や、一ダースの薄い襯衣や、母親の教訓を記念して、モスクワに註文した靴などが入つてゐた。

『ぢや！』と、父親は言つた。

『では！』と、息子は言つた。

『すつかり仕度が出來たか？』と、父親は訊いた。

『すつかり出來ました！』と、息子は答へた。

彼等は自分の眼で相手の心を見徹してもしたやうにお互に黙つたまゝ見合つてゐた。其の傍には、好奇心な近所の人達が、管理人の息子の旅立を見ようとして、口を開けたまゝどやくと集まつてゐた。

父と子とはお互に手を握り合つた。アンドレイは馬を駈けさせた。

『まるで犬の兒見たいだ。涙一つ流しやしない！』と、近所の人達は言つた。『アレ、鳥が二羽あそこに止つてゐる。塀の上で鳴いてゐる。アンドリユーシヤの爲に鳴いてゐるのだ——まあ待てよ……』

『なアに鳥があつた男に何んだ？ 彼はイワン・クパールのやうに毎晩林の中を一人で歩いてゐる。兄弟、彼奴らに鳥なんざア當て簀ねえや。露西亞人には出来ねえことだよ！』

『あ、昔の異教人だから大丈夫だよ！』と、一人の母が言つた。『猫の子を街路に投げ出したやうに、抱きもしなければ呼びもしねえでよ！』

『待てよ！待てよ、アンドレイ！』と、老人が叫んだ。

アンドレイは馬を止めた。

『あゝ！心から言ひ度いことがあるのだよ！』と、群衆の中で感心したやうに言つた者があつた。

『何んです？』と、アンドレイは訊いた。

『馬の腹帯が緩んでゐる。緊めた方がいゝよ。』

『シヤムシェーフカまで行つてから自分で緊めます。愚圖々々しちやゐられません。明いうちに着かなけ

りやならないのだから。』

『ぢや！』と、父親は片手を振つて言つた。

『ぢや！』と、息子は頭を一寸と下げて繰り返し、馬の腹を蹴らうとして少し身體を屈めた。

『あゝ、お前さんは犬だ、ほんとに犬だ！まるで他人のやうだ！』と、近所の人達は言つた。

が、突然群衆の中から大きな泣聲が響いた。誰か女が堪へきれなかつたものと見える。

『あゝ、もし可愛い旦那様！』と、彼女は頭巾の端で眼を拭きながら言つた。『可哀想な孤兒さん！お前さんには生みのお母さんがないので、誰もお前さんを祝福して呉れやしない……美しい旦那様、私があなたに十字を切つてあげませう……』

アンドレイは彼女の方に馬を寄せて、馬から飛び降り、老婆を抱いて、再た馬に乗らうとした——が老婆が彼に十字を切つて接吻すると、彼は俄かに泣き出した。彼は老婆の熱情的な言葉の中に母親の聲を聞いたらしかつた。そして老婆の優しい顔附を暫く視詰めてゐた。

彼は程なく涙を拭くと、再たしつかりと、老婆を抱いて、馬に飛び乗つた。彼は馬の横腹を敲いて、雲のやうな塵の中に消えてしまつた。兩側からは、三四の番犬が、逸散に彼を追ひかけて、頻りに吠えてゐた。

シトリツはオブローモフの竹馬の友で、最う三十歳を超えてゐた。彼は以前官途に就いてゐたこともあつたが、今では退職して自分の仕事をしてゐた。而かも實際金を儲けて家さへも有つてゐた。彼は外國に貨物を發送する或る會社に關係してゐた。

彼は絶間なく活動してゐた。會社はベルギーやイギリスなどに代理人を派遣しなければならぬやうな時には、屹度彼を派遣するし議案か何かを書いたり、新らしい思想を事業に應用したりする時にも、矢張彼を選んだ。殊に彼は議會にも行つて朗讀などもする。其時彼が巧みに朗讀したか何うかと云ふことは分らない。

彼は純イギリス種の馬のやうに、全身骨と筋と神経とで組み立てられてゐた。彼は瘦ぎすな男であつた。彼の頬は殆んど無いと言つてもいゝくらゐで、たゞ骨と筋肉ばかりであつた。脂ぎつてふつくりした處は少しもなかつた。顔色も平凡な淋しみのある色で、少しも紅味がなかつた。眼も僅かに綠色を帯びてゐるくらゐであつた。けれども表情には富んでゐた。

彼の行動には無駄がなかつた。彼は腰掛けてゐる時には靜かに腰掛けてゐた。が、活動する時には必要なだけの表情法を用ひてゐた。

彼は肉體に無駄を作らなかつたやうに、自分の精神生活の中にも、實際的方面と精神の繊細な要求との均衡を求めてゐた。そして彼の此の二つの方面は、時々筋ちがつたり、絡まつたりすることはあつたが、矢張並行して進み、決して纏れて解くことの出来ないやうな面倒な結目になることはなかつた。

彼は元氣よく勇敢に進んでゐた。彼は一刻千金の思ひで一日を費しながら、常に餘分な時間と努力と精神力と感情などの勤勉な支配者として出納勘定によつて生活してゐた。彼は悲しみや喜などを、丁度手足を支配するやうに支配し、或は天氣の好い悪いを感じるやうに感じてゐた。

彼は雨が降つてゐる間傘をさすやうに、悲みが續いてゐる間苦しんでゐた。が、其れも慥々した謙遜な心で苦しむのではなくして、非常な悶えと非常な誇と感じながら苦しんでゐたのである。そして凡ての苦痛の原因は自分自身にあるから、何んな苦痛でもよく我慢し自分の苦痛を上着か何かのやうに他人の針に掛けなかつた。

それから彼は喜びを、路傍で手折つた小花のやうに、手の中で凋まないでゐる間楽しみ、凡ての歡樂の終りに横はつてゐる苦い一滴まで盃を飲み干すやうなことを決してしなかつた。人生に對して單純な、つまり率直な有りのまゝの見解を作らうと云ふのが、彼の不斷の問題であつた。

彼は此の問題が次第に解決さるゝに従つて人生の有ゆる困苦を知つた。そして自分の行く先に屈曲を認めながら、其處に眞直な路を作ることが出来た時など、いつも内心に誇と幸福とを感じた。

「單純な生活をするには智慧を要すること、同時に非常に困難なことだ！」と、彼は度々獨語つて生活の絲が何處で曲り、何處で斜になり、何處で誤つた複雑な結目に入り始めてゐるか云ふことを、速だしく見た。

彼が一番怖れたのは想像であつた。想像は一方では親しい者となり、他方では敵意ある者となる二重人格の同伴者であつた。想像は想像を信じない時は友であり、其の甘い囁の下に安心して眠る時は敵であつた。

彼は有ゆる空想を怖れてゐた。で、若し空想の領分に入る時は洞窟の中に入るやうな氣持で、*Ma solitude, mon hermitage, mon repos,* (我が孤獨、我が寂寞の地、我が休息の場處) と云ふ表札を持つて、何時何十分に出て來ると云ふことを知つた上で入つた。

だから神祕な謎のやうな空想が彼の精神の中に場處どることは出来なかつた。まだ實驗や實際的眞理の解剖に附されないものは、彼の眼には視覺的虚偽と映じてゐた。つまり、網膜に光線や色彩が種々に反射したもの、或は實驗を経ない一事實として映じてゐた。

彼には、奇蹟の領分を探究したり、千年も先の謎や發見などの中を駆け廻つたりすることを好む耽美心^{タンチスム}がなかつた。彼は頑固に神祕の闕の傍に止まつて、赤兒のやうな信仰も無賴漢のやうな疑惑をも表はさずに、法則の表はれと、同時に神祕への鍵とを待つてゐた。

彼は想像に對するやうに感情に對しても精密で用心深かつた。彼は度々此の感情の中に陥つたので、感情作用はまだ *Terra incognita* (知られざる國) であると云ふことを意識してゐた。

彼は知られざる國の中で紅い虚偽と眞白い眞理とを巧みに區別し得た時など、熱心に運命に感謝した。彼は、小花で巧みに蔽はれた虚偽に欺むかれた時にも、若し心臓が強く病的に鼓動したゞけてあれば悲

しまなかつた。若し心臓が血に澀がれなければ、若し額に冷たい汗が流れなければ、そして若し彼の生活の上に永い間長い蔭が横たはつてゐなければ、彼は非常に喜んだ。

彼は或る頂上に留まつてゐることが出来ることと云ふことと、又駿馬に乗つて感覺を飛び越える場合、感覺の世界と虚偽や感情の世界、眞理の世界と笑ふ可き世界とを劃してゐる細い一線を飛び越えるやうなことをしないと云ふことと、其の反對に飛び歸る場合、慘酷と冷靜と不信と些事と心臓の萎縮との乾いた砂地に飛び込まないと云ふこととで、自分を幸福な者だと思つてゐた。

彼は魅惑されてゐながらも足の下にある大地を感じてゐたし、又極端に陥つた場合、其の極端から遁れて自由になるだけの力をも感じてゐた。彼は美に眩惑されるやうなこともなかつた。だから男の價値を忘れもしなければ、卑下もしなかつた。彼は熱烈な歡喜を感じたことがなかつたが、女の奴隷になつたこともなかつたし、美人の《足下に横たはつたこともなかつた》。

彼は偶像を有つてゐなかつた。その代りに彼は力ある精神と壯健な身體とを保つてゐた。その代りに彼は貞操の誇を有つてゐた。彼は或る爽快と力とを表はしてゐた。だから何んな無頼な女でも彼の前に出ると知らず識らず慎しみの念を感じない譯にゆかなかつた。

彼は此の珍重な性質の價値を知つてゐたので、其の性質を惜しきうに費つてゐた。で、皆な彼を利己主義者だとか、無感覺者だなどと言つた。人々は彼が情熱を制したり、自然で自由な精神状態の境から

出ないやうにしたりするのを責めるばかりか、何うかすると羨望と驚愕とを感じながら、全力で手を振ると沼の中に飛び込んで、自分と他人との存在を破壊するやうな他人を辯解することがあつた。

『情慾は、情慾は凡てを辯解するものだ。』と、彼の周囲の人達は言つた。『だが君は自分の利己主義に閉ぢ籠つて、自分ばかりを守つてゐる。それは一體誰の爲めなんだ。』

『何れ誰かの爲めに守つてゐるのさ。』と、彼は遠くの方でも見てゐるやうに沈鬱に言つて、相變らず情慾の詩を信じもしなければ、情慾の荒々しい現れや破壊の跡に捉はれもせず、何時までも人生の嚴密な理解と生活状態との間に人間の實體と傾向との理想を見ようとしてゐた。

彼を攻撃すればするほど彼は自分の頑固の中に（閉ぢ籠つた。）少なくとも議論でさへ清教徒のやうな狂熱に陥るのであつた。彼は（人の定規的使命は、一年の四期、即ち年齢の四期を缺陷なく生きて、生命を盛つた具を臨終の日まで持つて行き、その具から一滴も無駄に零さないことと、火が穏やかに、そして靜かに燃えるのは、詩の焔を漂よはす怖ろしい火事に優る）と言つてゐた。又彼は其の結論として（若し人が自分に對して自分の信念を證據立てることが出来れば、其の人は幸福な者である。けれども自分の信念の立證と云ふことは非常に困難なことであるから、其れを得ることは到底望み得ない。）と附け加へてゐた。

が、彼自身は矢張り自分の選んだ路を頑固に歩いてゐた。彼が何事かに就いて病的に沈思煩悶してゐるのを見た者はなかつた、見たところ、彼は疲れ果てた心臓の惱みを味はつたことがないものやうに

あつた。彼は精神を惱ましたことがなかつた。彼が複雑で面倒な事情や、新らしい事情に衝突して落膽

したことは一度もなかつたばかりか、寧ろ以前の知人に對するやうに之等の事情に近づき、一度住んだことのある見覺えた場處のやうに之等の事情を通り抜けてゐた。

何んな事に出會しても鍵番が帶の間に下つてゐる鍵束の中から其れ其れの扉の爲に入用な鍵を直ぐに選び出すやうに彼は直ぐに當面の出來事の爲めに必要な方法を用ひてゐた。

彼が一番尊んでゐたのは目的を達するに執拗であるべきことであつた。之は性格の特徴として彼の眼に現はれてゐた。そして此の執拗を有つてゐる人ならば、それが詰らない目的を有つてゐる人であらうと、決して尊敬することを辭さなかつた。

『此の人こそ人間らしい人間だ！』と、彼は言つてゐた。

彼が自分の目的に向つて進んでゐることは附け加へる必要がない。彼は凡ての障礙物を乗り越えて、勇敢に進んでゐた。たゞ彼が目的を棄てるのは、彼の前途に壁が出来るか、或は越えることの出来ない深淵が開けるかした時だけであつた。

けれども彼は眼を閉ぢて深淵を飛び越えたり、無中に壁の上に攀上つたりするやうな勇氣を有つてゐなかつた。彼は深淵や壁を量つて、若し其れを越える確かな方法が無ければ、後歸りをして人が彼のことを何と言はうが一向頓着しない。

斯うした性格を有つてゐるには、シトリーツが有つてゐたやうな雑多な要素が要るらしい。我國の活動家

は昔から五六枚の鉛板に鑄込まれてゐて、氣懈さうに、半ば開けた眼で周囲を見廻しながら社會と云ふ機械に手を着け、居睡しながら此の機械を普通の軌道によつて動かし、その片足を先人が残して行つた足跡に立てゝゐた。が、彼等の眼は突然睡から醒めて、活潑な大きい足音や、生々した聲などを聞きつけた……何人のシトリーツが露西亞人の名を冠つて現はれなければならないだらう！

斯うした人間が何うしてオプロモフと親しかつたのであらう？ オプロモフの恰好と云ひ、遣り方と云ひ、凡ての生活状態と云ひ、皆シトリーツの生活に反對を叫ぶものであつた。が、之は既に定り切つた問題で、何でも正反對は、同情の動機にならないまでも決して同情を妨げるものでないと云ふことは既に昔の人が言つた所である。

のみならず彼等二人を結び附けたものは幼年時代と學校とで、これは二つの強い護謨であつた。其の外、オプロモフの家庭で獨逸人の子供に豊かに注いだ露西亞流の心よいねちくした愛嬌や、肉體的にも精神的にも強者としてのシトリーツがオプロモフの爲めに取つた役目なども二人を結び附けたものであつた。が、最も二人を接近させたものは、オプロモフの天性に横たはつてゐる純潔で晴やかで凡てのものに對する深い同情に充ちた善良な心であつた。オプロモフは自分が良いと思つたもの、又は心を許した者、即ち素直で、永久に誠實な自分の心の叫に對して答へた凡ての者に對して同情を有つてゐたのである。

此の晴やかな子供らしい心を偶然に見た者でも、又謀みがあつて見た者でも、それがたとへ暗黒な悪

人であつても、其の者はオプロモフに對する關係を退けることは出来なかつた。若し又事情が彼に近づくことを妨げて、彼のことは美しい記憶或は汚ない記憶にだけでも固く留まつてゐた。

アンドレイは度々仕事を中止したり、世俗的人達を避けたり、晩餐會や舞踏會を斷つたりしてまでオプロモフの大きな長椅子に腰掛けに行つて氣懈るさうな話のうちに怪々したり、落膽したりして末な屋根の下に來た時や、美しい南國の自然から子供の時分に散歩したことのある樺林に歸つて來た時などに感ずるやうな安らかな感じを経験するのであつた。

三

『イリヤ君、今日は。久し振で會つて嬉しいよ！ 何うしたね、今後は？』

『いや、シトリーツ君、何うもよくない。』と、オプロモフはほつと溜息を吐いて言つた。『壯健かね？』と、シトリー

ツは訊いた。

『いや、病氣なかね？』と、シトリーツは心配さうに訊いた。

『眼丹が出来たんだよ。漸く先週に右の眼から一つが取れたと思ふと、今もう他のが出来てやがる。』

シトリーツは笑ひ出した。

『たつたそれだけか?』と、シトリーツは訊いた。『それは君があまり寝たからだよ。』

『たつたそれだけ?』ぢやない、熱にも苦しんでゐるんだ。君は以前醫者の勸告を聞いた筈だ。『外国に行かないとよくない。ひよつとしたら、症状が悪くなるかも知れないから。』つてさ。』

『で、君は何うするのだね?』

『行かない。』

『何故?』

『だつて、まあ聞いて呉れ給へ。奴さん(あなた)は何處か山の中にも暮したが、いゝから、エジプトかアメリカへもお出でなさい……』だなんて言ふぢやないか。』

『それが何んだ?』と、シトリーツは冷淡に言つた。『エジプトには二週間で行けるし、アメリカには三週間で行けるんだ。』

『ぢや、アンドレイ君、君も矢張り行けと言ふのだね! 一人の理解者があつた。が、其の人は發狂したんだ。誰がアメリカやエジプトに行くものか! 英國人が、奴等はさう運命づけられてゐるの。それに英國人は何處へ行つても自分の生活をしやすいからねえ。我國になんか來る者は何んな人間だ? 生命

さへ惜いとも思はないやうな或る種の絶望家ぢやないか。』
『實際、一種の手柄だよ。車か或は船に乗つて、清潔な空氣を吸つて、珍らしい國や街や風習や、其他種々な不思議を見るのだから……ねえ、君! 君の仕事と言ふなア何んな事だ、オプローモフカで何をし

なけりやならないのだ?』

『あゝ!……』と、オプローモフは片手を振つて言つた。

『何うしたんだ?』

『生命が危なくなつたんだよ!』

『それは結構なことだ。』と、シトリーツは言つた。

『何が結構だ! 斯んな結構なことが始終頭を撫で、呉れた日にや、學校で溫柔(おんやう)しい生徒が喧嘩好に附け纏はれたり、狡猾者に抓られたり、突然、額の眞上から砂をぶつかけられたりするやうなものだ……力が

がないのだからねえ。』

『君は無闇に……意氣地がなくなつたね。何うしたんだ?』と、シトリーツは訊いた。

『二つの不幸に出會したんだ。』

『何んな?』

『すつかり破産して了つたのだ。』

『と云ふのは何う云ふ譯なんだ?』

『今、君に村長から來た手紙を読んで聞かせよう……手紙は何處にある? ザハール、ザハール!』
ザハールは手紙を搜した。シトリーツは手紙を走り読みしながら笑つた。村長の字の間違が可笑かつたらしい。

『此の村長は何と云ふ悪者だらう!』と、シトーリツは言った。『百姓共を逃がして置いて、それを訴へてゐるんだ!一層のこと百姓共に旅行券を渡し、四方八方に出して遣つた方がいゝぢやないか。』

『冗談ぢやない。そんなことをしたら百姓共は皆な出て行つて了ふ。』と、オプローモフは反対した。

『出て行く奴は行かして置き給へ!』と、シトーリツは平氣な顔をして言った。『其處に居つて利益があつていゝと思ふ者は逃げ出しやしないよ。百姓に若し利益がなければ君にも利益はないのだ。そんな者を留めて置いて何うする?』

『君は飛んでもないことを考へ出すね!』と、イリヤ・イリイチは言った。『オプローモフカの百姓共は皆な溫柔しい家居漢だよ。彼等に擲槍つちやいけな……』

『君はまだ知らないのだ。』と、シトーリツは遮ぎつた。『ウェルフリョーウオでは棧橋を作つたり、路を作つたりしようとしてゐる。だからオプローモフカも大道の近くになるのだ。それに街では市場を作つてゐるしね……』

『あゝ、大變だ!』と、オプローモフは言った。『それはまだ早いよ!オプローモフカはあんな靜かな邊鄙な處にあるのだ。それに今になつて市場とか大道とかが出来たら大變ぢやないか!百姓共は街に出かけて行く、オプローモフカにも商人共がどしどし入り込むだらう——何も彼も滅茶苦茶だ!それこそ大變だ!』

シトーリツは笑つた。

『さうだらう、大變ぢやないか!』と、オプローモフは續けた。『今迄は百姓共は自分の中に閉ぢ籠つてゐて、善いことも悪いことも聞きもせず、たゞ自分の仕事ばかりしてゐたのだ。どんなものにも心をひかされるやうなこともなかつた。ところが、近頃は奴等餘程横着になつた。茶や珈琲を飲んだり、天鷲絨製の股引を穿いたり、ハモニカを吹いたり、ピカ／＼した長靴を履いたり……碌なことはありやしない!』

『成程、さう云ふ譯なら、無論、餘り結構なことはない。』と、シトーリツは言った。『ぢや、君、村に學校を建て給へ!……』

『早くはないかね?』と、オプローモフは言った。『百姓に學問をさせるのは考へものだからねえ。百姓に學問をさせて見給へ、それこそ大變だ、百姓をしなくなるよ……』

『さうぢやない、百姓に百姓の爲方を教へるのだよ——君は變人だねえ!だがまあ聞き給へ。眞面目な話だが、君は是非今年中に村に行つて來る必要があるよ。』

『實際だ。が、僕の計畫がまだ悉皆出來上らないのでね……』と、オプローモフは悻々と言つた。

『計畫なんか要りやしないよ!』とシトーリツは言った。『君はたゞ行きさへすればいゝのだ。何うすればいゝかと云ふことは現場を見りや分る。君は餘程以前から何か頻りに計畫してゐたが、まだ悉皆出來上らないのかね?一體何をしてゐるのだ?』

『だつて、君、僕の仕事は村の事ばかりぢやないのだからねえ。まだ一つ不幸があるんだよ。』

『何んな?』

「引越して呉れつて言ふんだ。」

「何う云ふ譯で引越せと言ふんだ？」

「たゞ出て呉れつて言ふだけさ。」

「ぢや、何でもないぢやないか？」

「何うして何でもないので？僕は斯んな心配事を考へると、全く手も足も出なくなるよ。たつた一人だらう、それに、あれも偽なけりやならないし、これも偽なけりやならない。彼方には勘定を偽なけりやならないし、其處にも拂ひがあり、此處にも拂ひがある。それにもつて来てこんどは引越だらう！金銭が恐ろしくかゝるんだよ。又僕自身も何處に行つていゝか分らない！そのうちに金銭が一文も無くなつて了ふ……」

「意氣地のない男だねえ、引越に困るなんて。」と、シトリツは吃驚して言つた。「金銭の話が出た序だが、君のところに澤山あるかね？五百留だけ借して貰ひたいのだが。今、直ぐ送金しなきゃならないのだ。明日僕等の會計から持つて来るよ……」

「待ち給へ！考へて見るから……此間村から千留送つて来たが、今残つてゐるのは……まア、待ち給へ……」

オプローモフは抽斗を一つ一つ捜し始めた。

「此處に……十留、二十留、此處に二百留ある……それから此處には二十留ある。まだ此處に銅貨があ

つた筈だが……ザハール、ザハール！」

ザハールは以前のやうな順序で寢煖爐から飛び降りて、室へ入つて来た。

「其處の卓子の上に十錢銀貨が二つあつたが何處へ遣つたんだ？昨日俺が置いたのだが……」

「何を仰しやりやすだ、イリヤ・イリイチ様、十錢銀貨二つはお前様が受け取らつしやつたよ！俺は、其處に十錢銀貨が二つ無いとお前様に申しといたぢやありませんか……」

「無い筈はない！蜜柑を買つて剩錢を呉れたんだから……」

「誰かに渡して、忘れてお座るだよ。」と、ザハールは扉口の方へ振り向きながら言つた。
シトリツは笑ひ出した。

「成程、君等はオプローモフ家の人だ！」と、シトリツは詰責るやうに言つた。「自分の衣匣に幾ら金銭が入つてゐるか知らないのだからねえ！」

「ですが、先刻、ミヘイ・アンドレイチに何の錢をお遣りなされた？」と、ザハールは思ひ附いた。

「あゝ、さうだ、タランチエフも十留持つて行つたつて。」と、オプローモフは生々した調子でシトリツに言つた。「僕はすっかり忘れてゐた。」

「何故君はあんな畜生を家へ入れるんだ？」と、シトリツは言つた。

「入れやしねえだよ！」と、ザハールは遮つた。「だが、自分の家か借間にでも来るやうに入つて来やすだ。且邦様の襟衣でもチヨツキでも持つて行くし、それに何んと云ふ饒舌り方でせう！此間なんざア、

フロックコートを借りに来て、(俺に着せろ!)とて言うだ……アンドレイ・イワマイチ様、お前様ならあんな奴に口を開かせねえだがなア……」

「ザハール、お前の事ぢやない。彼方に行つて居れ!」と、オブローモフは嚴然として言った。

「僕に書簡紙を一枚呉れ給へ。」と、シトリーツは言った。「手紙を書かなければならぬんだ。」

「ザハール、紙を持つて来い。アンドレイ・イワマイチが要るんだ……」と、オブローモフは言った。

「紙はありませぬえだよ! 先刻もお前様、搜したぢやねえか。」と、ザハールは玄關の間から答へて室へ入つて来なかつた。

「切れ端か何かでいゝんだよ!」と、シトリーツは強請つた。

オブローモフは机の上を搜したが、切れ端はなかつた。

「ぢや、名刺でもない!」

「名刺は餘程以前から無い。」と、オブローモフは言った。

「君は一體何うしたのだ!」と、シトリーツは皮肉に言った。「君は仕事の準備をしたり、計畫を書いたりしてゐるのだらうが、それにしても何うか聞かせて呉れ給へ、君は何處かへ行つてゐるのかね? 誰に會つてゐるのだね?」

「何處かに行くさ! だが、滅多に行かない。大方家に坐つてゐる。例の計畫が心配でしやうがないんだもの。それに借問のこともあるしさ……が、有難いことにはタランチェフが熱心に搜して呉れるので

ねえ……」

「誰か君の許へ来るかね?」

「來るとも……あのタランチェフと、も一人アレクセーエフとが来る。先達は醫者も寄つて行つたよ……ペンキンも來たしね、スディピンスキイやウォールコフなども……」

「君の所には書物がないぢやないか。」と、シトリーツは言った。

「書物は此處にある!」と、オブローモフは卓子の上に横たはつてゐる書物を指差しながら言った。

「何と云ふ書物だね?」と、シトリーツは書物を見ながら訊いた。(アフリカ旅行記)だね。だが、君が讀みかけてゐる頁に徴が生えてゐるぢやないか。それに新聞も見えない……君は新聞も讀まないのだね?」

「それは活字が小さいので、眼を悪くするからだよ……それに必要もないからねえ。若し何か新しい事でもあれば、一日の中に皆なからそれを聞けるしさ。」

「イリヤ君、冗談を言ふなよ!」と、シトリーツは驚いてオブローモフの方を見ながら言った。「君自身は何をしてゐるんだ? 轉がつて來た土塊のやうに寝てゐるぢやないか。」

「アンドレイ君、全く土塊のやうだ。」と、オブローモフは悲しさうに答へた。

『でも意識してゐると云ふことは辯解になるかねえ?』

『いや、之は君の言葉に答へたまでさ。僕は辯解しやしないよ。』と、オブローモフは溜息を吐きながら言つた。

『斯んな眠つた生活から出給へ。』

『以前には出ようとして成功しなかつたのだが、今では……何故だらう？ 何にも僕を呼び醒すものがないのだ。精神も緊張してゐない。智慧は安らかに眠つてゐる！』と、オプローモフは辛つと氣が附く位に熱して言葉を結んだ。『だが、斯んな話は最う止さう……それよりか君は今、何處から來たんだね。』

『キエフからさ。二週間経つたら外國へ出かけるのだがね、君も行つたら何うだ……』

『よし、伴れて行つて呉れ給へ……』と、オプローモフは決心した。

『ぢや、卓子に向つて、願書を書いてね、明日それを出し給へ……』

『もう明日直ぐに！』と、オプローモフはシトリツツの言葉を遮つた。『馬鹿に急ぐんだねえ、宛然誰かに追はれてゐるやうだ！ まあ考へた上で相談をしよう。彼方へ行つて何うなるか分りやしない！ 先づ第一に村へ行くのだから、外國行きは……後にしよう……』

『何故後にするのだ？ 醫者も命じたぢやないか？ 君は先づ脂肪と身體の重量を捨てて了ひ給へ。さうすれば精神の眠も飛び去るよ。靈と肉とに體操をさせる必要がある。』

『いや、アンドレイ君、其んなことをすれば僕は益々疲れるばかりだ。僕は健康を害ねてゐるのだからね。だから、寧ろ僕には構はずに、君一人で行つて呉れ給へ……』

シトリツツは横たはつてゐるオプローモフを見た。オプローモフもシトリツツを見た。

シトリツツは頭を振つたが、オプローモフは溜息を吐いた。

『君は生きるのが面倒だと見えるね』と、シトリツツは訊いた。

『アンドレイ君、實際さうだ、面倒なんだ。』

アンドレイは何うしたならばオプローモフが生々するだらうか、オプローモフの生々した處は何處に在るだらうかなど、頭の中で考へながら一言も出さずに凝つとオプローモフを眺めてゐた。が、俄かに笑ひ出した。

『何うしたんだ、君の穿いてゐる靴下は、片方は絹で、片方は木綿ぢやないか？』と、シトリツツはオプローモフの兩足を指差しながら俄かに言つた。『それに何うして襦袢を裏返しに着てゐるのだ？』

オプローモフは足を見て、次に襦袢を見た。

『實際だねえ。』と、オプローモフはおどろしなげに言つた。『あのザハール奴、僕を苦しめて來てゐるのだ！ 君には僕が何のくらゐザハールに困つてゐるか分るまい！ 喧嘩はする、馬鹿なこととは言ふ、その癖、仕事は些つとも偽ないのだ！』

『ねえ、イリヤ・イリイチ君！』と、シトリツツは言つた。『僕は決して君を此のままにして置きはしないよ。一週間も経つたら君は自分を見て驚くに相違ない。晩になつたら君に確實な計畫を聞かせよう。其計畫を僕は君と一緒に實行しようと思つてゐるのだ。さあ衣服を着給へ。いゝかね、うんと元氣附けてやるから。ザハール！』と、彼は叫んだ。『イリヤ・イリイチに衣服を着せて呉れ！』

『何處へ行かうと言ふのだ？ 今直ぐに、タランチェフとアレクセーエフとが晩飯を食ひに來るのだよ。』

だから晩飯を済してから行かう……』

『ザハール、』と、シトリッツはオブローモフには耳も貸さずに言った。『主人に衣服を着せて呉れ。』

『アンドレイ・イワヌイチ様、長まりやした。ぢや、一寸靴を磨いて参りやすべえ。』と、ザハールは機嫌よく言った。

『何うしたんだ？お前は五時までには靴を磨いて置かなかつたのか？』

『磨いて置きやした。最う先週のうちに磨いて置きやした。けれど旦那様が戸外に出ねえので、また汚れて了ひやした。』

『ぢや、其まゝ持つて来い。それから俺の靴を客間に入れて呉れ。俺は此處に宿るのだからね。僕は直ぐに、衣服を着るから、イリヤ君、君も支度をし給へ。晩飯は何處か途中で食はう。それから二三軒訪問するのだ。そして……』

『でも君……あまり突然ぢやないか……まあ待ち給へ……一寸考へて見る……それに僕は髯も剃つてゐない……』

『何にも考へることアないよ。たゞ頭の後でも梳きつけて置きやい……途中で髯は剃れる。僕が案内するよ。』

『それから僕等は何な家に行くんだね？』と、オブローモフは悲しきうに叫んだ。『知らない人の許ぢやないかね？何を考へ出すんだ！僕は寧ろイワン・ゲラシモウイチの許へ行きたいのだ。三日も行かない……』

『アンドレイ君、君は他人を滅多に悪く言はなかつたのに、何うしたんだ。それにあの男は良い人物なんだ。たゞオランダ式の襯衣さへ着て歩かなけりやねえ……』

『君は彼の男の許へ行つて何を爲るんだ？彼の男と何を話してゐるんだ？』と、シトリッツは訊いた。

『彼の男の許にゐるとねえ、君、何だか整然として居心地が良いのだ。室は小清楚してゐるし、長椅子は、腰掛けると頭まで埋まつて、人が見えなくなるくらゐとつぶりと窪むしね。窓は羅紗の窓帷ですつかり閉ぢられてゐるし、十二羽のカナリヤや、三匹の犬などもゐるしねえ。その犬がまた馬鹿に良い犬なんだよ！卓子からは一片のパン砕だつて落ちやしないし、彫刻像はいつも家庭の光景を描いてゐるしねえ、行くと最後、歸るのが厭になる位だ。何事をも心配せず、又考へもせずに腰掛けて居れるのだ。自分の傍には人がゐるがね……無論餘り惻い人聞ぢやない。だから其の人と一緒に考へたり、思想の交換をしたりすることは出来ない。その代り狡猾な人間ぢやない。人の良い快活な虚偽のない人間だよ。人の眼障りになるやうなことを爲ない人だ！』

かつたからね。』

『イワン・ゲラシモウイチと云ふのは誰だね？』

『以前、僕と一緒に務めてゐた男さ……』

『あゝ、あの白髪頭の醉漢だらう！何うしてあんな處が面白いのだ？あんな馬鹿野郎と一緒に時間を潰すのは、餘程好事家だよ！』

『アンドレイ君、君は他人を滅多に悪く言はなかつたのに、何うしたんだ。それにあの男は良い人物なんだ。たゞオランダ式の襯衣さへ着て歩かなけりやねえ……』

『君は彼の男の許へ行つて何を爲るんだ？彼の男と何を話してゐるんだ？』と、シトリッツは訊いた。

『彼の男の許にゐるとねえ、君、何だか整然として居心地が良いのだ。室は小清楚してゐるし、長椅子は、腰掛けると頭まで埋まつて、人が見えなくなるくらゐとつぶりと窪むしね。窓は羅紗の窓帷ですつかり閉ぢられてゐるし、十二羽のカナリヤや、三匹の犬などもゐるしねえ。その犬がまた馬鹿に良い犬なんだよ！卓子からは一片のパン砕だつて落ちやしないし、彫刻像はいつも家庭の光景を描いてゐるしねえ、行くと最後、歸るのが厭になる位だ。何事をも心配せず、又考へもせずに腰掛けて居れるのだ。自分の傍には人がゐるがね……無論餘り惻い人聞ぢやない。だから其の人と一緒に考へたり、思想の交換をしたりすることは出来ない。その代り狡猾な人間ぢやない。人の良い快活な虚偽のない人間だよ。人の眼障りになるやうなことを爲ない人だ！』

『君等は何を爲るんだね?』

『何を爲るつて? 僕が行くと、足を交へて長椅子の上に對坐するさ。先生は煙草を喫してゐる……』

『で、君は?』

『僕も矢張り煙草を喫んだり、カナリヤの囀つてゐるのを聞いたりしてゐるさ。そのうちにマルファが沸湯器を持つて来るねえ。』

『タランチエフにイワン・ゲラシムイチか!』と、シトリーツは肩を擦ませながら言つた。『さあ、速衣服を着給へ。』と、彼は急がせた。『では、タランチエフが來たら斯う言つて呉れ、』と、彼はザハールの方に向いて附け加へた。『僕等は家で飯を食はないんだつてね。それからイリヤ・イリイチは夏ぢう家では飯を食はないし、秋になれば種々な仕事があるからお前達に會ふことは出来ないつてね……』

『申しやす、忘れずにすつかり申しやす。』と、ザハールは答へた。『が、晩飯は何う致して置きやすべえ?』

『お前も誰かと一緒に身體の爲めになるやうな物を食べるがい。』

『畏まりやした、旦那様。』

十分間も経つとシトリーツは衣服を着換へ髯を剃り、髪を梳つて出て來た。が、オプローモフは憂鬱さうに蒲團の上に坐り、徐々と襯衣の胸を合せてゐた。が、釦は巧くかゝらなかつた。彼の前にはザハールが皿か何かを持つてゐるやうに半ば磨いた靴を持つたまゝ片膝を突いて立つてゐた。主人が襯衣の胸を合せて了つたら靴を履かせようと待つてゐるのであつた。

『お前はまだ靴を履かせないのか!』と、シトリーツは吃驚して言つた。『さアイリヤ君、速くし給へ、速く!』

『だが、何處へ行くんだ? それに、何しにさ?』と、オプローモフは悲しさうに言つた。『僕は何も彼も見て知つてゐるよ。僕は飽々してゐるんだ、行きたくないなア……』

『速くし給へ、速く!』と、シトリーツは急がせた。

四

最う餘程遅かつたが、彼等は何處かへ行つて用を達し、それからシトリーツが誘つた金細工師と一緒に晩飯を食ひに行き、次に此の金細工師の別荘にお茶を飲みに行つた。其處には大勢の人が集まつてゐた。オプローモフは本當の孤獨の中から突然に人の群へ入つた。彼等が家へ歸つたのは最う深夜であつた。

翌日も其の翌日も矢張り斯う云ふ具合にして送られたので、此の週間は忽ち閃めき過ぎた。オプローモフは反對したり、訴へたり、議論をしたりしたが、何かに引きつけられるやうに自分の親友の行く處には何處へでも隨つて行つた。

或時、何處からか夜遅く歸つて來た時、オプローモフは何時よりも激しく此の詰らない事に反對した。『最う幾日となく、』と、オプローモフは夜衣を着ながら呻つた。『靴を脱いだことがない。足は感じを失

なつてゐる！斯んな君のペテルブルグ生活は厭だよ！」と、彼は長椅子の上に横たはりながら續けた。

「ぢや、君は何な生活が好きなのだね？」と、シトーリツは訊いた。

「此處のやうな斯んな生活は厭さ。」

「此處の何がそんなに気に入らないんだ？」

「何も彼も皆だよ。お互に喧嘩しながら、永久に醒醒することも、醜い色情、殊に貪慾の永久の戯も、路の奪ひ合ひも、嘘も、空言も、お饒舌の浴せ合ひも、足先から頭まで見廻すことも皆な厭だ。奴等が言つてゐる事を聞いてゐると、頭が昏昏として胸が悪くなる。皆な見たところは賢こさうで、氣品のある顔附をしてゐるが、あれを遣つた彼の男は拘引されたよ（驚いたね、何うしてだ？）など、誰か叫んでゐるぢやないか。（此奴は昨日俱樂部で負けたんだ。彼奴は三千留儲けたよ！）だつてさ。怠屈だ、怠屈だ、怠屈だ！……何處に人間らしい處がある？何處に彼等の美點がある？何處にその美點は隠れてゐるのだらう？何うしてその美點はあんな下らないものに變つたのだらう？」

「世間と社會とは何事かしなければならぬのだ。」と、シトーリツは言つた。「誰でも自分の趣味を有つてゐる。其處に生活が……」

「それが世間かね、社會かね！アンドレイ君、君は僕を故意と此の世間と社會とに追ひ込んで、其處に居たいと云ふ希望を益々破壊しようとしてゐるらしいねえ。生活か、生活は結構だ！だが、其の生活の中に何を搜したものでらう？智慧と感情との興味を搜すのかね？だが、君、見給へ、凡ての人達を自分

エの〇

の周圍に廻轉させる中心が何處にある？ そんなものはありやしない、深みがあつて生々させるやうなものは何にもないんだ。皆な死人だ、眠つてゐる人間だ、僕よりも悪い。之が世間と社會との會員なんだ！何が彼等を生活に入れるのだ？彼等は寝てゐない。が、蠅のやうに飛び廻りながら毎日眠つてゐる。何と云ふ態だ？客間に入つても、面白い話はせずに、頭を並べて其れく座を占め、溫柔しく考へ込んでまゝ坐つてゐる——骨牌を取る爲めなんだ。何も言ふ事はない。實に立派な生活問題だ！活動を求める智慧にとつて立派な實例だ！これでも彼等は死人ぢやないのだらうか？彼等は坐つたまゝ一生涯眠つてゐるのだと言へないだらうか？僕が家に寝てゐて、頭を三頭馬車や舞踏などで掻き亂さないのは、何うして彼等の爲ることより悪いのだらう？」

「そんな話は最う陳腐なことだ、もう何百遍となく話し合つたことぢやないか。」と、シトーリツは言つた。「何かも些と新らしい事はないかね？」

「だが、我國の立派な若者は何を爲てゐるのだらう？歩いたり、ネフスキイ街道を馬車で駆けたり、舞踏したり爲ながら眠つてゐるのぢやないだらうか？毎日々々空虚な日が並んで行くだけだ！まあ見給へ、傲慢さうに、妙に威張つて、蔑すむやうな眼附で、誰某は自分達のやうな衣服を着てゐないとか、自分達のやうな名前や稱號を有つてゐないなど、思ひながら人々を見下してゐるぢやないか。そして不幸な彼等は、自分達が群衆より偉いのだと想像して、（吾々は吾々以外に誰も務めたことのない務をしてゐる。吾々は且公爵家の舞踏會の時など、前列の安樂椅子に腰掛けた。其處には吾々以外の者は腰掛け

ることが出来ないのだ。など、考へてゐる……そしてお互に落ち合ひさへすれば、歌のやうに飲んだり罵り合つたりしてゐる！これが生きた眠らない人間と言へるだらうか？が、若者ばかりぢやない。中年の連中を見給へ。集ると、お互に飲み食ひをする。が、其處には喜びもなければ、善意もなく、お互の親密もないのだ！午餐會や晚餐會に集つても、何の喜びもなく、たゞ料理人や卓子掛を褒めたり、手の蔭で嘲笑つたり、足で蹴り合つたりするくらゐで、役所に居るやうに冷淡なものだ。三日目の午餐會で、（あれは馬鹿だとか、これは脊が低いとか、誰は盗人だとか、誰は狂人だ）など、歸つた人の悪口を言ひ始めた時、僕は何處を見てゐて良いか分らなかつたよ。一層卓子の下へでも隠れようかと思つた程であつた。これこそ本當の悲劇だ！ 奴等は斯んな事を言ひながらも、（お前も扉の外に出ると、矢張り斯う云ふ悪罵を浴せるぞ）と云つたやうな眼附をしてお互に見合つてゐるんだらう……斯んなことなら、何の爲めに奴等は落ち合ふのだらう？何の爲めにあんなに固くお互に手を握り合ふのだらう？眞實の笑も、同情の閃もありやしない！何んでも大きな位置と名前とを得ようとしてゐる。（俺の許にはしかくの人）が來た。そして俺は誰某の許へ行つた。）と言つて自慢し合つてゐる……これが何うして生活なんだ？僕は斯んな生活は厭だ。僕は斯んな生活の中で何を學ぶことが出来るだらう？斯んな生活が何うして僕を誘き附けることが出来るやう？

『ねえ君、イリヤ君、』と、シトーリツは言つた。『君は昔の人が言ふやうなことを言つてゐるよ、昔の書物には大概そんなことが書いてあつたものさ。が、それでもいゝ。幾分當つてる點もあるし、醒めた所もあるからねえ。で、それから？も少し続け給へ。』

『何を續けるんだ？まあ見給へ、誰も爽やかで健康な顔色をしてゐないぢやないか。』

『それは氣候の所爲だよ。』と、シトーリツは遮つた。『第一、君の顔色なんか悄然としてゐるぢやないか。君は駆け廻らずに、何時も寝てばかりゐるからだよ。』

『晴やかな落着のある眼附をした者は一人もゐやしない。』と、オプローモフは續けた。『皆な或る重苦しき心配と、悲哀とに感染して、病的に何物かを搜してゐる。彼等は眞理や幸福などの寶を自分の爲めにも、他人の爲めにも見附けることが出来ず……反つて友人の成功を妬んで着くなつてゐる。或者は、明日裁判所に行かなければならぬ心配がある。事件は足懸五年も續いて、しかも相手の方が勝つてゐる。彼は五年間頭の中になつた一つの考へと希望とを有つてゐたのだ。それは、相手を倒して、相手の倒れた上に自分の幸福を建てようと思ふのだ。五年間、歩いたり、腰掛けたり、待合室で溜息を吐いたりするところ——これが人生の理想であり、且つ目的なのだ！又或者は、毎日出勤して、五時まで腰掛けてゐなければならぬ運命にあることを零してゐる。かと思ふと又或者は、斯うした恩恵に與からないことを頻りに歎息してゐる……』

『イリヤ君、君は哲學者だ！』と、シトーリツは言つた。『皆な離脱してゐるのに、たゞ君だけは何物をも求めないのだからねえ！』

『ところが、其處に一人顔の黄色い眼鏡をかけた紳士がゐてね、』と、オプローモフは續けた。『或る委員

の演説を読んだかと頻りに僕に訊ねるのだ。僕は新聞を読んでゐないからと言ふと、先生僕に對して眼を露いて見せた。それから話はリュードウィク・フィリップのことになり、先生、此の人を自分の生の父親か何かのやうに言ふんだ。それから、何故フランスの公使はローマを去つたか僕がそれを何う思つてゐると疊みかけて訊く。斯うして一生涯自分に世界中の出来事と云ふ重荷を負はせ、聲の出る間は一週間でも叫んでゐる！今日は、メクメート・アリが軍艦をコンスタンチノーポルに派遣したが、何の爲めだらうなど、頭を捻る。明日は、ドン・カルロスが成功しなかつたと言つて頻りに恐慌する。彼處では運河を掘つてゐるとか、此處では軍隊を東方へ送つたなどと言つて、先生夢中になつてゐる！そして自分に軍隊を向けられてもしたやうに顔色を失なつて走せ廻つたり、叫んだりしてゐる。彼等は種々様々なことを考へたり、想像したりする。が、自分自身のことを考へるのは怠屈なんだ。これは彼等の興味を唆らないのだ。しかも彼等の叫び聲の下には永久に眼醒めない眠が横はつてゐる！が、それについて彼等は無關心だ。彼等は自分の帽子を被つて歩かないのだ。彼等は自分の仕事を有つてゐないのだ。彼等は何處へでも突進して行く。が、何物にも向つて行きはしない。此の圓轉滑脱の下に空虚と凡てに對する同情の缺乏とが潜んでゐる！地味な苦痛の多い小徑を選んで、其の小徑を進み、其處に深い軌道を刻み附けると云ふこと——これは無論、怠屈で、見榮のしないことだからねえ、其處では博學と云ふことなど何の助けにもならないし、また誰の眼にも塵を入れることが出来ないのだ。』

三〇四

何處にあるのだね？」と、シトリツは訊いた。

オプローモフは俄かに黙つた。

『それは計畫にあるのだが……最上止さう……』と、彼は言つた。『奴等は勝手なことを爲るがいゝさ！』と、彼はやがて悲しさうに附け加へた。『僕は奴等には關涉しないよ。又奴等の中に何物も求めはしない。僕はたゞ此の世の中に常規的生活を見ることが出来ないまでだ。いや、あれは生活ぢやない。あれは、生活の常規と、自然が人間に目的として示して居る理想との破壊だ……』

『その生活の常規とか理想とか云ふのは何だね？』

オプローモフは答へなかつた。

『ぢや、君は何な生活を描きたいのだ？』と、シトリツは問ひ續けた。

『僕はもう描いたんだよ。』

『其れは何う云ふんだね？何うか聞かせ給へ、何う云ふんだ？』

『何う云ふんだつて？』と、オプローモフは仰向になり、天井を眺めながら言つた。『さうさ、先づ村に行かうと思ふんだ。』

『それは勝手にするがいゝ。』

『計畫はそれだけぢやない。次に僕は一人ぢやなく、妻と一緒に行くのだ。』

『おい！何うしたんだ！何を言つてるんだ！何を待つてるんだ？まだ三四年は誰も君のここへ來やした

三〇五

いよ……」

「それは仕方がないさ、だが、それは運命ぢやないんだ！」と、オプローモフは溜息を吐きながら言った。「財産が許さないのだ。」

「そんなことがあるものか、オプローモフがあるぢやないか？ 三百人の百姓があるぢやないか！」

「あれが何だ？ 妻と一緒に何うして暮して行ける？」

「二人で、何して暮して行くつて？」

「子供が生れるぢやないか？」

「子供達は自然に教育されるものだ。子供を教育するなら自然のままに……」

「いや、貴族から職人は出来やしないよ」と、オプローモフは冷淡に遮つた。「また、子供がないにしても、何うして二人で暮せる？ 妻と二人と云ふのは、たゞ言ふだけで、實際は結婚すると直ぐ、僕の家には婆さん達がやつて来るのだ。幸福な家庭を見給へ。親戚ばかりか、親戚でない者も又女中頭でない者も、たとへ一緒に暮さないまでも彼等は皆、毎日珈琲を飲んだり、晝飯を食つたりしにやつて来る……三百人の百姓で何うして斯んな寄宿舎を養つて行ける？」

「よし、ぢや、君に更に三十萬留も呉れる者があつたら、君は何うするね？」と、シトリツは好奇心に驅られながら訊いた。

「直ぐに質屋を始めて、」と、オプローモフは言つた。「利子で暮すさ。」

「田舎は利子が安いよ。何うして何處かの會社、速い話が僕等の會社にでも預けないのだ？」

「駄目だよ、アンドレイ君、僕を吹き飛ばしちやいけないよ」

「吹くものか。君は僕を信じないのだね？」

「決して信じない。君の言ふやうな事がある筈はないからねえ。が、そんな事でもあつてくれても悪くはないんだが。今、僕は一文なしで閉口してゐるんだ。銀行あたりで少し貸して呉れまいかねえ？」

「よし、貸して呉れたら君は何うする？」

「其時は新築の静かな家に行くさ……周囲には心持の良い人達が、例へば君が住んでゐる……だが、君は一つ處に凝つとしてはゐられないのだね……」

「ぢや、君は何時までも凝つとしてゐるつもりなんだね？ 何處へも行かないつもりだね？」

「決して何處へも行かない！」

「然し、若し生活の理想が一つ處に坐つてゐることなら、何うして人々は到る處に鐵道を敷いたり、汽船を走らせたりするのだ？ イリヤ君、そんな事を中止するやうにと云ふ議案でも出さうか。僕等は何處へも行かないのだからねえ。」

「僕等が乗らなくても、乗る者は澤山あるよ。支配人や、註文人や、商人や、役人や、暢氣な旅行者など、際限なく歩きたがる連中が澤山あるからね。勝手に旅行させて置くが……」

「ぢや、君は一體何者なんだ？」

オプローモフは黙つてゐた。

『君は社會の何う云ふ部類に屬してゐると思つてゐるね？』

『ザハールに訊いて見たまへ。』と、オプローモフは言つた。

シトリッツは言葉通りにオプローモフの希望を實行した。

『ザハール』と、彼は叫んだ。

ザハールは眠さうな眼附をして遣つて來た。

『此處に寢てゐるなア誰だ？』と、シトリッツは訊いた。

ザハールは俄かに眼を醒まし、傍の方から不思議さうにシトリッツを見て、次にオプローモフを見た。

『誰だとは何故が？お前様には見えませぬえだか？』

『見えない。』と、シトリッツは言つた。

『妙な人でねえか？これは且那のイリヤ・イリイチ様だに。』

シトリッツは笑つた。

『よし、彼方へ行け。』

『且那樣！』と、シトリッツは繰り返して、アッハッハッと腹を抱へて笑つた。

『いや、紳士だ。』と、オプローモフは悲しきうに言ひ直した。

『いや、いや、君は且那樣だ！』と、シトリッツは笑ひながら續けた。

『何う云ふ區別があるんだ？』と、オプローモフは言つた。『紳士と云ふのは且那のことぢやないか。』

『紳士と云ふのは、』と、シトリッツは言つた。『靴下も自分で履くし、靴も自分で脱ぐ且那のことだよ。』

『それは英國人だ。英國人には召使が少ないからさ。だが、露西亞人は……』

『それより、續けて君の生活の理想を描寫して呉れ給へ……此の通り、君の親しい友達が周圍に居るの

だ。問題を進める必要はない。君は自分の生涯を何う云ふ風に送らうと思つてるのだね？』

『ねえ君、朝起るだらう。』と、オプローモフは頭の後部に兩手を敷きながら言ひ始めた。彼の顔には平

和の色が漲つた。彼は最う村にゐるやうな氣持であつたのである。『天氣は好く、空は眞青で、一片の雲も

ない。』と、彼は言つた。『計畫によると、僕の家の一方は、東向の露臺で、庭と畑とへ向いてゐる。他の

一方は、村の方に向いてゐる。妻が起きるのを待つてゐる間、僕は夜衣を着て、朝日を呼吸しながら庭の

中を歩き廻る。其處には最う園丁がゐる。僕は彼と一緒に花に水を遣つたり、灌木や大木の枝を鋏んだ

りする。又妻の爲めに花束を作る。それからお湯屋か河かへ水浴に行く。歸つて來ると——露臺は最う

開けてある。妻は下衣を着、軽い頭巾を被つてゐる。頭巾は辛つと頭に乗つてゐて、最少して之り落ち

さうになつてゐる……妻は僕を待つてゐる。(お茶が入りましたよ)と、彼女は言ふ。何と云ふ接吻だら

う！何と云ふお茶だらう！何と云ふ平和な安樂椅子だらう！僕は卓子の傍に腰掛けてゐる。卓子の上

はビスケットや、杏や、新しい牛酪などが載つてゐる……』

『それから？』

『それから、悠たりとしな上着か、或はジャケットか何かを着、妻の腰を抱いて、一緒に際のない薄暗い並木路に入る、静かに考へ沈みながら黙つて歩くか、或は考へや空想などを語つたり、幸福の瞬間を、脉搏のやうに算へたり、感激して心臓の鼓動するのを聞いたり、自然の中に同感を求めたり……徐々と河や野原などへ行つたりする……河は軽く波打つてゐる。穂は風の爲めに波打つてゐる。熱さが激しい……小舟に乗る、妻が櫂を取る、櫂は辛つと持ち上る……』

『イヤ君、君は詩人だ！』と、シトリツは遮ぎつた。

『さうだよ、生きてゐるうちは詩人さ。何となれば、生活其物が詩だからね。其の詩を破壊することは人の勝手だ！次には果樹園へ入る。』と、オプローモフは想像で描いた幸福の理想を呼吸しながら續けた。彼は最う疾から描いてゐた光景を想像の中から引き出したので、感激して止め度もなく饒舌つた。

『桃と葡萄とを見廻り。』と、彼は言つた。『食卓に出すべきものを言ひ附け、やがて家へ歸つて淡白りと朝飯を済し、そして客を待つ……其處にマリヤ・ペトロウナとか何とか云ふ女から妻に宛て、書物や樂譜と一緒に手紙が来る、或は贈物としてアナナスが来る、でなけりや、自分の温室に非常に大きな水瓜が熟する——良い親友に明日の晩餐にと云つて送つて遣る。そして僕も其處へ出かけて行く……此の時、料理部屋では大騒動をしてゐる。料理番は雪のやうに白い前掛を着、頭巾を被つて忙しさにしてゐる。一つの焼鍋をかけるかと思ふと、他の焼鍋を下ろす。彼方で粉を捏てゐるかと思へば、此方では捏た粉を焼いてゐる。彼方では水を汲んでゐる……小刀の音もする……青物を切る音もする……彼方ではアイ

スクリームを廻してゐる……晝飯まで料理部屋を覗いてゐると面白い。焼鍋を開けたり、匂を嗅いだり、酒を振つたり、杏を切つたりしてゐる。それから寢床の上に横になる。妻は聲高に何か新しい物を讀む。二人は讀むのをやめて、議論をする……が、其の時客が来る、例へば、君が細君と一緒にさ。』

『え、君は僕にも妻を持たせるのだね？』

『屹度持たせる！まだ二三人の親友が来る。皆な同じやうな顔附をしてゐる。昨日言ひ残しの話を始める。冗談が出たり、雄辯な沈黙や沈思などが始まつたりする——それは位置を失つた爲めでもなければ、議會の仕事の爲めでもなく、希望と歡樂との飽満からなのだ……居ない者に對し、口角泡を飛ばすやうな激論を聞くことはない。君が扉の外に出ると直ぐに君にも其の激論を約束するやうな眼附を投げつけることもない。皆な愛すべき人物だ。皆な善良な人達だ。パンを鹽箱に入れさせるやうな者もない。話相手の眼には同情が見える。冗談の中にも誠意がある。嘲笑惡罵と云ふやうなものはない……皆な眞心から交際をする。眼や言葉などに現はれることは、心にあることなのだ！午餐が済むと、物見臺に上つて……』

『君が僕に描いて見せるものは、祖父や父親時代に行はれてゐた事と同じものだ。』

『いや、そんなことがあるものか、』と、オプローモフは恥かしさうに答へた。『何處にそんな處がある？僕の妻はジャムや茸などを食べやしない。束絲を算へたり、田舎の手織布を擲げたりしやしない。娘の頬を敲きもしない。樂譜とか、書物とか、大ピアノとか、華美な家具などは昔見ることの出来なかつ

たものだ。』

『だが、君自身は？』

『僕自身は去年の古新聞を読みはしない。荷馬車に乗って歩きもしない。素麺も雁も食べない。が、英國俱樂部や公使館などで料理番を教育してやるさ。』

『それから？』

『それから、焼肉をこきへ、荷車に沸湯器と食後の菓子とを載せて樺林か、でなければ野原か、或は草刈場に行き、積草の間に絨氈を敷き、寒鹽鮭やピフテキなどを食べる。百姓共が野良から遣つて来る。鎌を肩に擔いで、其處には枯草を積んだ荷車が這ふやうに動いてゐる。馬も車も枯草に覆はれて見えな。上の方の積草から花の附いた百姓の帽子や、子供の頭などが突き出てゐる。彼處には一群の裸足になつた婆さん達が鎌を持ってガヤ／＼と何事か饞舌つてゐる……突然主人達が来るのを見附けると、静かにして、丁寧に辭儀をする。其中で燃えるやうな紅い頬をし、衣服から眩を露き出し、悸々と伏眼にした狡猾さうな一人の婆さんは、主人の愛嬌には與からないが、自分だけで幸福だと云つたやうな様子を見せてゐる……チエ！……妻が斯んな女を見ないで呉れるといふが！』

オプローモフ自身もシトリツも腹を抱へて笑つた。

『そのうちに野原は濕々して、』と、オプローモフは言葉をつ結んだ。『暗くなる。霧は海を覆くり返したやうに、裸麥の上に擴がる。馬は肩を振り、蹄で地面を搔く。家に歸る時になる。家では最う燈火が輝

き出す。料理部屋では五本ばかりの小刀の音がする。茸のフライとカツレットと果實とを持って来る……其處に樂器の音が聞える……Casta diva……Casta diva！』と、オプローモフは歌つた。『僕は Casta diva を冷靜に想ひ起すことは出来ないのだ。』Cavatina の初を歌つて了ふとオプローモフは斯う言つた。『此の女は心から泣いてゐる！此の音の中には何とも言へない悲調がある！……周囲の者は誰も其の何故であるかを知らない……只、彼女一人知つてゐる……神祕が彼女を引き附ける。彼女は神祕を月に訴へる……』

『君は此の歌曲が好なのだね？僕も大好だ。オリガ・イリンスカヤは之を上手に歌ふよ。僕は君を紹介しよう——聲も好いし、歌ひ方もいゝ！しかも彼女は魅力のある子供のやうだよ！尤も僕は或は偏した批評をしてゐるかも知れない。僕には彼女に對して弱點があるのだから……けれど、其れは兎に角、君は捉はれちゃ不可いよ、捉はれちゃ。』と、シトリツは附け加へた。『さア、其の次を話し給へ！』

『さア。』と、オプローモフは續けた。『まだ何かがあるかなア？……最う大概斯んなものだ！……お客は皆なそれぞれ離家や天幕へ歸る。が、夜が明けると或者は魚釣りに行き、或者は獵銃を持って出かける。が、或者は相變らず凝つと自分の室に坐つてゐる。』

『手にさへ何にも持たずに？』と、シトリツは訊いた。

『君なら何か要るかね？ぢや、手巾でも持つてるといふさ。何うして君は凝つとして暮すことが出来な

いのだらう？』と、オプローモフは訊いた。『え？それぢや生活ではないと云ふのかね？』

『生涯さうしてかね?』と、シトリツは訊いた。

『白髪が生え、棺の中に入るまでさ。それが生活なんだ!』

『いや、それは生活ぢやない!』

『何うして生活ぢやないのだ? 斯うした生活に何の不足があるのだ? 君はまだ憐れな苦勞の斷えない人物と、心配事と、議會や、兩替や、活動や、上申書や、大臣の宴會や、位階や、食費の増加などに關する問題とを見たことがないのだよ。が、談話は必ず心からすべきものだ! 君には借間を代へなければならぬやうなことは決してあるまい——が、たゞ引越をしないと云ふ一事が何のくらの價值のあることか分りやしない! でも生活でないと云ふのかね?』

『それは生活ぢやない!』と、シトリツは頑固に繰り返した。

『ぢや、君はこれを何と思ふかね?』

『それは……(シトリツは考へながら此の生活の名稱を搜した。) さうだね……オプローモフ主義とて

も言ふかね。』と、彼は遂々言つた。

『オプ……ロ……モフ主義!』と、イリヤ・イリイチは徐かに言つて、此の異様な言葉に驚き、此の言葉を一字一字に分解して見た。『オプロ……モフ主義!』

オプローモフは異様に凝つとシトリツを見詰めた。

『君の考へによると、生活の理想と云ふのは何處にあるのだ? オプローモフ主義は何故いけないのだ?』

と、オプローモフは靜かに悸々と訊いた。『誰でも僕の空想してゐるものに達することは出来るのだ! さうだらう!』と、彼は元氣よく附け加へた。『それに君等の遣つてゐる奔走や、欲望や、競争や、商業や、

政治などの目的は、平和の建設ぢやないか、失はれた樂園の理想に向ふことぢやないか?』

『でも、君のオプローモフ主義はユートピアだねえ。』と、シトリツは反對した。

『誰でも休息と平和とを求めてゐるねえ。』と、オプローモフは辯解した。

『皆ぢやない。君自身だつて、十年間生活の中にそれを求めてはゐなかつたのだからね。』

『ぢや、僕が何を求めたと云ふのだ?』と、オプローモフは過去を思ひ耽りながら不満さうに訊いた。

『考へて見給へ。君の書物と君の翻譯とは何處にある?』

『ザハールが何處かにしまつてゐるのだ。』と、オプローモフは答へた。『何處か其處らの隅に轉がつてゐるだらうよ。』

『隅に!』と、詰責るやうにオプローモフは言つた。『では、(力の有らんかぎり働かなければならぬ。何となれば露西亞に涸れざる泉を作り出すには手と頭とが要る。之は君の言葉だ) 更に楽しい休息をする爲めには働かなければならぬ。が、休息すると云ふことは技巧的で、華やかで迂遠な生活、即ち藝術家や詩人などの生活をするこの意味である)』と云ふ君の思想も矢張り其の隅に轉がつてゐるのだらう。矢張りザハールがさう云ふ思想を皆な隅に押し込んで了つたのかね? 君は書物を讀んで了つたら、益々知識を磨き、自分の思想を愛する爲めに外國を旅行したいと言つたのを覚えてゐるかね? (凡ての生活

は思想と労働だ」と、君は其時言つたぢやないか、(労働はたとへ裏面的で且つ暗黒でも、然し止めることの出来ないものである。そして自分の仕事を爲たと云ふ意識を持つて死にたい。)何うだ？此の思想は今、何處の隅に轉がつてゐるのだ？

『さうだ……さうだ……』と、オプローモフはシトリーツの一言づゝに不安らしく返事をしながら言つた。『僕がさう言つたことは確かに憶えてゐる……はてな……何うだつたか知ら、』と彼は突然過去のことを想ひ出して言つた。『アンドレイ君、僕等は最初スウヰツルを徒歩で旅行し、ヴェスキヤ山へ登り、ヘルクランに下つて歐羅巴を縦横に旅行するつもりだつたね。すつかり忘れてゐた！が、随分馬鹿々々しい事だ！』

『馬鹿々々しい事だ！』と、シトリーツは詰責るやうに言つた。『君はラファエルのマドンナの彫刻像(コルレヂの夜)と、(ベルウエデルのアポロン)とを見た時に、(あゝ！斯んな獨創を見たり、ミケル・アンゼロやテイチアンなどの作物の前に立ち、ローマの地を穢すことを恐れて沈黙したりするやうなことが今後あるだらうか？數世記に亘る名作を見たり、マートルや、キパリスや、橙などをその生地ではなく、果樹園で見たりするやうなことがあらうか？他の處で伊太利の空氣を呼吸することは出来ない。空の青味を味ふことは出来ない！)など、随分壯麗な熱語を頭から出したものだ！が、馬鹿々々しい事だらうねえ！』

『さうだ、さうだ、憶えてゐる！』と、オプローモフは過去を思ひ耽りながら言つた。『君は其時、僕の

手を取つて(其れを見ない間は決して死なないことを約束しよう)と言つたねえ。……』

『さうだ、憶えてゐる！』と、シトリーツは續けた。『それに、君は或時、僕の聖名祭を記念する爲めにセイを譯して持つて來たことがあつたが、其の譯は今も僕のところに保存してある。又君は數學の教師と議論をして、屹度圓と正方形とを修業しようと思つてゐた。が、何故途中で止めたのだ？……英語も勉強し始めた……が、矢張り君は遣り通さなかつた！僕が外國旅行を計畫して、獨逸の大學を見物しようと言つた時なんか、君は飛び立つて僕を抱き、勿體ぶつて僕に手を差し伸べながら(アンドレイ君、君の友なる僕は君と一緒に何處へでも行くよ。)と言つた——之は皆、君の言葉だ。君は今迄技巧家ではなかつた。何うしたんだ、イリヤ君？僕は二度も外國へ行き、相當の學識を持つてゐたのにボンヤ、イエナや、エルランゲンなどの大學で溫柔しく勉強をして來た。それから自分の財産として歐羅巴を研究した。だが、此の行き方——之は贅澤だ、そして誰でも此の方法を取ることはい出来ないし、又取らなければならぬものでもないのだ。が、露西亞は何うだらう？僕は露西亞を縦横に旅行して見て、初めて努力する氣になつたのだ……』

『でも、何時か努力を止めなければならぬまい。』と、オプローモフは言つた。

『決して止めない。何の爲めに止める必要があるのだ？』

『君の資本が二倍になつた時にさ。』と、オプローモフは言つた。

『たとへ資本が四倍になつても決して止めない。』

「然し、君の目的が」と、オプローモフは暫く黙つてゐた後で言つた。「若し君を永久に安心させることなく、やがて君を平和と休息とから遠ざけるものであつたら、君は何の爲めにそんなに齟齬してゐるのだ？……」

「それは田舎臭いオプローモフ主義だよ！」と、シトリーツは言つた。

「そんなら勤務で社會に名譽と地位とを得、次に尊敬の中に活動を止め、相當の休息を楽しむなら何うだ？……」

「それはベテルブルグのオプローモフ主義さ！」と、シトリーツは反對した。

「そんなら何時生活するのだ？」と、シトリーツの言葉を怨むやうにオプローモフは反對した。「何の爲めに一生涯苦しんでゐるのだ？」

「勞働其者の爲めて、其れ以外何の爲めてもない。勞働は形式でもあり、内容でもあり、生活の要素でもあり、目的でもある。少なくとも僕の勞働はそれだ。ところが君は生活から勞働を放逐してゐる。さうした生活は何に似てゐるだらう？僕はこれが最後かも知れないが、兎に角君を起たせやうと試みてゐるのだ。若し君が此の後もさうして此處にタランチェフやアレクセーエフなどと一緒に坐つてゐるなら、君は全く墮落してふ。そして自分が生きてゐるのさへ面倒になる。今一時か、或は生涯か、兎に角生きてゐるのが面倒になる！」と、彼は結んだ。

オプローモフはシトリーツを吃驚したやうな眼附で見ながら彼の言ふことを聞いてゐた。親友から自

分の前に鏡を立てられてもしたやうにオプローモフは自分を知つて驚いた。

「アンドレイ君、そんなに僕を罵り給ふな。それより一層のこと僕を助けて呉れ給へ！」と、オプローモフは溜息を吐きながら言ひ始めた。「僕は自分でもこれには苦しんでゐるのだ。若し君がせめて今日だけでも僕自身が自分の爲めに墓を掘り、自分の爲めに泣いてゐると云ふ僕の言葉を聞いてくれたら、斯んな罵倒は君の舌から出る筈はない。僕は何も彼も知つてゐる。何も斯も分つてゐる。が、力と意志とが無いのだ。僕に意志と智慧とを與へて、僕を君の好きな處に伴れて行つて呉れ給へ。僕は屹度君の後に隨いて行くが、一人では一寸動くのも厭だ。君が（今一時か或は一生涯）と言つたのは本當だ。も一年経つと、最う取り返しがつかなくなる！」

「君、君はイリヤ君か？」と、アンドレイは言つた。「僕の記憶するところによると、君は細つそりした元氣のいゝ子供で、毎日プレチステンカからクドリノまで歩いて行つたものだ。其處の小さい庭に……君は二人の妹を忘れやしまひね？ルーソーや、シルレルや、ゲヨーテや、バイロンを忘れはしまひね？君は其れ等を妹達のとこへ持つて行き、彼女等の持つてゐるコツテニヤ、ジャンリスの小説を取り上げ……彼女等の前でルーソーやシルレルやゲヨーテやバイロン達の趣味を賞讃し、淳化しようとしたぢやないか？……」

オプローモフは蒲團から飛び起きた。

「アンドレイ君、よく君は其んな事を憶えてゐたね？何うして忘れるものか！僕は彼女達と一緒に空想

もし、將來に對する希望も瞬き、計畫や思想や……それから感じさへも、君のお蔭で靜かに開發させることが出來、君の嘲笑を通れることが出來たのだ。ところが、今は之等のものが皆な死んで了つた。其後一度も繰り返されなかつた！あれは皆な何處へ行つたのだらう……何うして消えて了つたのだらう？ 殆んど僕には分らない！嵐も動搖も僕には無かつたのにさ。いや、僕は何にも失なつてはゐない。何の束縛も僕の良心を苦しめやしない。僕の良心は鏡のやうに澄んでゐる。何の打撃も僕の自愛心を殺しはしない。が、何うしたのか此の通り何も斯も皆な萎縮して了つたのだ！』

オブローモフは溜息を吐いた。

『アンドレイ君、君は僕の生活の中に今迄一度も建設的の火や破壊的の火が燃えたことがないことを知つてゐるだらうねえ？ 僕の生活は朝のやうにはならなかつた。朝になると次第に色彩と光とが消えるものだ。他の人は、朝のやうな生活に入ると、やがて晝のやうな生活に變つて行く。晝になると、暑さが焔のやうに燃える。凡て有りと有ゆる物は沸騰する。光眩しい眞晝になつて活動をする。それから次第に靜まり、益々蒼白めて、自然に段々と夕闇の中に消えて行く。ところが、僕の生活は夕暮から始つたのだ。妙ぢやないか。けれどもこれは斯うなんだ！僕は自覺した其の瞬間から、自分が最う消えて行きつゝあることを感じたのだ。先づ僕は局内で書類を書いてゐるうちに消沈し、次に書物を読んで眞理を知り、其の眞理を實生活に何う云ふ具合に應用したものと思ひ惑つた時に消沈した。噂や虚言や、罵り合や、辛辣冷酷な譏諷や、空言などを友人から聞いたり、友情が目的も同感もない會合によつて保

たれてゐるのを見たりした時に僕は消沈した。ミーナの爲めにも消沈したり、力を失なつたりした。ミーナには自分の収入の大部分を拂つて、彼女を愛してゐると想像してゐたのだ。僕は憂鬱で氣憤い心持をし、穴熊の皮で作られたラッコ皮を附けた外套を着てネワ河畔を逍遙した時と、それから堂々たる花婿としての僕に皆なが祝辭を述べた毎晩の婚宴の時に消沈した。街から別荘に、別荘からゴロホワヤ街道へ移つた時にも、春には牡蠣や鰻を漁り、秋と冬には寢て暮し、夏には散歩をし、一生涯を他の人達のやうに氣憤い平和な微睡の中に過ごさうと定めた時にも、生命と智慧とは少しづつ消え失せて行つた。……自愛心など——之は何に消費されたのだらう？ 有名な裁縫師に衣服を注文する爲めにだらうか？ 有名な家に入入りする爲めにだらうか？ プ公爵から握手を受ける爲めだらうか？ 兎に角、自愛心は生活の鹽だよ！ その自愛心は何處へ行つたのだらう？ 僕は現世の生活を理解しなかつたのだらうか、それとも此の生活が無意義であつたのだらうか？ いや、僕が良い點を知らなかつたのだ。僕が良い點を見なかつたのだ。誰も僕にその良い點を見せて呉れなかつたのだ。君は丁度慧星のやうに輝やかしくパツと現はれるとすぐに消えて了つた。僕は何も彼も忘れて消えて了つた……』

シトリツはオブローモフの言葉に最う暢氣に笑つて答へなかつた。彼は聞きながら悲しさうに黙つてゐた。

『君はずつと以前に僕の顔が晴々してゐないばかりか衰れてゐると言つたことがあつたねえ。』と、オブローモフは續けた。『さうだ、僕はすた／＼に着古した上衣なんだ。けれどもそれは氣候の所爲でもなけ

れば、苦勞の所爲でもない。それは、十二年の間僕の内部に閉ぢ籠められてゐた光が出口を求めて出ることが出来なかつた爲めに、自分の牢屋を焼いたからだ。此の光が自由になり得ずに消えたからだ。親愛なるアンドレイ君、僕は斯うして十二年間過ごしたのだ。だから最う醒めようと云ふ氣は更にないのだよ。『君は何故自由にもならず、何處へも逃げずに黙つたまゝ自滅するのだ？』と、シトリツはもどかしさうに訊いた。

『何處へ？』

『何處へ？ 百姓達を伴つてウォルガ河へ行つてもいゝぢやないか。彼處へ行けば、もつと活動もあるし、何か興味や目的や努力などもある。僕ならシベリヤかシトハ邊へ行くかも知れない。』

『君は直ぐに亂暴な方法を教へて呉れるから困るよ！』と、オプローモフは悲しさうに言つた。『それに僕は一人ぢやないのだからねえ。見給へ、ミハイロフや、ペトロフや、セミヨノフや、アレクセエフや、ステバーノフなどを……君は數へてゐないのだ。僕の一家は一大隊ぐらゐあるのだからねえ！』シトリツはまだ前の告白に感動させられてゐたので黙つてゐた。が、やがて溜息を吐いた。

『さうだ、水が大分流れ去つたのだ！』と、彼は言つた。『僕はこのまゝ君を見棄てることは出来ない。僕は先づ此處から君を外國へ案内し、それから村へ伴つて行かう。さうすれば心配も少なくなるだらうし、煩悶する必要もなくなるだらう。そして外國では仕事を見附けるんだ……』
『さうだ、何處かへ出かけよう！』と、オプローモフも思はず叫んだ。

『明日は先づ外國行旅行券を心配して、それから仕度に取りかゝるさ……僕は君から離れないよ……』
いか、イリヤ君？』

『君は直ぐに明日と出るねえ！』と、オプローモフは空想から醒めてもしたやうに反對した。

『では、君は今日のうちに出来ることを明日まで延したくないのだね？無闇に急ぐぢやないか！今日は最う遅いよ。』と、シトリツは附け足した。『だが、二週間後には僕等は最う遠い國へ行つてゐる……』
『何を言ふのだ、君、二週間の後になんて冗談ぢやない、餘り急だよ！……』と、オプローモフは言つた。『も少しよく考へてから仕度をさせて呉れ給へ……三頭馬車もどんなのか要るだらう……三ヶ月くらい餘裕がなけりや。』

『三頭馬車など何にするんだ！國境まで郵便車で行くか、それともリュベーチまで汽船で行くのだ。その方が何のくらゐ便利か知れない。外國にさへ入れば到る處に鐵道があるからねえ。』

『だが、借間や、ザハールや、オプローモフカなどは何うするのだ？何とか處置しなけりやなるまい。』と、オプローモフは辯解した。

『オプローモフ主義だよ、オプローモフ主義だよ！』と、シトリツは笑ひながら言つたか、やがて蠟燭を取り、オプローモフに挨拶をして寢室へ行つた。『一時か、或は生涯か——これを忘れ給ふな！』と、彼はオプローモフの方へ振り向き、自分が出た後の扉を閉めたながら附け足した。

(一時か或は生涯か) オブローモフが翌朝目を醒すと直ぐに此の怖ろしい言葉が彼の頭に浮んだ。彼は寢床から起き、三度ばかり室の中を歩き廻つて客間の方を見た。シトリーツは腰掛けて何か書き物をしてゐた。

『ザハール!』と、オブローモフは叫んだ。

煖爐から飛び降りる音が聞えなかつた。ザハールは來なかつた。シトリーツが彼に手紙を持たせて郵便局へ遣つたのである。

オブローモフは埃だらけになつた卓子の傍へ近づき、椅子に腰を下ろし、ペンを探つてインキ壺の中に浸したが、インキはなかつた。紙を捜したが、紙もなかつた。

彼は考へ込み、一本の指で埃の上に機械的に何か書いた。さて何を書いたのだらうと思つて見ると、其處に「オブローモフ主義」と現れた。

彼は書いた字を急いで袖で拭いた。彼は昨夜バリタザルが宴會の席で見たやうに、此の文字が火で焼に書かれてゐるのを夢見たのであつた。

ザハールが來た。彼はオブローモフが寢床の上にあないでちゃんと立つてゐるのに驚きながら茫然として主人を見た。オブローモフは此の吃驚した鈍い眼の中にも(オブローモフ主義)と書かれてゐるのを

見た。

(再た此の字か)と、イリヤ・イリイチは考へた(厭な字だ……毒々しい字だ!)

ザハールは平常の通り、櫛と、刷毛と、手拭とを持って、イリヤ・イリイチの頭髮を梳しに近づいて來た。

『彼方へ行け!』と、オブローモフは腹立たしきうに言つて、ザハールの手から刷毛を叩き落した。が、ザハールはもう櫛をも床の上に落してゐた。

『もうお寝みなさらねえだか?』と、ザハールは訊いた。『お寝みなさらなけりや俺、蒲團を直すべえ。』

『インキと紙とを持つて來い。』と、オブローモフは答へた。

オブローモフは(一時か、或は生涯か!)と云ふ言葉のことを考へてゐた。

理智と意力との此の絶望的な叫び聲に聞き惚れてゐると、オブローモフは自分に残つてゐる意志の中にあるものと、自分が此の貧弱な残つた意志を何處かへ運んだり、何かの中に入れたりしてゐることを識つた。

重苦しい考へを續けた揚句、彼はペンを採り、隅から書物を持つて來て、十年間も読みもせず、書きもせず、また考へもしなかつたことを一時間のうちにすっかり讀んだり、書いたり、考へたりしようとした。

彼は今、何うしたらいゝだらう? 進んだらいゝだらうか、それとも停まつてゐたらいゝだらうか? オブローモフの此の問題は、彼にとつて、ハムレットの問題より深刻であつた。進むこと——これは、彼の

肩からばかりでなく、心からも智慧からも悠たりとした夜衣を突然に脱ぎ棄てることである。これは壁から埃や蜘蛛の巣などを掃き落とすと同時に眼からも蜘蛛の巣を掃き落して、健全な視力を得ることである。何方へ其の第一歩を踏み出すべきであらうか？何から始むべきであらうか？知らない、出来ない……いや……奸策を用ゆるのだ、知つてゐる、そして……さうだシトリーツが直ぐ傍に居る。彼が今直ぐに教へて呉れるだらう。

だが、彼は何んと言ふだらう？（一週間のうちに、代理人に精密な注意を與へて彼を村へ遣り、オプロモフカを抵當に土地を買ひ、建築圖案を送つて家を建て、旅行券を貰つて、半年の間外國へ行き、餘分な脂肪を放散し、大儀な氣分を投げ棄て、以前友と一緒に空想してゐた空氣で精神を爽快にし、夜衣を捨てザハールやタランチュエフなどから離れて生活し、自分で靴下を穿いたり、靴を脱いだりし、夜だけ眠り、鐵道や汽船などで皆なが旅行する處を旅行し、それから……それから……オプロモフカに住居を定め、蒔附や收穫などは何うすればいゝかと云ふことや、何うすれば百姓は貧乏になつたり、金持になつたりするかと云ふことなどを研究し、畑へ行き、仕上場や、製造場や、水車場や、船着場などへも乗り行くのだ。さうなれば新聞や書物なども讀めるし、英國人が何故東洋に軍艦を送るかと云ふことを心配するやうになる……）と言ふだらう。

シトリーツが言ふことは何れ斯なことだらう！之が進むことなのだ……そして一生涯を斯う云ふ風に送れと言ふのだ！生活の詩的理想と別れるのだ！が、それは一種の鍛冶場で、生活ではない。其處には

永久に燭と、響と、熱と、喧騒とがある……何時生活するのだ？停まつてゐた方がよくはないだらうか？停まつてゐると云ふことは、襦衣を歪めて着たり、ザハールが寢煖爐から飛び降る足音を聞いたたり、タランチュエフと一緒に午餐を食つたり、何事にも無頓着であつたり、アフリカ旅行記を終りまで讀まなかつたり、タランチュエフの教母の家で平和に老老れたりすることだ……

（一時か、或は生涯か！）（生きるか、或は死ぬか！）だ。オプロモフは安樂椅子から立ち上つたが、一度で足がスリッパに入らなかつたので、再た腰掛けた。

二週間経つと、最うシトリーツはオプロモフから、直ぐに巴里へ行くと云ふ口約を取つて英國へ行つた。イリヤ・イリイチの手には最う旅行券が入つてゐた。彼は旅行用の外套を注文したり、帽子を買つたりした。事件は最うこれ程進捗してゐた。

ザハールは惘口に考へて、靴は一足だけ注文して、も一足の方の底を修繕すればいゝと言つた。オプロモフは蒲團や、絹編のチャケットや、旅行用の鞆などを買ひ込み、なほ食糧品を入れる袋さへ買はうとしたが、外國を旅行するのに食糧品を持つて歩く者はないと皆なに言はれたので、其れだけは思ひ止つた。

ザハールは仕立屋や商店などを歩き廻つて身體ちう汗みずくになり、店で受け取つた剩錢の中から十錢銀貨や五錢白銅などを澤山に自分の衣匣の中へ入れたが、アンドレイ・イワノウイチや、其他旅行に賛成した者達を怨んでゐた。

「彼の人一人で外國へ行つても何が出来やすべえ？」と、彼は商店で言つた。「聞けば 外國では、且那衆の用を達す者は皆な女中ださうだが、何うして女中が靴の持運までしやすべえ？それに、何うして女中が且那の素足に靴下を穿かせて呉れやすべえ？……」

彼は頼髯が側へ寄る程笑つて頭を振つた。オプローモフは一生懸命に、持つて行く物や、家に残して置く物などを書き附けた。彼は家具やその他の品物をウイボルグスカヤ・ストロナにゐるタランチェフの教母の家へ運び、三つの室に入れ、外國から歸るまで保存して置くやうにとタランチェフに頼んだ。オプローモフの知人達の中では、或者は半信半疑で、或者は笑ひながら、又或者は吃驚して「愈々行くさうだ、大變なことだねえ、遂々オプローモフが動き出したんだよ！」と言つた。

けれども、オプローモフは一月経つても、三月経つても出發しなかつた。

出發の前の晩に彼の唇が脹れたのだ。

「蠅が刺したんだ。斯んな唇をして外國へは行けない！」と、彼は言つて、その次の汽船を待つことにした。

その中にもう八月になつた。シトリーツは疾くに巴里へ行つて、頻りに根氣よくオプローモフに手紙を出した。が、返事は一本も受け取らなかつた。

何う云ふ譯だらう？インキ壺のインキが乾き、手紙を書く紙がないのだらうか？多分、オプローモフの手紙には「存じ候處」と「致すべく候」とが重複するからだらう。でなければイリヤ・イリーイチは「一

時か、或は生涯か」と云ふ叫び聲に嚇かされ、諦めて手枕をして寝てゐるのだらう——そしてザハールが彼を起すのに骨を折つてゐるのだらう。

いや、さうぢやない。彼のインキ壺にはインキが一ばいに入つてゐる。卓子の上には手紙も紙も載つてゐるばかりか、彼の手で書かれた紋章附の紙さへ載つてゐる。

彼は數行書いても、二度とは「存じ候處」を入れなかつた。彼の文章は自由に書き流されてゐた。處處には彼が（過ぎにし日）シトリーツと労働生活のことや、旅行のことなどを空想した時のやうに雄辯で意味深い文句さへあつた。

オプローモフは七時に起き、書物を読み、それを何處かへ持つて行く。彼の顔には睡氣も疲労も倦怠も現れてゐない。彼の顔には赤い血色さへ現れてゐる。眼には光がある。それは勇氣か、でなければ少なくとも一種の自信である。彼は夜衣を着てゐない。タランチェフが彼の種々な家財道具と一緒に彼の夜衣をも教母の家に運んで了つたのである。

オプローモフは書物を手にして椅子に腰掛けてゐるか、或は室内外套を着て、書き物をしたりしてゐる。頸には軽い三角の頸巻を巻いてゐる。襪衣の襟は、カラーの外に食み出して、雪のやうに光つてゐる。彼は綺麗に刺繍をした上衣を着、華美な帽子を被つて出かけて行く……彼は愉快さうに唄つてゐる……何うして斯んな事になつたのだらう？……

今、彼は自分の別荘の窓の傍に腰かけてゐた。（彼は街から數露里距てた別荘で暮してゐたのであ

る。彼の傍には花束が横たはつてゐた。彼は急いで何か書き物をしてゐたが、間斷なく灌木林の向うにある小徑を見ては、再た急しきうにペンを走らせてゐた。

と、俄かにオプロモフは小徑の上の砂を軽く踏んで来る足音を聞きつけた。彼はペンを投げ出し、花束を取り上げて窓際に駈け寄つた。

「あゝ、オリガ・セルゲーヴナさんですか？直ぐに行きます、直ぐに！」と、オプロモフは言つた。彼は帽子とステッキとを取り、木戸の外に駈け出し、一人の美しい婦人に手を貸しながら彼女と一緒に林の中に、大きな樅の木影へ姿を消した……

ザハールは何處かの隅から出て来て主人の後を見送り、室の扉を閉めて料理部屋へ行つた。

「行つたよ！」と、彼はアニシャに言つた。

「午餐を食べるんだらうかねえ？」

「そんなこと何うして分るだ？」と、ザハールは眠むさうに答へた。

ザハールは相變らず同じ様子をしてゐた。例の大きな頬髯と、剃つたことのない鬚鬚とを生やしてゐた。例の鼠色のチョッキを着てゐた。例の通り、上衣を繞るばしてゐた。が、彼はアニシャと夫婦になつてゐた。それは教母と手を切つた爲めか、それともまた人間は結婚をしなければならぬと云ふ信念を得た爲めかであらう。兎に角、彼は結婚をした。そして諺に反いて少しも變らなかつた。

オプロモフをオリガとその伯母とに紹介した者は、シトリツであつた。シトリツが始めてオ

プロモフをオリガの伯母の許へ伴れて行つた時には、生憎其處にお客が来てゐた。で、オプロモフは迷惑らしい顔附をし、例の通り氣不味さうにしてゐた。

（手袋は脱ぐ方がいゝだらう。）と、オプロモフは考へた。（それに室の中も温たかいから。俺はすつかり不作法になつて了つた！）

シトリツはオリガの傍に腰掛けた。オリガは一人茶卓から離れ、洋燈の下にある安樂椅子に脊中を凭せて腰掛けてゐた。彼女は自分の周圍に行はれてゐる事には餘り氣を附けてゐなかつた。

彼女はシトリツが來たのを非常に喜こんだ。彼女の眼は燃えるやうに輝やかなかつたが、そしてまた彼女の頬も血色の焔を見せなかつたが、彼女の顔ちうには穏やかで靜かな光が漂ひ、微笑さへ現れてゐた。

彼女はシトリツを親友と呼んでゐた。彼女はシトリツが何時も自分を笑はせて怠屈させないので彼を愛してゐたが、同時に彼の前に出ると餘りに自分の子供らしさを感じるので、幾らか彼を恐れてもゐた。

彼女は自分の智慧の中に問題や疑念などが生じても、急にそれをシトリツに訴へようとはしなかつた。シトリツは彼女よりも餘程進んだ、そしてまた彼女よりも數等高尙な思想を有つてゐたからである。で、彼女の自愛心は、何うかすると此の未熟や、二人の智慧と年齢との懸隔などの爲めに煩悶することさへあつた。

ストーリーリツも矢張り彼女を、香り高い新鮮な智慧と感情とを有つた美しい女として何の慾望もなく愛してゐた。彼の眼から見ると、彼女はたゞ大きな希望を起させる美しい赤兒に過ぎなかつた。

けれども、ストーリーリツは、他の女達と話をするよりオリガと話をするのを喜こんで、斷えず彼女と話をした。何故かと言へば、彼女は無意識ではあつたけれども、單純で自然な生活の路を歩き、幸福な天性と、健全で素直な教育とのお蔭で、思想や、感情や、意志などを現すにも、眼や、唇や、手などを一寸動かすにも自然のままを失なつてゐなかつたからである。

これは、彼女が此の路を非常な確信を以て歩き、時々自分の足音以外に、自分の信じてゐる(親友)の

更に確かな足音を聞き、其の足音を標準に自分の歩みを續けてゐたからであるかも知れない。

それは何うであらうと、兎に角、彼女のやうに單純な心や、自然で自由な眼附や、言葉や、行爲などを有つた娘は實に珍らしい。だから、彼女の眼に(今、私は唇を少し引き締めて考へ始めようとか——私はそんなに醜くはないとか、彼處を見て吃驚しようとか、軽く飛び起きて直ぐに皆なを自分の傍へ駆け寄せようとか、ピアノの傍に腰掛けて足先を少しばかり掛けよう)など云ふやうな考へを讀むことは決して出来ない……

また彼女には、洒落も、媚も、虚偽も、虚飾も、奸計もなかつた!その代り彼女の優れた點を認めてゐた者は殆んどストーリーリツ一人であつた。その代り彼女は波蘭踊が一度終る間さへ怠屈を隠さず一人で坐つてゐることが出来なかつた。その代り、非常に愛嬌のある若者でも彼女を見ると、口が重くなり、

彼女に何を何う云ふ具合に話していかと迷ふのであつた。

或人達は彼女を平凡な深みのない女だと思つてゐた。何故かと云へば、彼女の舌からは生活や愛などに就いての賢明な議論も、素速い、豫期しない大膽な返事も、音楽や文學などに就いて讀んだり、聞いたりした批評も溢れ出なかつたからである。彼女は口数が少なかつた。何か言つても、餘り偉いことは言はなかつた。——けれども彼女に愛嬌を振り撒く者は、皆な伶俐で活潑な(有勳者)達で、意氣地のない人間は反つて彼女を非常に伶俐な女だと思ひ、幾らか彼女を怖れてゐた。たゞストーリーリツだけは間斷なく彼女に話をしかけて彼女を笑はせてゐた。

彼女は音楽が好であつた。が、たゞストーリーリツか、或は寄宿舎時代の友達かに靜かに唄つて聞かせるだけであつた。が、其の歌は、ストーリーリツの言葉によると、どんな聲樂家の歌よりも優れてゐた。

ストーリーリツがオリガの傍に腰掛けると直ぐに、室の中には彼女の笑ひ聲が響き渡つた。その笑ひ聲は響があつて無邪氣で傳染力が強いので、その笑ひ聲を聞いた者は皆な、何の事だか分りもしないのに屹度自分まで笑ひ出して了ふのである。

けれどもストーリーリツは何時までも彼女を笑はせることが出来なかつた。彼女は好奇心を唆られながら三十分もストーリーリツの言ふ事を聞いてゐるうちに、更に二倍の好奇心に動かされて其の眼をオブローモフに移した。が、オブローモフは彼女の眼で見られると、地の中にも潜り込みたいやうな氣持になつた。(あの二人は俺のことを何と言つてるのだらう?)と、オブローモフは二人を横眼で見ながら怦々と考

へた。彼は最う出て行かうと思つた。が、オリガの伯母から卓子の方へ呼び寄せられ、彼女の傍に腰掛
けさせられて、對談者達の十字砲火の視線を浴せられた。

オブローモフは恐る／＼シトリツの方へ振り向いた——彼は最うみなかつた。で、オリガの方を見る
と、彼女が彼に向けてゐた例の物珍らしさうな視線にはたと出會した。

(まだ視てゐる!)と、彼はおど／＼と自分の身装を見廻しながら考へた。

彼は自分の鼻が汚れてはゐないかと思ひながら手巾で顔を拭いたり、襟飾が解けてゐないかとそれに
觸つたりした。彼が斯んなことをするやうなことは滅多にないのだが、周囲が整然としてゐる上に彼女
が矢張り見てゐるではないか!

けれども或人が茶碗と、輪菓子を入れた盆とを彼の方へ出した。彼は自分のどきまぎした心持を鎮め
て平氣にならうとし、そして此の平氣な心持で、乾菓子とビスケットと輪菓子とを一握り掴んだので、
彼の傍に腰掛けてゐたオリガは笑ひ出した。他の者達も皆な此の一掴みの菓子を面白さうに眺めてゐた。
(あゝ、彼の女が見てゐる!)と、オブローモフは考へた。(此の澤山な菓子を何うしたらいいだらう?)
彼はオリガが自分の場處を離れて、他の隅へ行つたのを盗み見ると、辛つと安心した。

が、オリガはオブローモフがその菓子を何うするかと思つて矢張り彼に鋭い眼を向けてゐた。

(急いで喰べて了はう)と、彼は考へると、急いでビスケットを口の中へ入れた。幸ひビスケットは口
の中で融けた。

後にはたつた二つの乾菓子が残つた。オブローモフは自由に溜息を吐き、思ひ切つてオリガの行つた
方を見た。

あゝ!彼女は半身像の傍に立ち、その臺に凭りかゝつて彼を見てゐる。彼女は自分の場處を離れて自
由にオブローモフを見ることの出来る處へ行つたものらしい。彼女はオブローモフが乾菓子を持ちあぐ
んでゐるのに氣が附いた。

晚餐の時に、彼女は卓子の向う端に腰掛けて饒舌つたり、食べたりしてゐた。そしてオブローモフに
は少しも氣を留めないものゝやうであつた。が、オブローモフが、何うか彼女が見てゐないで呉れると
いゝがと思つて怦々と彼女の方へ振り向くと、忽ち彼女の視線に出會した。其の視線は好奇心に満され
てはゐたが、然し何となく親しみもあつた……

オブローモフは晚餐を済すと、狼狽してオリガの伯母に歸る挨拶をし始めた。伯母は明日、午餐を食べ
に来て貰ひたいとか、シトリツも一緒に伴つて來るやうになどと言つた。イリヤ・イリイチはお辭儀
をし、眼を伏せたまま客間を通り抜けた。ピアノの後は直ぐ衝立と扉口とがあつた。彼はチラリと見
ると——ピアノ後にはオリガが腰掛けてゐて、非常に物珍らしさうな眼附をして彼を見てゐた。彼には
オリガが微笑んでゐたやうに思はれた。

(俺が昨日、片跛者に靴下を穿いてゐたことや、襯衣を歪めて着てゐたことなどをアンドレイが話した
に違ひない!)と、彼は決めた。そして斯う云ふ假定の爲めに不愉快な心持になつて家へ歸つた。が、

珠に彼を不愉快にしたのは、午餐に招待されたことであつた。彼は此の招待に對して、頭を下げたが、これは承知しましたと言ふ意味に取られるのである。

此の時からオリガの執拗い眼附はオプローモフの頭から離れなかつた。彼は仰向になり、身體全體を延ばして寝たり、一番樂で落着けるやうな身體附をしたりしたが、何うしても眠れなかつた。夜衣も彼には氣持が悪くなつた。ザハールも間が抜けてゐて癢にさはつた。埃や蜘蛛の巢さへ厭で堪らなかつた。彼は幾つかの汚ない額を外すやうに言ひ附けた。其の額は彼に或る貧弱な藝術家等の保護者を連想させたからであつた。それから自分では最う暫らく捲き上げたことのない窓掛を直し、アニシヤを呼んで窓を拭いたり、蜘蛛の巢を拂落させたりするやうに言ひ附け、やがて横向に寝て、一時間ばかりオリガのことを考へた。

最初、彼はオリガの容貌を凝つと思ひ浮べたり、彼女の肖像を記憶の中に描いたりした。

オリガは、嚴密に言ふと、美人ではなかつた。彼女の色は白くなかつた。彼女の頬や唇などにも鮮やかな血色が現れてゐなかつた。眼にも内心の火が燃え輝やいてゐなかつた。彼女には、珊瑚のやうな唇も、眞珠のやうな齒も、五歳くらゐの子供に見る繪のやうな手や葡萄の形をした指などもなかつた。

けれども若しオリガを立像にすれば、彼女は優雅と調和との立像になる。幾らか高か過ぎるくらゐの身長には大きな頭がきちんと釣り合つてゐた。大きな頭には卵形の輪郭の正しい顔が釣り合つてゐた。そして之等は皆な肩と調和し、肩は全身と調和してゐた……

誰でも、たとへて茫乎した人でも、彼女を見た者は皆な、此の嚴密な、考案されたやうな美術的作物の前に一寸立ち留つた。

鼻は心持ち脹れた優美な線を造つてゐた。多くの場合、引き締つた薄い唇は、斷えず或る思想に向つて進んでゐる徴候であつた。何かを物語つてゐる彼女の思想は、何時も生々とした鋭い、そして何物をも見遁さない、黒味と灰色とを帯びた、蒼い眼の中に輝やいてゐた。眉は彼女の眼に殊に美しさを添へてゐた。彼女の眉は、虹形にもなつてゐなければ、指で引き搦つた二筋の細い糸のやうになつて眼を取り巻いてもゐなかつた。さうだ、彼女の眉は栗色の柔毛から成る殆んど眞直な條で、それも平均して並んでゐなかつた。一方の眉は一方の眉より高かつた。だから一方の眉の上には、一つの小さい皺が寄つてゐた。そして其の皺の中には何か、何かを物語つてゐるやうでもあれば、其處に思想が潜んでゐるやうでもあつた。

オリガは幾分前に頭を屈めて歩いてゐた。その頭は細そりとした傲慢らしい頸の上に釣り合よく立派に落着いてゐた。また彼女は身體ぢうを酷く動かさず、歩いてゐるかゝ分らない程軽く歩いてゐた……

(彼の女は昨日、何うして俺をあんなに凝つと視詰めてゐたのだらう?)と、オプローモフは考へた(アンドレイは、靴下と襯衣とのことはまだ言はなかつたが、俺に對する彼の友誼や、俺達がどんな風に育ち、どんな風に教育を受けたかと云ふことなど——何でも長いことは皆な言つたと誓つてゐた。それに、

オプローモフは不幸な男とか、活動が足りない爲めに人間にとつて大切なものを皆な滅ぼしてゐるとか、人生を悲観してゐる……など、斯んなことも話したんだ。)

(「ぢや、何を微笑つたのだらう?」)と、オプローモフは考を續けた。(若し彼の女に心臓があれば、彼の女の心臓は鼓動を止めて、同情の餘り血を沸さなければならぬ筈だ。が、彼の女は……いや、何うてもいゝ! 最う考へまい! 最う今日だけしか午餐を食ひには行くまい——今後は一步も近寄りはしない。) 幾日か過ぎ去つた。彼はオリガの許へ足繁く通つた。

或る天氣の好い朝に、タランチエフは、ウイボルグスカヤ・ストロナの小路にある自分の教母の所へオプローモフの家具類を皆な運んで了つた。で、オプローモフは、三日の間、寢床にも入らず、長椅子にも寢ずに過した。彼が斯んなことをしたのは久し振りであつた。彼はオリガの伯母の許で三日の間午餐を食へた。

突然にオプローモフは伯母達の別荘の向うにある一軒の別荘が空いてゐることを聞き込んだ。で、彼は直ぐに其れを借りて其處に住むやうにした。彼は朝から晩までオリガと一緒にゐた。彼はオリガと一緒に書物を読んだり、湖水の畔や、山の中を散歩したり、オリガに花を贈つたりした……オプローモフは斯う云ふ人間になつて了つた。

世間には種々な事があるものだ! が、何うして斯んな事があるだらう? とところが、之は斯う云ふ譯である。

例の連中がシトリーツと一緒にオリガの伯母の許で午餐を食へてゐる時のことであつた。オプローモフは此の午餐の時にも、前の晩にオリガの視線を浴び、自分の上には太陽のやうにオリガの視線が懸つてゐて、彼を焼き、彼を驚ろかせ、彼の神経と血とを戦がせてゐることを知りつゝ、またそれを感じつゝ、話をした時に味つたやうな拷問を経験した。で彼は葉巻を喫ふと云ふ口實の下に瞬間だけでも此の斷間なく何事かを語つてゐる執拗い視線から遁れようと思つて露臺へ出た。

『あれは何だらう?』と、彼は四邊を見廻しながら言つた。『あれは俺を苦しめるのだ! 俺は彼の女に笑はれる爲めに伴つて來られたのだらうか? 他の者なら誰にもあんな眼附を浴せはしない。あんな笑ひを向けはしない。俺はあまり溫柔し過るから、彼の女はあんな……俺は彼の女に言つて遣らう!』と彼は決心した。『俺は彼の女の爲めに自分の心から見抜かれる事を、一層自分で白狀して了はう。』

と、突然に、オリガが彼の前にある露臺の隅の上に現はれた。彼はオリガに椅子を進めた。オリガは彼の傍に腰掛けた。

『あなた、お怠屈なの?』と、オリガはオプローモフに訊いた。

『怠屈です』と、オプローモフは答へた。『けれどもさう酷く怠屈してゐる譯でもありません……私には仕事があるのです。』

『アンドレイ・イワヌイチのお話によると、あなたは何か設計していらつしやるさうですねえ?』

『さうです、私は村へ行つて暮したいと思つてゐますから、徐々其の仕度をしてゐるのです。』

『ぢや、外國へ行つしやいますか？』

『行きます、是非行きます。アンドレイ・イワヌイチの仕度さへ出来れば。』

『悦こんで行らつしやるのですか？』

『さうです、非常に悦こんで……』

オプローモフはオリガを見た。微笑がオリガの顔を匂つてゐた。その微笑は彼女の眼を光らせたり、頬に溢れたりしてゐた。たゞ唇だけは平常の通り引き締つてゐた。オプローモフは平氣で嘘を言ふ勇氣を持つてゐなかつた。

『私は少し……情け性で……』と、彼は言つた。『ですが……』

斯う言ふと同時にオプローモフは、彼女が黙つたまゝ易々と彼に情け性の意識を呼び出した事を怨めしく思つた。(此の女と俺とは何んな関係があるのだ？俺は此の女を怖がつてゐるのだらうか？)と、オプローモフは考へた。

『情け性ですつて！』と、オリガは微かに攪るやうに反對した。『そんなことがありまして？男の方が情け性だなんて——そんなことは私に分りませんわ。』

(何してそれが分らないのだらう？)と、オプローモフは考へた。(何でもない事だと思はれるんだが。)

『私は始終、家にはかり入り込んでゐるのです。ですからアンドレイ君は私が……』

『でも、あなたは種々な物を書いていらつしやるのですわ。』と、オリガは言つた。『讀んでいらつしやる』

のですわ——あなた、お讀みなすつて？……』

オリガは例の通り、凝つと彼を見詰めた。

『いゝえ、讀みません！』と、オプローモフは吃驚して突然に口走つた。それは彼女に試みられないうちと思つたからであつた。

『何をですか？』と、オリガは笑ひながら訊いた。

彼も笑つた。

『あなたが小説を讀んだかとお尋ねなすつたのだと思つたんです。私は小説を讀みませんから。』

『さうぢやないのですよ。私、旅行記のことをお訊きしたのよ……』

オプローモフは眼敏くオリガを見た。彼女の顔は全體に微笑を湛へてゐたが唇は矢張り引締つてゐた。(あゝ！さうだ、此の女は……此の女と話するには、よほど氣を附けなければならぬ……)と、オプローモフは考へた。

『あなた、何をお讀みななの？』と、オリガは物珍らしさうに訊いた。

『私は旅行記が一番好です……』

『アフリカ旅行記を？』と、オリガは攪るやうに靜かに訊いた。

オプローモフは、自分が何を讀んでゐるかと思ふことばかりか、何んな讀み方をしてゐるかと思ふことまでオリガに悉皆知り分つてゐるのだと察して思はず顔を赤らめた。

『あなた、音楽家なんですか?』と、オリガはどきまぎしてゐるオプローモフを落着かせようとして訊いた。

此の時、シトリーツが遣つて来た。

『イリヤ君! 僕はオリガ・セルゲイウナさんに、君が非常な音楽愛好家だと言つて、何か……Casta divaでも歌つて貰ひたいと頼んだのだよ。』

『何故君は僕に就いて出鱈目なことを言ふのだ?』と、オプローモフは答へた。『僕は大した音楽好きぢやないのに……』

『何を言ふんだ?』と、シトリーツは遮つた。『オプローモフ君は恥かしがつてゐるのです! 私はオプローモフ君を禮儀正しい人物として紹介させよう。ですが、今直ぐに何か自分で歌ひますよ!』

『いや、僕は愛好家と云ふ役目を御免蒙りたい。此の役目は怪しくつて六ヶ敷い役目だからねえ!』

『何な音楽があなた、お好きな?』とオリガは訊いた。

『其のお尋ねには答へ兼ねます! まあ何な音楽でもいゝのです! 何うかすると私は嘔れ聲で唄つて歩く門附を聞いてさへ満足に思ふことがあります。また、何かの機会に聞きつけた歌なんか深く記憶に刻み込まれますが、時によると、歌劇を半分聞いて逃げ出すこともあります。気分次第でメイエルベルや、渡守の歌にさへ感動することがあるのです! 時によると、モツアルトを聞いても耳が塞がるやうな……』

『それは、あなたが本當に音楽を好いていらつしやるからですわ。』

『オリガ・セルゲイウナさん、何か歌つて下さいませんか。』と、シトリーツは願つた。

『でも、今、オプローモフさんは、耳が塞がるやうな気分ではありませんか?』と、オリガはオプローモフの方へ向きながら言つた。

『さうおつしやるのは、一種のお遠慮です。』と、オプローモフは答へた。『私は歌の批評は出来ないのです。若し出来ても、厭な氣持になりやしません……』

『何うしてですか?』

『若しあなたの歌が不味ければ』と、オプローモフは無邪氣に言つた。『その上で氣持が悪くなるだけのことです……』

『昨夜の乾葉子の時のやうにね……』と、オリガは俄かに口走つて自分ながら顔を眞赤にした。彼女は此の事を言ふまいと思つてゐたのであつた。『赦して下さいませぬ——悪いことを申しましたわ!……』と、オリガは言つた。

オプローモフは斯んな事を言はれやうとは豫期してゐたかつたので、落膽りした。

『あまり酷い素破抜方だ!』と、彼は低い聲で言つた。

『いゝえ、一寸した復讐なのよ! 本當に悪い氣で言つたんぢやないのよ。あなたも私に對して遠慮なさらぬから……』

『でも、私は聞いた上でなけりや分らないんです。』

『ぢや、あなた、私の歌をお聞きになりたいの？』と、オリガは訊いた。

『いえ、聞きたいのはあの男です。』と、オプローモフはシトリーツを指差しながら答へた。

『ぢや、あなたは？』

オプローモフは頭を振つた。

『私は自分の知らないものを望む譯に行きませんから。』

『イリヤ君、君は馬鹿だねえ！』と、シトリーツは言つた。『あゝして家に轉々して靴下を穿くことは何を……』

『アンドレイ君、さうぢやない。』と、オプローモフはシトリーツに言はせないやうに元氣よく遮つた。

『あゝ！私は非常に喜ばしい、幸福です。あなたは實に見事にお歌ひになります……』と言ふ資格を私は有つてゐないので。』と、オプローモフはオリガの方に向いて續けた。『私は十分に満足しました。なんかつてね……。そんな事を言つて何になりますか？』

『ですが、あなたは、私の歌をお望みになることも出来すわ……。少なくとも物好にでも。』

『そんなことは出来ません。』と、オプローモフは答へた。『あなたは女優ぢやないのですから……』

『ぢや、私、あなたに歌つてお聞かせしますわ。』と、オリガはシトリーツに言つた。

『イリヤ君、君は遠慮してゐたまへ。』

そのうちに夕方になつた。洋燈が輝やき出した。洋燈の光は月のやうにプリューシチ(木の名)の編ん

だやうな枝を透してゐた。黄昏はオリガの顔や姿などを隠し、紗の覆物のやうに彼女に被さつた。顔は夕闇の中に隠れ、たゞ、柔らかいが、力のある聲と、感情の神経的微動とだけが聞えてゐた。

オリガはシトリーツの註文によつて、種々な歌曲と俗曲とを唄つた。或る歌には、苦痛と茫乎した幸福の豫感が現されてゐた。又、或る歌には歡喜が現れてゐた。が、其の聲色には最う悲哀の芳芽が漂つてゐた。

言葉と、音律と、純な力強い處女の音色との爲めにオプローモフの心臓は波立つた。神経は悸えた。眼は歪んで涙を湛へた。と、同時に死にたくなつた。音律から醒めなくなかつた。と、直ぐに心は再た生活に渴望し出した……。

オプローモフは昂奮して、力を失なつた。辛つと涙を止めた。が、猶ほ一層苦心して彼の精神から迸り出やうとする歡喜の叫びを制へた。彼は久しく斯んな活氣と、斯んな力とを感じたことがなかつた。その力は精神の底から湧き出て活動を始めようとするらしく思はれた。

若しオプローモフに旅立ちの仕度さへ出来て居れば、此の時、直ぐに彼は外國へ出かけたに違ひない。最後に、オリガは *Casta Diva* を歌つた。驚愕と、電光のやうに頭の中に閃めく考へと、身體ぢやうを走せ廻る針のやうな戦慄と——斯う云ふものがオプローモフを萎縮させた。彼は全く力を失なつて了つた。『もうこれでよくつて？』と、オリガは歌を止めて突然にシトリーツに訊いた。

『オプローモフ君が何と言ふか訊いて御覽なさい。』と、シトリーツは言つた。

『あゝ！』と、オプローモフは思はず聲を出した。

彼は突然にオリガの手を握り、直ぐにそれを放して酷くどぎまぎした。

『赦して下さい……』と、オプローモフは呟やいた。

『何うです、赦しますか？』と、シトリーツはオリガに言った。『イリヤ君、正直に言ひ給へ、以前君はそんな感じを味はつたことがあるかね？』

『そんな感じなら、若し今朝、窓際を暖れ聲の門附が通りさへすれば、其時に最う経験なさることですわ……』と、オリガは愛嬌よく、そして諷刺から針を抜いたやうに柔らかに言葉を挿んだ。

シトリーツは詰責るやうにオリガをチラツと見た。

『オプローモフ君は決して窓を開けたことがないのです。だから、戸外で何をやつてるか聞えやしませんよ。』と、シトリーツは附け加へた。

オプローモフも詰責るやうにシトリーツを見た。

シトリーツはオリガの手を握つた。

『オリガ・セルゲーヴナさん、今日、あなたは何時にもない歌ひ方を、少なくとも私が以前聞いたことのないやうな歌ひ方をなさつたが、その理由が私には分りませんねえ。さア、之が私の遠慮です！』と、彼はオリガの指を一本宛接吻しながら言った。

シトリーツは歸つた。其時、オプローモフも歸らうとしたが、シトリーツとオリガとが彼を止めた。

『僕には仕事があるんだ。』と、シトリーツは言った。『が、君は寢に歸るんだらう……まだ早いよ……』

『アンドレイ君！ アンドレイ君！』と、オプローモフは哀願するやうな聲で言った。『いや、僕は今日、残つちやゐられない。僕も歸る！』と、彼は附け加へて、矢張り歸つた。

彼は夜通し眠らなかつた。彼は悲愁と物思ひとに沈みながら室の中を彼方此方と歩き廻り、黎明になると、家を出てネワ河の畔や街道などを歩いた。が、彼が何を感じ、何を考へてゐたか誰にも分らない。

其後三日経つと、彼は再た夕方オリガの許へ行つた。丁度、他のお客達は骨牌を取つてゐたので、オプローモフはオリガと二人でピアノの傍に居た。叔母は頭痛がすると言つて、書齋の中で痲睡劑を嗅いでゐた。

『アンドレイ・イワヌイチがオデツサのお土産に下すつた繪畫帖をお目にかけてませうか？』と、オリガは訊いた。『彼の方がお目にかけてなかつたでせうか？』

『あなたは御主人の義務で私を取り做さうとなさるのですね？』と、オプローモフは訊いた。『それには及びませんよ！』

『何故それに及ばないのでですか？ 私、あなたが怠屈なさらないで、お家にいらつしやるやうなおつもりで、樂々と自由に心持よくなすつて、お歸りなさらないやうにしたいのですわ……横にでもおなじなさるやうに……』

（此の女は喰へない惡戯女だわい！）と、オプローモフは思ひながらも、自分の意志に逆らつて、オリ

ガの一舉一動に見惚れてゐた。

『あなたは、私が樂々と自由にして、怠屈しないやうになさうと言ふのですか?』と、オブローモフは訊いた。

『さうよ。』と、オリガは前の日のやうに、いや、もつと好奇心と親しみを現してオブローモフを見ながら答へた。

『そんなら、第一、今のやうに、それから、近頃のやうに私を見ないで下さい……』

オリガの眼に現れてゐた好奇心は二倍した。

『それ、さう云ふ見方をされると、私は益々居りにくくなります……私の帽子は何處にあります?』

『何うして居にくいのです?』と、オリガは優しく訊いた。と、彼女の眼附は好奇心の表現を失なつて、たゞ親しみと愛嬌とを現した。

『何う云ふ譯だか分りません。が、たゞあなたにあんな眼附で見られると、何んだか他の人に知られたくない、殊にあなたに知られたくない事を悉皆見抜かれるやうな氣持がするので……』

『何うしてなんでせう? あなたはアンドレイ・イワヌイチのお友達でせう。彼の方は私のお友達よ。ですから……』

『ですから、私のことに就いてアンドレイ・イワヌイチが知つてゐるだけ、あなたもお知りにならなければならぬと云ふ理由はないでせう。』と、オブローモフは言つた。

『さう云ふ理由はありませんが、知ることは出来ますわ……』

『私の友達のお饒舌のお蔭で——あれがあつたの男の悪い點ですよ!……』

『ぢや、あなたには秘密がありました?』と、オリガは訊いた。『それは犯罪ぢやなくつて?』と、彼女はオブローモフの傍を衝と離れて、笑ひながら附け加へた。

『或はさうかも知れませんが、オブローモフは溜息を吐いて答へた。

『さうよ、それは大した犯罪よ。』と、オリガは忪々と靜かに言つた。『別々な靴下を穿くと云ふことは……』

オブローモフは帽子を取り上げた。

『もう落膽りました!』と、オブローモフは言つた。『あなたは私が樂々と居れるやうになさるので、私はアンドレイが厭になりました……彼の男はそんなことまであなたに言つたんですか?』

『あの方は今日其の話をなすつて、散々私を笑はせたのよ。』と、オリガは附け加へた。『あの方は何時でも笑はせるのですもの。赦して下さいませぬ、もうそんなことは言ひませんから、もう言ひませんからね。そしてあなたをあんな眼附で見ないやうにしますからね……』

オリガは搜るやうな、そのくせ眞面目な顔附をした。

『第一に、』と、オリガは續けた。『私、今迄のやうな見方をしませんわ。さうすればあなたは自由に悠たりとなさるでせう。第二に、あなたが怠屈なさらないやうにするには何うすればよいかと云ふことを考へますわ。』

オプローモフはオリガの灰色が、つた青い眼を真正面に見た。

『そら、今、あなたこそ私を妙な眼附で御覽なすつたわ……』

實際、オプローモフはオリガを眼で見たのではなかつた。寧ろ思想と、凡ての自分の意志とて、磁石に引き着けられたやうに、知らず識らずの中に、見まいとする抑制力を失なつてオリガを見たのである。(あゝ、何と云ふ美しい女だらう！世の中に斯んな美しい女があるものかしら！)と、オプローモフは吃驚したやうな眼附でオリガを見ながら考へた。(あの白い色、あの眼、あの眼は深淵の中のやうに暗い。が、其の奥には何か輝やいてゐる。屹度靈だらう！微笑などは書物のやうに讀める。微笑ふとあの齒が見える。それにあの頭……あの頭が肩の上に落着いてゐる姿の優しいこと。宛然小花が揺れてゐるやうだ。そしていゝ匂がしてゐる……)

(それにしても、俺はあの女から何を得てゐるだらう)と、オプローモフは考へた。(彼の女から何か俺の中に移つて来るものがある。俺の心臓は沸き返へるやうに鼓動し出した……心臓の中に俺は今迄感じたことのないものを感じるやうになつた……あゝ、あの女を見てゐるのは、何と云ふ幸福なことだらう！呼吸さへ詰るやうになる。)

オプローモフの頭の中には、斯う云ふ考へが旋風のやうに廻轉した。彼は矢張りオリガを見てゐた。丁度、歡樂の中に恍惚として無限の彼方と、無限に深い深淵とを見るやうに見てゐた。

『オプローモフさん、もう澤山よ。今度はあなたが私を見ていらつしやるのよ！』と、オリガは恥かし

さうに頭を側へ向けて言つた。が、好奇心には抵抗出來ないので、彼女もオプローモフの顔から眼を放さなかつた。

オプローモフにはオリガの言つたことは少しも聞えなかつた。

實際、彼はオリガの言つたことには氣が附かずに、矢張り彼女を見詰めてゐた。そして黙つたまゝ、自分の中に何事が起つて來たかを考へてゐた。彼は自分の頭を叩いた。——頭の中にも矢張り何かと波打ちながら非常な速度で流れてゐたのである。彼は自分の考へを捉へることが出來なかつた。考へは、丁度小鳥の群のやうにバタ／＼と飛び廻つてゐた。そして心臓の左壁が痛いやうな氣持がした。

『そんな妙な眼附で私を見ないで頂戴。』と、オリガは言つた。私だつて居にくゝなりますわ……あなたも、私の精神から何か見抜かうとなさるのですわ……』

『私はあなたの何を見抜けるでせう？』と、オプローモフは機械的に訊いた。

『私にも矢張り、始めたばかりでまだ終らない「計畫」があるのですもの。』と、オリガは答へた。

オプローモフはまだ終らない自分の計畫に對する此の暗示を聞いてハツと我に歸つた。

『不思議ですねえ！』と、オプローモフは言つた。『あなたは悪い女ですが、あなたの眼は良い眼です。女を信じちやならないと昔から言ひますが、實際ですねえ。女は奸計んで嘘を言ひます。奸計まなけりや、眼附と、微笑と、赤味と、それから卒倒とで嘘を言ひます……』

オリガは印象を強めやうともせず、オプローモフの傍にある帽子を靜かに取つて椅子に腰掛けた。

『もう言ひませんわ、言ひませんわ。』と、オリガは元氣よく繰返した。『あゝ！失禮なことを申しましたわねえ。赦して下さいまし！ですが、あれは決して嘲笑つたんぢやなくつてよ！』と、オリガは宛然歌を唄ふやうな聲で言つた。そして唄ふやうな此の文句の中には感情が慄へてゐた。

オプローモフは安心した。

『あのアンドレイの奴……』と、オプローモフは詰責るやうに言つた。

『では、次に御尋ねしますがねえ、何うすればあなたは怠屈なさらないのでですか？』と、オリガは訊いた。

『歌つて下さい！』と、オプローモフは言つた。

『それよ、私、さう云ふ御遠慮を待つてゐたのよ！』と、オリガは昂奮して嬉しさうに遮つた。『若しあなたが、』と、彼女はやがて元氣よく續けた。『私の歌を聞いて三日の間に（あゝ）とおつしやらなければ、私は屹度、夜も眠れないで泣きますわ……』

『何うしてです？』と、オプローモフは吃驚して訊いた。

オリガは暫く考へてゐた。

『自分にも分りませんがねえ。』と、やがて彼女は言つた。

『あなたは自尊心が強いからですよ。』

『さうよ。無論その爲めよ。』と、オリガは考へ込んだまゝ、片手でピアノの樂鍵を敲きながら言つた。

『けれど、自尊心は誰にでも澤山にあるものですわ。アンドレイ・イワヌイチは、自尊心は意志を支配

する唯一の原動力だと言つていゝとおつしやつたくらゐですもの。あなたには其の自尊心が屹度、無いのよ。だからあなたは何時も……』

オリガは言つて了はなかつた。

『何ですか？』と、オプローモフは訊いた。

『いゝえ、ただそれだけよ。』と、オリガは口訥つた。『私がアンドレイ・イワヌイチを愛してるのは、』と、彼女は續けた。『あの方が私を笑はせたり、時によるとお話を私を泣かせたりなさる爲めでもなければ、また、あの方が私を愛して下さる爲めでもなくつて、それは……あの方が他の方より餘計に私を愛して下さる爲めだと思ふのよ。何うです、大變な自尊心でせう！』

『あなたはアンドレイ君を愛していらつしやるのですか？』と、オプローモフはオリガに訊いて、緊張した探るやうな視線を彼女の眼に注いだ。

『無論ですわ。あの方が私を一番愛して下さるものですから、私もそれだけ深くあの方を愛してゐますわ。』と、オリガは眞面目に答へた。

オプローモフは黙つて彼女を見た。彼女は平凡な溫柔しい眼附でオプローモフに答へた。

『あの方はアンナ・ワシリエウナや、ジナイダ・ミハイロウナなども愛していらつしやるけれど、私ほどではないのよ。』と、オリガは續けた。『アンドレイさんはあの女達となら二時間も一緒に話してゐられないのよ。あの女達を笑はせるやうなことはないわ。心の底から何事もお話なさらないのよ。たゞ、

事業のことや、劇場のことや、新しい出来事などの話をなさっただけなの、ところが、私には妹に話を
するやうに話をして下さるんですもの……いゝえ、娘に話をするやうによ。」と、オリガは急いで附け足し
た。「何うかして、私が何か一寸分らなかつたり、おつしやる事に従はなかつたり、あの方の意見に同意
をしなかつたりする時など、叱り附けたりなさるのよ。けれど、あの女達を叱つたりなんかなさらない
のですもの。で、私もあの方を一番愛するのだらうと思ふのよ。自尊心が強いでせう！」と、オリガは
沈んで附け足した。「けれど、此の自尊心は、何うして私の歌の中へ入つたのでせうねえ？ 以前、私の歌
は皆さんに随分評判されたのよ。それにあなたは私の歌を聞くのさへ厭がついていらつしやるのですもの。
殆んど無理にお聞かせしたやうなものですわ。で、若しあなたが私の歌をお聞きなすつた後で、私に何
ともおつしやらずにお歸りになれば——若し私があなたのお顔に何にも認めることが出来なければ……
私は屹度泣き出すに違ひありませんわ……之が自尊心なのですわねえ！」と、オリガは思ひ切つて言つた。
『だが、あなたは私の顔に何かお認めなすつたんですか？』と、オプローモフは訊いた。
『涙を認めましたわ。隠さうとなすつても駄目です。それは男の方の缺點です——自分の感情を恥るな
んて。それも矢張り自尊心よ。而も虚偽な自尊心よ。それより一層のこと、男の方は時には御自分達の
智慧をお恥ぢなすつた方がいゝわ。その智慧は大概間違つたことを教へますからねえ。アンドレイ・イ
ワメイチも矢張り感情を恥ぢていらつしやるのよ。で、私、此の話をしたら、私の意見に同意して下さ
いましたわ。ですが、あなたは？』

『あなた方が同意していらつしやるのですもの、何うして同意しないでゐられませう！』と、オプロー
モフは言つた。

『また遠慮なさるのよ！本當に……』

オリガは言葉に窮した。

『卑劣な男です！』と、オプローモフはオリガから眼を放さずに言ひ足した。

オリガは莞爾としてオプローモフの言葉に同意した。

『私があなたに歌を御願ひしたくなかつたのは、自分の卑劣が露顯するのを恐れたからなんです……始
めて聞いたのに、何と言へるでせう？けれども言はない譯にゆきませんからねえ。同時に怜悧にもなり、
誠實にもなるのは六ヶ敷いことです。殊に感情の昂奮してゐる時に、あんな印象を受まけ時に、あんな
場合にです……』

『私も實は、あれほど熱心に歌つたことは珍らしいのよ。あんなに歌つたことはなかつたかも知れませ
んわ……最う歌はせないで下さいましね。私、もう歌ひませんから……いゝえ、も一度だけ歌ひますわ
……』と、オリガは言つた。と、其の瞬間に、彼女の顔は昂奮し、その眼は燃え出したやうであつた。
彼女は椅子に腰を降し、二三度大聲に調子を取つて歌ひ出した。

あゝ、此の歌の中に何か響いてゐたらう！希望と、雷雨に對する漠然した恐怖と、雷雨そのものと、
燃えるやうな幸福と——斯う云ふものは皆な歌の中ではなく、彼女の聲の中に響いてゐた。

オリガは長い間歌つた。そして時々オプローモフを眺めながら子供のやうに訊いた。

『もう澤山なの？でなけりや、まだ斯んなのがありますわ。』彼女は再た歌つた。

オリガの頬や耳などは、昂奮した爲めに眞赤になつてゐた、何うかすると、彼女の晴々とした顔には俄かに感情の火花が電光のやうに閃めいたり、心の中で遠い未來の生活を経験したやうな成熟した情熱の光が燃え上つたりすることもあつた。が、此の瞬間的な光は再た直ぐに消えて、再た銀のやうに爽やかな聲が鳴り響くのであつた。

オプローモフの生活も矢張り高調してゐた。彼は自分が生活してゐることを感ずると同時に、自分が斯んな状態を——一時間でもなく、二時間でもなく、もう何年となく味はつてゐるのだとさへ思つた。

彼等二人の外面は静かだが、その内部には確かに火が燃えてゐて、二人共同じ戦慄に顫へてゐるに相違なかつた。彼等の眼には、同じ心持で呼び出された涙が溢れてゐた。さう云ふものは皆な情熱の徴候であつた。其の情熱は何時か露はにオリガの若々しい心の中に燃え出すに相違ないが、其の心は今まだ、僅かに一時飛び翔ける暗示や、眠つた生活力の覺醒などに服従してゐるのである。

オリガは響きのいゝ長い餘韻を残して歌を終ると、その聲は其の餘韻の中に消えて了つた。オリガは突然に歌を止めて兩手を膝に載せると、非常な感激と昂奮とを感じながら、オプローモフが何うしてゐるかと思つた。

彼の顔には、精神の底から呼び醒されたやうな幸福の曙光が輝いてゐた。涙に満たされた彼の眼は、

オリガへ注がれてゐた。

此の刹那に、オリガは、オプローモフのやうに、知らず識らず彼の手を握つた。

『あなた、何うなすつて？』と、オリガは訊いた。『あなたのお顔を御覽なさい！何うなすつたの？』

けれどもオリガにはオプローモフが何うしてそんな顔をしてゐるのか分つてゐたので、彼女は自分の力の此の現れに感心しながら、竊かに得意になつた。

『鏡を見て御覽なさい。』と、オリガは鏡に映つてゐるオプローモフの顔を指差しながら莞爾々々として續けた。『眼は光つてゐるし、それにねえ、眼には涙が溜つてゐますわ！あなた本當に音楽には深く感動なさるのねえ！……』

『いや、私は……音楽に感じたものではありません……が……愛です！』と、オプローモフは靜かに言つた。

と、オリガは直ぐにオプローモフの手を放して顔色を變へた。オリガの眼は、彼女に向けられてゐたオプローモフの眼とびつたり出會した。オプローモフの眼は凝つと動かずに、殆んど無智を現はしてゐた。斯う云ふ眼附をして見てゐた者はオプローモフではなくして情熱であつた。

オリガはオプローモフがついあんなことを口走つたのであることも、彼が自分を制へる力を失なつてゐることも、彼の言つた言葉が眞實であることも知つてゐた。

オプローモフは偶と我に歸ると、帽子を取つて周圍を見廻しもせずに室の中から駈け出した。オリガは最う物珍らしさうな眼で彼を見送らなかつた。彼女は長い間、身動もせず、立像のやうにピアノの傍

に立つたまま、執拗く脚下を眺めてゐた。彼女は辛つと呼吸を吐いてゐた……

六

オプローモフが、頹然とした様子で頹然と横はつてゐる時や、鈍よりと微睡んでゐる時や、感激の花を感じてゐる時などに、先づ第一に彼の空想の中に計畫されるものは、妻としての女、若くは時によると、戀人としての女であつた。

オプローモフが空想をしてゐる時に、彼の前に現れる者は、春の高い、様子のいゝ女の姿であつた。其の女は、胸の上に悠たりと兩手を組み合はせ、静かではあるが、誇りやかな眼附をして、繁つたブリューシチ(木の名)の間に姿態なく坐つてゐることもあれば、また頭を肩の上に愛らしく載せ、何かを思ひ耽つてゐるやうな顔附をして、腰を揺ら／＼と振りながら絨氈の上か、或は並木路の砂の上を身輕に歩いてゐることもある——これがオプローモフの理想であり、歡樂と、嚴肅な平和とに満たされた全生涯の化身であり、また平和そのものであつた。

オプローモフは最初に、此の女が長いヴェールを被り、全身花に包まれて教座の傍に立つてゐるのを夢み、次には、妻として羞かしさうに眼を伏せながら寢床の枕頭に立つてゐるのを夢み、最後に、母として大勢の子供の中に居るのを夢みるのであつた。

オプローモフは、此の女の唇に現れる無邪氣な微笑や、希望に潤まない眼などを夢みた。が、其の微

笑は、夫としての彼に對して同情を表し、凡ての他人に對して親切を現してゐた。其の眼附は、彼だけには従順で、羞かしさうな色を見せてゐるが、他人に對しては嚴然としてゐた。

オプローモフは此の女から燃えるやうな空想を聞いたり、此の女の中に昂奮や、思ひもよらぬ涙や、疲労や、病氣など、それからまた、狂氣じみた突然の喜びなどを見たりするのを望んだことがなかつた。彼は月も悲哀も要らないから、たゞ此の女が突然に眞者になつたり、卒倒したり、昂奮状態に陥つたりしないで呉れ、ばいと思つてゐた。

『斯うした女の中に戀人があるものだ。』と、オプローモフは言つた。『それに心配が絶えない。やれ醫者だとか、やれ、水だとかつて、宛然種々な病癖の間屋だ。夜も碌に眠れやしない!』

けれども、羞恥を含んだ誇りやかな落着きのある妻の傍には、一人の男が暢氣に眠つてゐる。此の男は、目を醒すと、例の優しい同情の籠つた眼附で見られるのだと確信して眠つてゐる。此の男の温かい眠は二十年、若しくは三十年ぶりに、彼女の眼の中に、靜かに瞬いてゐるあの優しい同情の光を見出したものらしい。彼は斯うした光を棺に入るまで受けるのである!

(さうだ、凡ての男と凡ての女との秘密な目的は——これではなからうか?——つまり、自分の友の中に、變ることのない平和の相と、永久に平らかな感情の流とを見出すことではなからうか?これが愛の常規で、此の常規から少しでも離れやうものなら、直ぐに裏切つたり、冷淡になつたりするのではあるまいか?自分の理想を一般的な理想にすること、此處に我々の苦悶があるのではあるまいか?)と、其の男

は考へた。(之が創造と、兩性の相互關係に對する説明との桂冠ではあるまいか?)

全世界の幸福の爲めに、情慾に正當な出口を與へ、それを河のやうに順序よく流すこと——これは全人類の問題であり、進歩の絶頂である。凡てのジョールヂ・ザンド達は皆な此の絶頂に登らうとして路を踏み迷つたのだ。此の問題が解決された曉には、最う裏切りも冷淡もなくなつて、たゞ平和で幸福な心臓が永久に平らかに波打つだけで、永久に充實した生活と、生活を永久に養ふ液汁と、永久に健全な道徳とは此處から流れ出るのである。

斯うした幸福の實例はあるにはあるが、多くはない。人々は斯うした實例を指して幻影だと言つてゐる。人々は斯うした幸福の爲めに生れなければならぬと言つてゐる。けれども意識して斯んな幸福に養はれ、斯んな幸福に進んで行けはならぬか?これが問題である。

情慾! 成程、之を詩の中で見ると立派なものである。俳優が袖のない上衣を着け、小刀ナイフを持つて騒さわ廻り、やがて、殺された者も殺した者も一緒に晩飯を食ふやうな舞臺で之を見ると立派なものである。

情慾が斯う云ふ具合に終つて呉れると結構だが、情慾の後には兎角、煙と臭氣とが残つて、幸福は残らない、追憶になるものは、たゞ慙愧ざんきと、斷られた頭髮とだけである。

最後に、若し情慾が斯うした不幸を齎すものならば——情慾のままに行動することは、通行の出來ない崩れた山路を無理に通らうとするのと同じことである。其の路を馬に乗つて通れば、馬は谷底に落ち、騎者は負傷をする。その村は最う目の前にある。他處よそを見てはならない。危険な場所は速くはや通り過ぎる

がいゝ……

だから、情慾は抑制し、壓迫し、結婚によつて消滅させる必要がある……

若し彼女が突然に燃えるやうな眼附で彼を見るか、或は泣きながら眼を瞑つたまゝ彼の肩に突伏し、やがて眼を開けて彼の頸を呼吸の詰る程に敲くかすれば、彼は吃驚して女の傍から逃げ出すに違ひない……これは烟火である、火藥樽の爆發である。だから其の結果、鼓膜が破れ、眼が潰れ、頭髮が焼ける!けれども、オリガは何んな女であるか調べて見よう!

オプローモフが自分の心中を打ち開けた後、長いこと二人は會はなかつた。オプローモフは生徒のやうに隠れてゐて、たゞオリガを遠くから見ただけであつた。オリガもオプローモフに對して態度を變へた。が、彼を避けたり、冷淡になつたりするのではなくして、益々物思ひに沈むやうになつたのである。オリガはオプローモフに好奇の眼を放つて彼を困らせたり、彼の寝てゐることや、惰け性や、不活潑などを揶揄からかひ半分に笑つたりするのを妨げるものが自分の中に出來たことを悲しく思つたやうであつた。オリガには可笑さが込み上げて來た。それは、子供の滑稽な様子を見ると笑はずにはゐられない母親の可笑さであつた。シトリーツは外國へ出發した。オリガは歌を聞かせる相手がないので怠屈になつた。彼女のピアノは蓋をされてゐた——一言で言へば、彼等二人には吸引力と枷とが横たはつたのである。で、二人共、落着いてゐられなかつた。

それにしても何と云ふ面白い徑路だらう!彼等の親交は實に單純であつた!彼等の交際は實に自由で

あつた！オプローモフはシトリーツより平凡な男であり、シトリーツのやうにオリガを笑はせもしないけれども、或はまた自分で笑ひもしないけれども、シトリーツより善良な性質を持つてゐた。で、彼はオリガの嘲笑を易々と赦して遣つた。

シトリーツは外國に出かける時、オリガにオプローモフを頼んで、彼を監督し、彼が家に坐つてゐるのを妨げるやうにと願つた。オリガの伶俐な優しい頭には最う食後にオプローモフを寝せないやうにする、いや、寝せないばかりではなく、晝間、長椅子の上に横たはることさへ許さないやうにする精密な計畫が組み立てられた。それはオプローモフに話をしかけることであつた。

オリガは、シトリーツが置いて行つた（書物をオプローモフに讀ませたり）、それから毎日新聞を讀ませたり、新しい出来事の話を書かせたり、村に手紙を書かせたり領地整理の計畫を書き終らせたり、外國へ行く仕度をさせたりしようと空想してゐた——一言で言へば、オプローモフが自分の傍で居睡らないうやうにしようと空想してゐた。彼女はオプローモフに目的を示し、彼が幻滅を感じてゐる凡ての物を再た愛させて、シトリーツが歸つて来るまでに全然別な人間にして置かうと空想してゐた。

しかも、今迄誰にも自分の意見を發表したこともなければ、まだ生活らしい生活もしたことのない臆病で無口なオリガは、此の奇蹟のやうな事を實行してゐた！オリガは——あのやうな轉機の原因者であつたのだ！

既に轉機は始まつてゐた。オリガが歌を唄つた瞬間から、オプローモフは以前の彼ではなかつた……

オプローモフは生活し、活動し、生活とオリガとを祝福するであらう。人間を甦へらせたならば——醫者が若し望みのない病人を助けたならば、其の醫者は何と云ふ名譽なことであらう！が、精神的に亡びてゐる智慧と心とを助けることは……

オリガは嬉しい誇りの爲めに身慄ひさへ感じた。彼女はオプローモフを指導する事を、天から命じられた日課であると思つてゐた。そしてオプローモフを内心自分の書記兼圖書係だと思つてゐた。

ところが、突然にさう云ふことは皆な終りを告げなければならなかつた！オリガはオプローモフに對して何う云ふ態度を取つて良いか分らなかつた。で、オプローモフに會ふと黙つてゐた。

オプローモフはオリガを驚ろかしたり、辱かしたりしたことを悔いて、たゞ電光のやうな視線と、冷淡な嚴命とを待つてゐた。が、そのくせ、オリガを遠くからでも見やうものなら身慄して側の方に逃げた了ふのであつた。

其のうちに、オプローモフは最う別莊の方に移つた。彼は三日の間、一人で山路を歩いたり、沼の向うの林へ行つたり、村へ行つたり、百姓家の門の傍に腰掛けて、子供達や山羊の仔などが駈け廻るのや、家鴨が池で身體を洗つてゐるのを面白さうに見たりしてゐた。

別莊の傍には湖水もあれば、大きな公園もあつた。が、オプローモフはたゞオリガに會ふのが怖いばかりに其處へは行かなかつた。

（俺を引き摺り出して叩きつけたのだ！）と、オプローモフは考へた。が、實際に自分が眞理に衝突つ

たのだらうかとか、たゞ神経に音楽の一時的影響を受けたに過ぎないのだらうかなど、自問したときさへなかつた。

氣不味さや、羞かしさや、或はオプローモフが始終爲てかす彼の所謂(恥辱)などが、オプローモフに、此の情熱の發作が何んであるかを解剖せなかつたのである、つまり、彼に取つてオリガは何者であるかと云ふことを批判させなかつたのである。彼は最う、餘計なものが、即ち以前になかつた或る土塊が自分の心に粘着してゐることを解剖しなかつた。彼の凡ての感じは、一つの塊、即ち恥辱と云ふものに塊まつてゐたのである。

オプローモフの想像の中にオリガがキラリとでも現はれると、同時に其處に化身した平和と、生活の幸福との理想も現はれるのであつた。其の理想はオリガの姿と同じで、此の二つの姿はお互に寄り添うて、遂に一つの姿に融け合つて了ふのであつた。

『あゝ、俺は飛んだ事を爲てかしたものだ!』と、オプローモフは言つた。『何も彼も滅茶々々にしてしまつた! 幸ひ、シトリツが外國へ行つてゐるので良かつた。オリガが彼に言ふ心配はない、が、若し言ひでもしようものなら、地の中に潜り込まなければならぬ! 愛、涙——斯んなものは俺の顔に似附くだらうか? オリガの叔母も俺を呼びによこさなくなつた。多分、オリガが言つたんだらう……あゝ! ……』

オプローモフは公園の中や、其の側の並木路を先へ先へと歩きながら斯う考へた。

オリガはたゞ、オプローモフと何んな態で會つたら良いだらうとか、此の事件は何うなるだらう、何事も無かつたやうに黙つてゐた方が良いだらうか、それともオプローモフに何か言はなければならぬいだらうかなどと心配してゐた。

言ふとすれば、何う言つたものだらう? 冷淡な様子をして、傲然とオプローモフを見たものか、それとも一層のこと少しも見ないで、傲慢に素氣なく(私はあなたがあんな事をなさらうとは思ひませんでした。あなたは私を何だと思つていらつしやるのですか? 何うしてあんな無禮な事をなすつたのですか? ……)と言つたものだらうか。ソーニチカは波蘭踊を踊つてゐる時、一人の軍樂手に斯う答へた。が、其實彼女は有ゆる方法を講じて樂手を惹き附けようと焦つてゐたのだ。

(だが、何うしてあれが無禮なのだらう?)と、オリガは自問した。(でも、あの方が本當に感じたのなら、何うして言はずにゐられやう? ……けれど、あんまり突然だわ、まだ辛つと近づきになつたばかりなのに……他の人なら誰でも、二度や三度女を見たゞけであんな事を言やしないし、また、誰だつてあんなに速く愛を感じやしないわ。あんな事はたゞオプローモフさんだけに出来る事なのだわ……)

けれどもオリガは、愛が何うかすると不意に起るものだと云ふことを聞いたり、讀んだりしたことを想ひ出した。

(それに、あの方には情熱と衝動とがあつたわ。今、恥ぢてゐるからあの方の眼にそんなものが見えないのだわ。だからあれは無禮ぢやない。ぢや、誰の罪かしら?)と、オリガは更に考へた。(無論、アン

ドレイ・イワメイチよ。あの方が私に歌を唄はせたんだもの。

けれども、オブローモフは最初、聞くことを望まなかつたのだ——オリガは悲しんだが……努力した……彼女は顔を真赤にした——そして有りつた力の力でオブローモフを感動させようとしたのである。

シトリツはオブローモフを無感覚な男だとか、何物もオブローモフを捉へることは出来ないとか、何でも皆な彼の中にあるものは消えてしまふなどと言つた……で、オリガは何でも皆な消えて了ふか何うかを見ようと思つて熱心に歌つたのである……それまでにない程、熱心に唄つたのである……

（あゝ！さうよ、私が悪かつたのよ。私、あの方に謝罪するわ……だが、何を謝罪らう？）彼女はやがて斯う自問した。（何と言つたら良いかしら。オブローモフさん、私が悪う御座いました。私があなたを誘つたのです……何だか恥かしいわ！そんな事はありやしないわ！）と、オリガは昂奮して片足をトク／＼踏み鳴らしながら言つた。（誰だつて斯んな考を起しやしないわ！……私は何んな結果になるかと云ふことを知つてゐたのでもあるまいし。けれど、若し斯んな事が無かつたら、若しもあの方があんな事を口走らなかつたら……其の時は何うなつたらう？）と、彼女は自問した。（分らないわ……）と考へた。

其の日からオリガの心臓は何う云ふ譯か異様に波立つて來た……何となく恥かしさに堪へられなかつた……それに熱が出て、兩頬には蔷薇色の二つの斑点が現れた。

『昂奮です……一寸した發熱です。』と、醫者は言つた。

（オブローモフさんはひどい事をなすつたのよ！あゝ、あの方に、今後斯んな事をなさらないやうに教へ

て上げなけりやならない！ 伯母には、あの方を家から斷わらないやうに願つて置かう。私、あの方を忘れることは出来ないわ……本當にあの方は大膽だわ！）と、オリガは公園を歩きながら考へた。と、俄かに彼女の眼は燃え出した……

急に誰か來たのだ。オリガは足音を聞いてゐた。

（誰か來たな……）と、オブローモフも考へた。

彼等はピツタリ出會した。

『オリガ・セルゲーウナさんですか！』と、オブローモフは白楊の葉のやうに慄へながら言つた。

『イリヤ・イリイチさんでしたの！』と、オリガは怦々しながら答へた。二人は立ち停つた。

『お變りはありませんか？』と、オブローモフは言つた。

『お變りなくつて？』と、オリガも言つた。

『何處へいらつしやるのです？』と、オブローモフは訊いた。

『別段、何處へも……』と、オリガは眼を伏せたまゝ言つた。

『お邪魔をしたんぢやありませんか？』と、オブローモフは訊いた。

『いゝえ、些とも……』と、オリガは不思議さうにチラリと彼を眺めて答へた。

『ぢや、あなたのお伴をしてもいゝでせうか？』と、オブローモフはオリガに燃えるやうな視線を投げて突然に訊いた。

二人は黙つて小路を歩いた。オプローモフの心臓は、教師の定規で叩かれた時にも、幹事の怖ろしい眼で睨まれた時にも、また今迄の生活の如何な場合にも、此の時ほど激しく鼓動したことはなかつた。彼は何事か言ひたいので、頻りに努力して見た、が、言葉は舌から出なかつた。たゞ心臓だけが不幸に衝突つた時のやうに異様に鼓動してゐた。

『あなたの許へアンドレイ・イワヌイチから手紙が来なくつて?』と、オリガは訊いた。

『来ました。』と、オプローモフは答へた。

『何と書いてあつて?』

『巴里へ来いつて。』

『あなた、何うなさいます?』

『行きます。』

『何時?』

『直ぐ……いえ、明日……仕度が出来次第。』

『何うしてそんなにお急ぎなの?』と、オリガは訊いた。

オプローモフは黙つてゐた。

『別荘はあなたのお氣に入らないのですか?それとも……ねえ、何故あなたは外國へいらつしやりたいの?』

(亂暴な人だわ!此度は外國へ行きたがつたりして!)と、彼女は考へた。

『私は何う云ふ譯か、苦痛で、焦々として、何かに焼かれてゐるやうですから。』と、オプローモフはオリガを見ずに囁やいた。

オリガは黙つたまゝ連翹の小枝を折り、其れで顔と鼻とを蔽ひながら其の匂ひを嗅いでゐた。

『嗅いで御覽なさい、本當に良い匂ひですわ!』と、オリガは言つて、其の小枝でオプローモフの鼻を蔽うた。

『あゝ、此處に鈴蘭があります!一寸お待ちなさい。探つてあげますから。』と、オプローモフは草の上に屈みながら言つた。『これの方が餘程良い匂ひです。野の香りと、森の香りとがしますよ。自然より偉大です。が、連翹は大抵、家の傍に生えてゐて、枝が斯う云ふ具合に窓の方に匂ひ寄つてゐるだけで、匂ひだつて厭な匂ひです。こゝら、鈴蘭の露はまだ乾いてゐませんよ。』

オプローモフはオリガに幾つかの鈴蘭を持つて來た。

『ぢや、あなた、レゼーダ(草の名)はお好き?』と、オリガは訊いた。

『いゝえ、餘り香が強すぎますからねえ。私はレゼーダも薔薇も好きではありません。それに、一體私は花を好かないのです。野原でさへさうですから……室になんか幾ら持つて來ても……芥になるだけです……』

『ぢや、あなたは室の中が清潔になつてゐるのを御好きなの?』と、オリガは捜るやうにオプローモフ

を見ながら訊いた。「埃はお嫌ひでせう！」

「嫌ひです。が、私は斯んな人間ですから……」と、オプローモフは咳やいた。(あゝ、性の悪い女だ!)と、彼は獨語つて附け加へた。

「あなたは巴里へ直行なさるのですか？」と、オリガは訊いた。

「さうです。シトリツが待ち兼ねてゐますからねえ。」

「ぢや、シトリツさんに手紙を持つて行つて下さいませぬ。私、書きますから。」と、オリガは言つた。

「ぢや、明日下さい。私は明日街へ行くんです。」

「明日？」と、オリガは訊いた。「何うしてそんなにお急ぎなの？誰かあなたを逐ひ遣りでもするやうだわねえ。」

「逐ひ遣られるのです……」

「誰に？」

「羞恥心に……」と、オプローモフは囁やいた。

「羞恥心に！」と、オリガは機械的に繰り返した。(さア、今、オプローモフさん、實に意外でしたわ……と言はう。)

「ですがねえ、オリガ・セルゲーウナさん」と、オプローモフは自分を勵まして言つた。「私は、あなたが吃驚していらつしやるだらうと……怒つていらつしやるだらうと……思つてゐるんです。」

(さア、今だわ……今が言ふ時だわ)オリガの心臓はひどく鼓動し出した。(けれど、あゝ、言へない!)オプローモフはオリガの顔を見て、彼女が何と出るかを知らうとした。が、彼女は鈴蘭と連翹との匂ひを嗅いでゐた。そして何と言つて良いか、何う爲れば良いかと惑つてゐた。

(あゝ、ソーニチカなら斯んな時には何か考へ出すのだが、私は本當に馬鹿だわ!何にも言へないわ……困つた事になつた!)と、オリガは考へた。

「私、すつかり忘れてゐたのよ……」と、オリガは言つた。

「私の言ふ事を信じて下さい。全く何の氣なしにあんな事を言つたのです……私は自分を抑へることが出来なかつたのです……」と、オプローモフは幾らか大膽に言つた。「若しあの時、雷が鳴つても、私の上に石が落ちて來ても、私はあれだけは言つたに違ひありません。何んな力でもあれを制へることは出来なかつたのです……何うか、私があんな事を故意と言つたのだと思はないで下さい。……私はあれを言つて直ぐ、自分の不注意な言葉を取り消したいと、どの位心配したか知れませんか……」

オリガは頭を垂れ、花を嗅ぎながら歩いてゐた。

「あれは何うか忘れて下さい。」と、オプローモフは續けた。「あれは間違ひなのですから、是非忘れて下さい……」

「間違ひですつて？」と、オリガは急に繰り返して顔を上げた。そして花を落した。

彼女の眼は突然に大きくなつて、驚きの色に輝いた……

『何うして間違ひなの?』と、オリガはまたも繰り返した。

『まあ、何うか腹を立てないで忘れて下さい。私は眞つ正直に言ひますが、あれはたゞ一時の衝動に過ぎないので……音楽による。』

『たゞ音楽による!……』

彼女の顔色はさつと變つた。二つの薔薇色の斑點が消えてその眼が曇つた。

(もうこれつきりだわ!あの人は不注意な言葉を取り消したから腹を立てることもない!……もうこれで良い……もう落着いたわ……以前の通りに話をしたり、冗談を言つたりすることが出来るわ……)と、オリガは考へながら側にあつた樹の枝をぐいと曳き千切り、その枝の一枚の葉を肩で引き離し、それから直ぐに枝も葉も路の上に投げ捨てた。

『あなたは怒つていらつしやるのではありませんか?忘れて下すつたのですか?』と、オプローモフはオリガの方へ屈みながら言つた。

『何をですか?あなた、何をお訊きなの?』と、オリガは昂奮して、殆んど泣き出したいやうな心持になつて答へた。そして彼の傍を離れた。『私、すっかり忘れて了りましたわ……ひどく忘れっぽいのですもの!』

オリガは口を噤んだが、何う爲て良いか分らなかつた。オプローモフにはたゞ突然オリガが悲しきうな顔をしたのは分つたが、其の原因は分らなかつた。

(あゝ!)と、オリガは考へた。(もうすっかり以前の順序になつたんだわ。何うか斯んな芝居は最う無ければいゝが!何うしたのでせう……あゝ、あゝ!私、一體何うしたのかしら?あゝ、ソーニチカ、ソーニチカ!お前は幸福な女だわねえ!)

『私、家へ歸りますわ。』と、オリガは突然に言つて、歩調を速めながら他の並木路の方へ曲つた。

オリガの聲は涙に曇つてゐた。が、彼女は泣くのを恐れてゐた。

『其方より、此方の方が近路ですよ。』と、オプローモフは言つた。(馬鹿だ)と、彼は悲しさうに自分に言つた。(打ち開けて了へばよかつたのに!反つて侮辱して了つた。あんな事は言はないでもよかつたのだ。あんな事は時が経つに従つて自でに忘れられて了ふものだ。もう斯うなりや取り返しはつかない。謝罪らなけりやならない。)

(私が悲しくなつたのは、屹度)と、彼女は考へた。(オプローモフさん、あなたがあんな事をなさらうとは、實に意外でした……と言へなかつたからだわ。先を越されたからだわ……「間違ひです!」つて。彼の人はまだ偽つてる!けれど、あの人は何と云ふ大膽な方だらう!)

『あなたは本當に忘れて下すつたのですか?』と、オプローモフは靜かに訊いた。

『忘れしましたわ。すっかり忘れしましたわ!』と、オリガは速口に言つて、家の方へ急いで行かうとした。

『では、あなたが怒つていらつしやらない徵に手を貸して下さい。』

オリガはオプローモフを見ずに彼に指先を差し出した。が、彼が其の指先に一寸觸るや否や、直ぐに